

人に戀をするか、或ひは單に私と結婚したことを後悔して別れ度くなつた場合には私にすぐに彼女に私
が外に女を拵へたといふ正式な告白書を書いてやつて、彼女の離縁の願ひを助けてやるといふ約束を
ね。それに若し後で私が約束に叛いて、その告白書を興へることを拒むといけないから、保證として結
婚式の日には十萬留の借用證書を彼女にやつて置いて、その告白書のことでも私がつむじを曲げた時には、
彼女はすぐに私の借用證書にものをいはせることが出来ますやうにして！ さういふ風にすれば萬事安
心で、私は誰の未來をも危くするといふことにはならないでせう——第一にそれが一つ。」

「そりやあの——何とかいつたつけね——ブレドボシロフが發明したことに違ひない！」とウエリチャ
ーニノフは叫んだ。

「へつ、へつ、へつ！」とパーウエル・パーウロウイツは質の悪い笑ひ方をした。

「あの人は何を笑つてるのでせう。當りました。ブレドボシロフの考へですが、いゝ考へぢやありませ
んか。馬鹿けた法律などはそれですつかり無力に成つてしまひます。勿論私はいつ迄も彼女を愛するつ
もりで居ますし、彼女も大いに愛して居ますが、利口な考へですよ。そして確かに立派な考へです。實
際十人が十人出来ることぢやないのですからね。」

「立派なところか、考へても厭なことに私には思はれますがね。」

青年は肩をすくめた。

「さうおつしやつても私は驚つきはしません。」と、一寸の間黙つて居てから彼はいつた。「そんな事に

驚いたのは昔のことです。ブレドボシロフたつたら一も二も無く——長い間河にもしず、馬鹿々々しい
生活をして居たので、極く普通の感情や思想が腐つちやつて、それでこの上もなく當り前のことが分ら
なくなつたのだといふことでせうよ。だが御互ひに分りつこないでせう。何しろ皆なはあなたを賞めて
居ましたが……あなたは五十だと思ひますが如何ですか。」

「どうか用のないことは抜きにして下さい。」

「詰らないことをいつて失禮しました。怒らないで下さい。何も悪氣があつて聞いたのぢやありません
から。でね——私は決して、あなたがおつしやつたやうな、行く／＼大金持ちに成れる男ぢやありませ
ん實際あなたは變なことをおつしやつたものです！ 私は御覽に成る通りの人間ですが、自分の未來は信じ
切つて居ます。私は英雄にも人類の恩惠者にも成らないでせうが、自分と妻とを養つて行くことは出来
ませう。勿論今私には何もありません。私は子供の時から彼處の家で養はれたので……」

「といふのはどうした譯です。」

「ね、私はザフレビニンの奥さんの遠縁のものゝ息子なのですが、九つの時私を残して皆な死に果てま
しまつたので、あの老人が私を引き取つて、それから後で私を高等學校へ遣つて、呉れたのです。實際
あの人は好い人ですよ……」

「分つて居ます。」

「頭は少し古いが、親切な人ですよ。勿論さうあの人の世話に成つてから永いことに成りますから、私

も自分で生活の道を立て、誰にも迷惑を掛けないやうに成りたいものと成つて居ます。」

「獨立してどの位に成るのです。」とウエリチャーニフは訊ねた。

「四月に成ります。」

「成る程それで分りました。あなたとナーチャさんとは子供の時から御友達ですね！ で、職はありましたか。」

「え、個人の口ですが、公證人の役所で、月に二十五留貰つて居ます。勿論腰掛けの積りですが、申し込んだ時には、それすらなかつたのです。その頃は月に十留で鐵道に勤めて居ましたが、それも一寸の間勤めただけです。」

「結婚を申し込んだといふのですか。」

「え、正式に申し込みました。それもずつと前、もう三週間以上に成ります。」

「で、どうだつたのです。」

「あの老人は初めは大笑ひして居りましたが、あとでは恐らく怒つて、彼女を二階へ閉ぢ込めてしまひました。だが勇敢にもナーチャは屈伏しませんでした。だがそれといふのも、私が鐵道へ出る前に、私を入れて呉れた彼の役所の仕事を止めて、少し機嫌を損じて居たからのことです。彼は實際極上の老人ですよ。家では無邪氣で、面白い人です。ですが、役所へ行つたが最後大變ですよ！ 王位にましますチョーヴ見たいですよ！ 私は無論役所で彼の態度が面白くなかつたからではない、止めた主な原因は

屬官長の助手のせいだといふことは彼に知らせました。その助手は私が彼に對して無作法な眞似をしたと思ひ込んだのです。私は只彼は發達して居ないといつただけでした。私はそこを去つて、今では公證人のところに居ます。」

「彼の役所に出て居た時は澤山貰つて居ましたか。」

「いや私は本官ではありませんでしたから！ 老人は定つた手當を呉れて居ました。實際好人だと思ひますが、それだからといつて、私達は降参はしません。勿論二十五留では女房を養ふことは出来ませんが、私はちきザヴィレイスキイ伯の打つちらかしてある所有地の管理に與かるつもりですからさうしただらすぐに三千留に成ります。でなければ辯護士に成ります。この頃の人はしよつ中訴訟を起して居ますからね……おや！ ひどい雷ですね！ あらしに成るでせうよ。早く來ることが出来てなかつた。歩つて來たのですよ。凡んど走り通しで参りましたよ。」

「だか若しさうなら何時ナジエージダ・フョードセエヴァさんといろ／＼相談することが出来たのですか。殊にあそこの家であなを入れられないのでしたら。」

「垣根越しにだつて話すことが出来るぢやありませんか！ あの赤毛の娘に氣がつかましたか。」といつて彼は笑つた。「彼女は大いに私達の爲めに働いて呉れますよ。マリヤ・ニキチシュナもね。あ、あのマリヤニチシュナは蛇見たい女ですよ！……何だつてびく／＼していらつしやるのです。雷が恐いのですか。」

「いや、気分が悪いので。非常に気分が悪いので……」

ウエリチャーニノフは本當に胸が痛くつて閉口して立ち上つたが、もう部屋を歩き廻ることも飽きが来た。

「ぢや御邪魔でせう……御心配なく、今失禮しますから！」

さういつて青年は椅子から跳び上つた。

「邪魔ぢやありません。大したことはありませんから。」とウエリチャーニノフは丁寧な口調でいつた。

「何でもないことぢやあない！『コピリニコフの腹痛を覚えし時に……』シユチエルドリンを憶えていらつしやいますか。あなたはシユチエルドリンは御好きですか。」

「好きです。」

「私も好きですよ。ね、ワシリイ……いやさうぢやない、パーウエル・パウロウイツチさん、片をつけませう！」と彼は凡んど笑ひさうに成つて、パーウエル・パウロウイツチの方を向いた。「もう御分りに成るやうに簡單明瞭に申し上げますが、あなたは明日私の居る前で、あの年取つた連中にナジエージダ・フョードセエヴナに關するあなたの主張をすつかり、正式に撤回することを承諾して呉れますか。」

「いや決して。」パーウエル・パウロウイツチも堪え兼ね、激昂した様子で席から立ち上つた。「そんな話は御免蒙り度いもので……子供らしい、馬鹿げた話ですから。」

「氣をつけた方がいゝでせう。青年は人を馬鹿にしたやうな微笑みを浮べ、警めるやうに指を挙げた。

「計算違ひをしないやうにして下さい！ さういふ計算違ひをするとどんなことに成るか分つてますか。注意をして置いて上げますが、九ヶ月経つて、いろんな入費を使ひ、骨を折つてから、此方へ歸つて來ても、あなたはどうしてもナジエージダ・フョードセエヴナのこととは諦めなければならなくなるでせう。若し諦めないならば、あなたに一層災難が振りかゝりますよ。さう成るのがけりですよ！ 注意

をして上げなければなりません。あなたが何も得られないのに人の邪魔をして、まぐさ桶の犬

イッツプ物語より出て、まぐさ桶の中に座り込んで、自分で食へもしない食物を馬にも食はせない意地悪の犬のこと。

見たいな方ですよ。——たゞ譬へにいつたゞけですから怒らないで下さい。御氣の毒だから申し上げますが、よく思案して下さい。一生に一度は道理に従つてよく反省なさつたらいいでせう。」

「御説法はもう御容赦にあづかりたいものです！」とパーウエル・パウロウイツチは憤然としていつた。「あなたの汚ない當てこすりに就いては明日處理をします、嚴重な處置をします！」

「汚ない當てこすりですつて。一體どういふことです。あなたこそ不潔です。だが、明日迄待つことに賛成します。然し若し……おや又鳴るな！ さいなら、あなたと御近附きに成れたことをうれしく存じます。」——彼はウエリチャーニノフに向つてうなづいて、走り立つた。あらしの來ない前に歸り、雨に逢はないやうに急いで居る様子だつた。

第十五章

決算

「分りましたか。分りましたか。」パーウエル・パウロウイツチは、青年が出て行くとすぐにウエリチャーニノフのところへ飛んで行つた。

「分りました。あなたには運が向いて居ません！」ウエリチャーニノフはうつかりさういつた。

段々痛みが募つて来て居る胸の痛みに苦んで、腹を立て居なかつたら、そんなことはいはなかつたらうが。

「腕環を私に御返しに成らなかつたのは氣の毒に思はれたからなのでせう。」

「返す間が無かつたからで……」

「眞實の友のやうに心から私に同情して下さつたのでせう？」

「さうです、氣の毒に思ひましたよ。」とウエリチャーニノフは憤然としていつた。

とはいへ彼は簡単に腕環が返された時の話、ナジエージダ・フョードセエヅナが凡んど強制的に返すことの手傳ひをさせたことを話した。

「分つたでせう。そんなことでも無ければ私は決して受取りはしなかつたのですよ。それ以上に、私は實に不愉快でしたよ！」

「とろ／＼と成つて受取つたのでせう。」パーウエル・パウロウイツチはくすく／＼笑つた。

「馬鹿な、だがね、私が立役ではなく、この事件には外に關係して居る連中があるといふことが御分りに成つたでせう。」

「それにしても、あなたもとろ／＼と成りましたよ。」

パーウエル・パウロウイツチは腰掛けてコップに酒を注いだ。

「あの碌でなしに降参すると御思ひですか。奴をなます切りにしてやりますさあ！ 明日出掛けて行つて、奴を片づけてやります。あの野郎を子供部屋からいぶし出してやります。」

彼は凡んど一息に飲み乾して、又一杯注いだ。實際彼は普段とは違つた、勝手な、氣樂な態度に成つた。

「あゝ、ナーデン・カロサーシエンカ、可愛い奴等だ。へつ、へつ、へつ、へつ！」

彼は家も狂はむ許りに怒つた。さつきよりも大きい雷鳴が轟ろき、續いてびか／＼と稲妻が光り、雨はさんざと降り出した。パーウエル・パウロウイツチは立ち上つて、開いて居る窓を閉めた。

「奴はあなたに雷が恐いかといつて尋ねましたね。へつ、へつ。ウエリチャーニノフは雷が恐いかといつてね！ コピリニコフ——何でしたかね——コピリニコフが……それから五十歳か等といふのは何の

ことでしたつけかね。憶え一居ますか。」とパーウエル・パウロウイツチは悪魔の如くにせゝら笑つた。

「腰が据つた鹽梅ですね！」ウエリチャーニノフは胸が痛いので凡んどはつきりものをいふことが出来なかつた。「私は寝ますから、どうぞ御好きなやうに。」

「こんな天気では、誰だつて投げ出すことが出来ないぢやありませんか！」とパーウエル・パウロウイツチは、不平らしい調子で答へたが、不平に思ふ口實があるのを喜んで居るやうな様子だつた。

「さうく、座つて飲んで……好かつたら宿つていらつしやい！」とウエリチャーニノフはつぶやいた。彼はソファアに體を伸して、微かなうなり聲を立てた。

「宿れですつて、恐くはありませんか。」

「何が？」とウエリチャーニノフは突然頭を擧げていつた。

「いや何でもありませんが、この前あなたにひどく恐がりましたね、それとも私がさう思つただけですか……」

「馬鹿！」ウエリチャーニノフは思はずさういつた。彼は怒つて頭を壁の方へ向けた。

「はいく」とパーウエル・パウロウイツチは答へた。

病人は寢てから一分も経つと、忽ち眠に入つた。體がさんざん悪く成つて居るところへ持つて来て今日は氣を使ひ過ぎたもので、にわかにひどく悪く成つて、彼は子供のやうに弱々しく成つた。だが又痛

みが頭をもたげて、眠りや疲れをも追つ拂つた。一時間後、彼は眼を覺して、苦しげにソファアから起き上つた。あらしは既に静まつて居た。部屋は烟草の烟で一杯で、テーブルの上には明瓶が立つて居り、パーウエル・パウロウイツチは外のソファアで眠つて居た。彼は頭をソファアの薄團の上のせ、着のみ着の儘、靴も脱がないで、おふむきに寢て居た。ロールネットはポケットからじり出て、凡んど床に届かむ許りに垂れ下つて居た。帽子はそのそばの床の上に轉つて居た。ウエリチャーニノフは不機嫌な顔して彼を見たが、起さうとはしなかつた。痛みに悶え、じつと寢て居ることが出来なくなつたから部屋を歩き廻り乍ら、うなつて、おのが苦痛に就いていろく思ひを廻らした。

彼はその胸の痛みが氣に成つたが、それも無理からぬことだつた。彼はずつと前からこの病氣の下地があつたが、一年か二年置きに起るに過ぎなかつた。肝臓から來るといふことに承知して居た。最初はぼんやりした、烈しくはないがいろくするやうな、壓へつけられるやうな感じが、何だが、胸のある點、肩胛骨の下か、もつと上のところに集中するが如くであつた。刻一刻と痛みが募り、小止みになしに十時間も續くことがあつて、痛みが遂に極點に達し、苦しいので辛抱し切れなくなつて、病人は死を夢みるやうにも成るのであつた。この前、一年前に起つた時、十時間苦んでから痛みが止つた時には、寢床に横つた儘凡んど手を動かすことも出来なかつた程衰弱したので、醫者もその日一日は、小つちやな赤ん坊のやうに、軽い御茶を茶匙に二三杯と、汁に浸したパンを食べることしか許さなかつた。この持病はいろくな原因で起るのだ。だが、神経が變に成つて居る時の外は決して起つたことがなかつ

た。この持病が靜まる、その靜まり方も變だつた。最初に、最初の三十分間で濕布をした丈で抑へることが出来て、すぐに跡方もなく靜まることもあれば、この前の時のやうに何をしても駄目で、何度も續け様に、嘔氣を催してから初めて痛みが靜まることもあつた。あとで醫者は何か毒に當つたのだと思つたと打ち明けた。未だ随分朝迄には間があつたが、夜醫者を迎ひにやることは好まなかつたし、醫者は好きではなかつた。彼はとうとう我慢が出来なくなつて、聲を立てゝうなり出した。彼のうなり聲でパーウエル・パウロウイツチは眼を覺した。彼はソフアーに起き上つて、二つの部屋を凡んど走るやうにして此方へ來たり、向ふへ行つたりして居るウエリチャーニノフを見守り乍ら、驚ろき、あはてゝ、暫しの間そのうなり聲を聞いて居た。一びんの三鞭がうんと、普段よりも餘計に利いたらしく、暫らくして初めて彼は心が落ちついた。やつと彼は様子が分つて、ウエリチャーニノフのところへ駆けつけたが、ウエリチャーニノフは彼に答へて何か口の中でいつた。

「そりや肝臓が悪いのですよ！」とパーウエル・パウロウイツチは突然元氣に成つて叫んだ。「ビョートル・クジミツチ・ポロスーヒンも肝臓が悪くつてよくさういふ風に苦んだことがありました。濕布をしなくちやいけませんよ。ビョートル・クジミツチはいつも濕布をしました……それで死ぬこともありませうよ！ マーヅラを呼びに行きませうか。」

「いやいゝのです！」ウエリチャーニノフはいら／＼して。手を振つて彼を去らせやうともとめた。「何もして下さらなくても。」

だが、何故かパーウエル・パウロウイツチは、自分の息子を救はうとでもして居るかの如くに、夢中に成つて居る様子だつた。ウエリチャーニノフが反對するのをも意に介せず、彼はどうしても濕布をして、それから又「只熱い丈けではなく、煮え繰り返つて居る」軽い御茶を二三杯飲まなくてはいけないといつた。彼は許しを待たずにマーヅラのところへ駆けつけ、いつもがらんどに成つて居る臺所で彼女と一緒に焚附けの支度をして、サモイワを沸し出した。又一方、病人を床へ就かせ、着物を脱がせ、さしこの薄團でくるんでやつた。二十分と経たない内に御茶と濕布の用意が出来上つた。

「熱いですよ、やけどする程熱いですよ！」とナフキンに包んだ温めた皿をウエリチャーニノフの痛む臍に當て乍ら、凡んど夢中でいつた。「あてもめんがありませんが皿の方が確かにいゝのですよ。ビョートル・クジミツチにも皿を當てました。現に私がそれを見ました。現にこの手で當てゝやりました。これで死ぬことがありますからね。御茶を御飲みなさい。ぐつとお飲みなさい。やけどしたつていゝちやありませんか。命が大事ですよ……やけど位を氣にしてちや駄目ですよ。」

半分眠つて居るも同前のマーヅラはすつかり面喰つちやつた。三四分毎には必らず皿を取つ換えるのだから、三枚皿を換え、二杯目の御茶を一息に飲み乾したら、ウエリチャーニノフはにわかにも樂に成つた。

「それで痛む場所さへ變つて呉れ、ば占めたものだ！」とパーウエル・パウロウイツチは叫んで、悦ばしさうに新しい皿ともう一杯御茶を取りに駆けて行つた。

「樂にさ。することが出来たら。痛みを抑へることが出来さへしたら。」彼はしよつ中そんなことをいつて居た。

三十分後には痛みは餘程減じたが、病人は非常に疲れて居て、パーウエル・パーウロウイツチが願つても、「もう一つ丈け氣持ちのいゝ、小さな皿を辛抱する」とを拒んだ。彼は眼の前が薄暗く思はれた程弱つて居た。

「寢て下さい。寢て下さい。」と彼は微かな聲で繰り返した。

「えゝ」とパーウエル・パーウロウイツチは承知した。

「今夜は宿つていらつしやるでせう……何時です。」

「二時です。もう十五分です。」

「今夜は宿つてらつしやるでせう。」

「宿つて行きます。」

一分後病人は又パーウエル・パーウロウイツチを呼んだ。

「あなたはね」パーウエル・パーウロウイツチが驅けて来て、ウエリチャーニノフの上にかゝむと、ウエリチャーニノフはさうつぶやいた。「あなたは私よりもいゝ方です！……すつかり分りました。有難う。」

「御休みに成るといゝ。」とパーウエル・パーウロウイツチは小聲でいつて、自分のソファアに忍び足で

急いだ。

病人は眠りに就き乍ら、パーウエル・パーウロウイツチが靜かに自分の床を取り、着物を脱ぐ物音を聞いた。最後に蠟燭を消し、病人の眼を覺すことを恐れて、凡んど息を殺し乍ら、ソファアに身を横へた。

確かにウエリチャーニノフは眠つて居た蠟燭が消えたとすぐに寢入つたのだが、彼はこのことを後ではつきり覺えて居た。だが眠つて居る間、眼が覺めたその瞬間迄、彼は眠つては居ず、疲れて居るのに寢つけないやうな氣がして居た。遂には自分はいふなされて居るのだ、うなされて、居るので、現實ではないといふことを充分知つて居乍ら、自分の廻りに集つて居る幻を追ふことが出来ないやうな氣がし出した。幻といふのは皆よく知つて居る人々の姿で、自分の部屋は人で一杯に成つて居るやうな氣がし、廊下へ出る戸は開いた儘に成つて居て、皆なが群つて入つて来て、階段にも人が込み合つて居た。部屋の真中に据えてあるテーブルには——一ヶ月前に見た同じやうな夢と同様に、一人の老人が腰掛けて居た、あの夢と同じやうにこの男はテーブルに肘を突いて座し、口を利かなかつたが、今度は彼は喪章の着いて居る丸い帽子を冠つて居た。「おや！あの時の男もパーウエル・パーウロウイツチだつたか知らん。」とウエリチャーニノフは思つたが、この黙つて居る男の顔をちらと見て、いや、決してさうぢやないと思つた。「何だつて喪章を着けて居るのだらう。」とウエリチャーニノフは思つた。テーブルの周圍に群つて居る人々のさわぎ、話し聲、叫び聲は大變だつた。これ等の人々は前の夢よりもつとひどくウ

エリチャーニノフに對して激昂して居り、彼に向つて拳を振り、一心に成つて何か叫んで居たが、何のことやら、はつきりとは分らなかつた。「いやうなされて居るのだといふことは無論分つて居る！」と彼は思つた。「寢就かれなくつて、今起きたのだといふことは分つて居る。横に成つて居ることが厭に成つたから……」だが叫び聲や、人間や、彼等の所作があまり生き寫しで、眞實だつたから、疑惑のとりこに成ることがあつた。「これは本當にうかされて居るのか知らん。おや！ この連中は俺に何の用があるのか知らん。だが……若し幻影でないとしたら、この騒ぎにこれ迄パーウエル・パーウロウイツチが眼を覺さないといふ筈はあるまい。彼はそのソファアに寢て居る！」とう／＼あの夢と同じやうに又何か事が持上つた。皆な階段に向つて突進し、廊下に立錐の餘地も無く集つた。といふのは別の群衆が部屋へどん／＼入り込まうとして居たからだつた。その連中は何か大きな重いものを持つて來た。彼はそれを運んで來る連中の足音がひどく階段に轟き、彼等が息せき切つて慌たゞしく味ひ交はして居る聲を聞くことが出來た。部屋の中に居る連中は皆、やあ持つて來るな。持つて來るな。」と叫んだ。——彼等の眼は輝き、ウエリチャーニノフをじつと見た。彼等は皆おどすやうに、又意氣揚々として階段の方を指した。これは現實で幻ではないといふことにもう疑ひを抱かなくなつて、彼は人の頭を越して覗いて、階段を運び上げて來るものを見やうと思つて背伸びをした。彼は胸がどき／＼したが、かの最初の夢と同じやうに突然彼はベルが烈しく三度鳴るのを聞いた。そして今度も單に夢だけとは思はれない程、はつきりした、眞實の、間違ひのない音だつた。

だが彼はその時眼を覺して走せつけたやうに戸口に走せつけはしなかつた。如何なる考へが彼の最初の運動を導いたが、第一その時何か考へがあつたかどうかそれは分らないが、誰か彼の爲す可きことを教へたやうな鹽梅式だつた。彼は寢床から跳び出し、自分を守護し、攻撃を拂ふやうな鹽梅におのが手を自分の前に差し伸し、パーウエル・パーウロウイツチが寢て居る方にすか／＼突進した。彼の手は彼の上に差し伸されて居た外の人の手に直ちに觸れた。だから誰か既に彼の上にかゞむやうにして立つて居たのだ。カーテンが懸つて居たが、まつ暗ではなかつた。といふのはさういふカーテンのない外の部屋から微かな光が洩れて居たから。突然烈しい痛みと共に、何かで彼の左の手の手の平と指とが切れた。そして彼はすぐにナイフか剃刀の身のところを促へて、手の中でそれをぎゅつと握つて居たのだといふことが分つた……途端、何ものかどどさりとといふ音を立て、床の上に落ちた。ウエリチャーニノフは半分パーウエル・パーウロウイツチの三倍も強かつたらうが、二人の間の争闘は長い間、まる三分間も續いた、彼は間も無く彼を床の上に轉がし、彼の手を後ろに廻したが、何故か知ら彼は彼の手を結えてやらなければならぬと思つた。傷ついた左の手でこの人殺しを抑へて、右の手で窓のカーテンの綱をさぐり出したが、長い間目つからなかつたが、とう／＼それをとらへて、窓から引きちぎつた。あとで彼はこれをするのにひどく骨が折れたのに驚いた。その三分間の間、孰らも一言も口を利かなかつた。聞えるものは二人の忙しない息使ひと、ひそかな争闘の物音許りであつた。とうとうパーウエル・パーウロウイツチのかひたを後ろへねぢて、結えてからウエリチャーニノフは彼を床の

上へ残して立ち上り、窓のカーテンを開け、錠戸を引き上げた。人無き町は既に明らかつた。窓を開けて、彼は新鮮な空気を暫らく吸ひ込んで居た。四時少し過ぎだつた。窓を閉めて、彼は急いで戸棚迄行き、綺麗なタオルを取り出し、血を止める爲めにそれでぎゆつと左手を結えた。彼の足許には開いた剃刀が敷物の上に横はつて居た。彼はそれを拾つて、それを閉ぢ、パーウエル・パーウロウイツチのソファの側の小さなテーブルの上に朝から忘れてあつて剃刀入れに入れ、そして筆筒の中にしまひ込んだ。それ等のことをしてしまつてから初めて彼はパーウエル・パーウロウイツチのところへ行き、彼を調べ出した。

一方パーウエル・パーウロウイツチはやつと起き上つて、眩掛椅子に腰掛けた。彼はシャツの外何も着て居なかつた。靴もはいて居なかつた。彼のシャツの後ろと神のところとは血に濡れて居たが、それは自分の血ではなく、ウエリチャーニノフの傷した。手から出たものだつた。勿論パーウエル・パーウロウイツチに違ひはなかつたが、若し偶然この時の彼に出會はす人があつたら、或ひは彼だといふこと分らなかつたかも知れない。それ程彼の全體の様子は變つて居た。彼は手が後ろで結えられてあるので眩掛椅子に無格好に座つて居たが、その顔は異様で疲れて居て、緑色を帯び、時々全身がふるへた。彼はウエリチャーニノフを打守つたが、つやのない、ぞんざいな眼付きをして居た。突然彼はぼんやりした笑を浮べ、テーブルの上に立つて居る水のびんをあごで指して、おとなしい、半ば私語くやうな調子でいつた――

「水が欲しいのですが。」

ウエリチャーニノフはコップに水を注いで彼が飲むやうに差し出した。パーウエル・パーウロウイツチは一心に成つて水の方へかゞみ、ごく／＼と三度飲んでから頭を擧げて、彼の側にコップを手に持つて立つて居たウエリチャーニノフの顔にじつと見入つたが、一語もいはずに又飲み出した。飲み了ると彼は深い溜息を吐いた。ウエリチャーニノフは枕を取り上衣を持ち、パーウエル・パーウロウイツチを元の部屋に閉ぢ込めて、他の部屋に入つた。

痛みは既にすっかり消失したが、不思議な力を現した間断的努力の後又ひどく疲れて居るのを意識した。彼にありし事どもを思ひ返さうとしたが、頭が亂れて居た。激動が餘りに大きかつた十分間かそこらも眼の前がぼんやりして居て、それからびくりとして、眼を覺し、あたりの様子に気がつき、自分の手が血でよごれたタオルでしばられてひり／＼痛んで居ることに気がつき、熱心に、熱狂的に考へに沈むのだつた。彼は一つのはつきりした結論に到着した。――即ちパーウエル・パーウロウイツチは彼のどを切らうと思つたに相違無かつたが、つひ十五分前には、自分がそんなことをする氣に成るものとは知らなかつたらうといふ結論だつた。剃刀入れは昨夜彼の眼に止つたゞけのことで、その時にはそれに就いて別に何の考へも浮んだのではなく、只彼の記憶に残つて居たのに過ぎなかつたらう。(剃刀はいつも筆筒の中にしまつてあつたのだが、昨日の朝、時々するやうに自分の口ひげと頬ひげを剃らうと思つて取り出したのであつた。)

「若し彼がずつと前から私を殺さうと思つて居たのだつたら、彼は小刀かピストルを用意して居たらう。昨夜迄見たことのなかつた剃刀等を當てにはしなかつたらう。」そんなことも考へた。

遂に六時が鳴つた。ウエリチャーニノフは體を起して、着物を着て、パーウエル・パーウロウイツチのところへ入つて行つた。戸を開けて、俺は何故パーウエル・パーウロウイツチを追つぱり出さずに閉ぢ込めたのだらうと思つた。驚いたことには犯罪人はすっかり身じまひをして居た。大方どうかして繩をほどいたのだらう。彼は駄掛椅子に腰を下して居たが、ウエリチャーニノフが入つて來るとすぐ立ち上つた。彼の帽子は既に彼の手にあつた。彼のおどくした眼は急いで。

「何もいふて下さるな。何をいつたつて何にもならない。何もいふ必要はない。」
といふやうに思へた。

「行つて下さい。」とウエリチャーニノフはいつた。「腕環を持つて行つて下さい。」と彼は彼の後ろから呼び掛けて附け加へた。

パーウエル・パーウロウイツチは戸のところから引き返して、腕環と入つて居る箱をテーブルから取り、それをポケットに入れて、階段へ出た。ウエリチャーニノフは彼の後ろから錠を掛けやうと思つて戸のところ立つて居た。二人の眼が最後に出くわした。パーウエル・パーウロウイツチは突然立ち止つて、二人は五秒間程、躊躇するやうに互ひに眼を探るやうに見合つたが、遂にウエリチャーニノフが力無げに手を打ち振つた。

「行つて下さい！」さう彼は小聲でいつて戸に鎖を下した。

第十六章

分 解

實に彼はほつとした。何か知らぬ事が片つき、恐しい意氣消沈が永遠に消失した。さういふ氣がした。それは五週間も續いて居たのだつた。彼は手を舉げて、血に濡れたタオルを見て、一人つぶやいた。「これで、何も彼も終りを告げたのだ！」そしてその朝一杯、この三週間以來初めてのことだつたが、切れた指の血がその不幸をも埋合せることが出来るやうにリーザのことは凡んど考へなかつた。

彼は自分が恐る可き危険を遁れたといふことをはつきり知つた。「かういふ連中は」と彼は考へた。「一分間前には人殺しをするのかしないのか自分でも御存知のないかういふ連中はふるふる手にナイフを持ち、その指に熱い血潮迸しすると、人ののどを切ることなどは躊躇せず、頭迄も切り取つてしまふ。めしうどぢやあないが「片づけて」といふ。さうなのだ。」

彼は何かしなければならぬ。然らずば彼の身にすぐにも何事かが起るに違ひないと思つて、家にじつとして居ることが出来なく成つて表へ出た。彼は町をさまよひ歩いて待つて居た。」

彼は誰かに會ひ、知らない人でもいゝから話をしたくて堪らなかつた。それに導かれて、彼は醫者のことを考へ、手をちやんと結えなければならぬといふことに気がついた。彼の昔からの知り合ひの醫者は傷を調べて興味を以てどうしてこんな傷をしたのかと訊ねた。ウエリチャーニフは笑つて仔細を語らうと思つたが、それは差し控えた。醫者は脈を見て、昨夜の病氣のことを聞いて、持ち合せて居る鎮靜劑を飲むことをすゝめた。彼は切り傷のことは、「別段厭な結果が生じる氣遣ひはない。」といつて安心させて居た。ウエリチャーニフは笑つて、既にこの上なく氣持ちのいゝ結果をもたらして居ますと語り出した。すつかり打ち明けて話したいといふ凡んど抑へ切れぬ欲求がその日の内に二度も訪れた。一度は、茶話で話を始めた全然知らない人に對してであつた、彼はこれ迄さういふ場所では知らない人と口を利く等といふことは出来なかつたのに。

彼は新聞、買ひに店へ入つて行つたり、洋服屋へ行つて、着物を誂へたりした。今も尙バガレトリツエフ家を訪ねることは氣が進まなかつた。彼は彼等のことを考へなかつた。又實際彼等の別荘へ出掛け、給仕と一緒に御飯を食べる連中に話し掛け、酒を半びんも飲んだ。昨日の病氣が又訪れるかも知れないといふやうな心配は起らなかつた。彼はひどく疲れて眠つてから一時間半経つて後、寢床から跳び起き、加害者をやにわに床の上に投げた時に病氣はすつかり姿を隠したと信じて居た。夕方に成つて彼はくらく／＼目まひがして来て、眠つて居た時に經驗したやうな恍惚状態に陥つた。彼が歸宅した時はた

それが時だつた。入つて来て、自分の部屋が恐いやうな氣がした。自分の部屋が恐しいやうな、無氣味なやうな氣がした。彼は自分の家の中を何處も彼方へ行つたり此方へ來たりして、これ迄凡んど入つたことの無い臺所へも入つて見た。「こゝで彼等が昨日血を暖めて居たのだな。」と彼は考へた。彼はしつかり戸に鎖を下して、普段よりも早く蠟燭を點した。戸に鎖を下し乍ら三十分前に門番小屋を通つて、マールラを呼んで、或ひはやつて來たかも知れないと思つたので留守中にパーウエル。パーウロイツチがやつて來はしなかつたかと訊ねたことを思ひ出した。

氣をつけて鎖をかつてから簞笥を開けて剃刀入れを取り出し、も一度見るために剃刀を開いた、白い骨で出來た手の上には微かに血のあとが残つて居た。彼は剃刀を入れものゝ中に藏めて、それを再び簞笥の中へしまひ込んだ。氣がさして來た。すぐに床へ入らなければならぬ、でないといふ「明日に差しつかへる」と思つた。彼は何故か知ら、翌る日を重大な「決定的」の日のやうに思つた。

だが町中でその日一杯彼に付き纏つて居た考へがしつこく彼の病的な頭に群がり、押し合つて、彼は考へ、考へ、考へ續けて、長い間眠ることが出来なかつた……

「彼が俺を偶然殺さうとしたのだとして」と彼は考へ續けた。「さういふ考へが執念に取つつかれた時の空想としてでも、彼の頭に浮んだことすあつたのたうか。」

彼はその問題を變な風に解決した。即ち「パーウエル。パーウロイツチは彼を殺さうとは思つたが、實際殺さう等といふ考へは彼の頭に浮んだことはなかつた。」簡単にいへば「パーウエル。パーウロイツ

ツチは彼を殺さうとは思つたが、自分が殺したがつて居ることを意識はしなかつた。譯の分らぬやうなことだが、實際だ。」とウエリチャーニノフは考へた。「彼は實際職を得やうと奔走もしたし、バカウトフに會はうと思つて駆けつけて彼が死んだ時にはむかつ腹を立てたけれども、此方へ來たのは職を得る爲めでもなければ、バカウトフに會ふ爲めでもなかつた。彼はバカウトフを木つ葉同様に思つて居た。彼は俺に會ひに來たのだ。リーザを連れて……」

「俺は奴が俺を……殺すと思つて居たか知らん。」彼はさうだ、俺はそれに気がついて居た、バカウトフの葬式について行く馬車の中で彼を見てからそれに気がいつて居たと思つた。「俺は何だか何ものかを待ち設けては居たが、然し勿論……奴が俺を殺すとは思はなかつた！」

「あれは本當なのか知ら。」と彼は突然枕から頭をもたげ、眼を見開けて又叫んだ。「あの……氣違ひが昨日あてはふるへ、拳骨で胸をなぐつて自分の戀の話をした、あれは本當のことか知ら。」

「あれは實際のことだつた。」と彼は思案し、解剖を續け乍らきめた。「T——の Quasimode は自分の女房の色男を愛することが出来る程馬鹿でもあり、又高潔でもあつたのだ。奴はその色男のことで、二十年間も、何も怪しいことに気がつかなかつた！ 彼は九年間も私のことを尊敬して考へ、私の記憶をはぐくみ、私の「いつたこと」をいろ／＼考へて居た。へん！ 俺はそんなことは少しも知らなかつた！ 彼が昨日いつたことは嘘ぢやあない！ だが昨日自分の感情を公言し、「決算をしやうぢやありませんか。」といつた時には俺を愛して居たのだらうか。さうだ、奴が俺を愛して居たのは憎しみからだつたの

だ。さういふ愛が最も強い愛だ……」

「勿論俺はT——で奴にすばらしい印象を與へたかも知れない。いや與へたに違ひない。彼は俺が哲人的な孤獨の内にある彼にあまりに強い印象を與へたので、俺を百倍も過大視したのだ。……如何なる點で俺が彼に印象を與へたか分つたら面白いのだが。俺の綺麗な手袋と、そのつけ方を知つて居たのとで感心したのかも知れない。Quasimode は審美的なことは何でも好きだからな。へッへッ！ さうぢやあないか！ 氣高い人、殊にあゝいふ「永遠の夫」には手袋だけで充分なことがよくある。あとは彼等自身で千度も補ひを附けて、君のごくつまらない欲求を満す爲めに喜んで君の爲めに戦ふ。俺の魔力に對して奴は何といふ考へを抱いて居たことだらう！ 奴にこの上ない印象を與へたのは俺の魔力だつたかも知れない。それから彼の「あの男もさうなら……誰を信じる事が出来やう！」といふ叫び。さういふ叫びの後に野獸に成るといふことはさもありさうなことだ！……」

「ふむ！ 奴はこの上なく卑劣に奴がいつたやうに私を抱いて、泣く爲めに」やつて來る——といふのは、奴は俺を殺す爲めにやつて來乍ら、「俺を抱いて泣く」爲めにやつて來たと思つて居たのだ。……奴はリーザ迄つれて來た。だが若し俺が奴との手を取り合つて泣いたら、或ひは俺を許してくれたかも知れない。奴は俺を許したくて仕方がなかつたから！……一つ激動を食ふとそれ等が酔つばらひの道化やポンチ繪、自分の非行に對する胸の悪く成るやうな、女々しい泣き言に變つてしまつた。(あの角！ 奴が額のところに拵へたあの角！) 奴はふさげて居たが、思つたことを残らず話す爲めに故意と酔つばら

つてやつて来たのだ。酔つばらつて居なかつたら奴だつてあんな事をする筈がない……それに奴は實際道化ることが好きなのだ！ 奴に俺にキツスさせた時にも喜んで居なかつたか！ 然し奴にはその時結局俺を抱くことに成るか、俺を殺すことに成るかは分らなかつたのだ。勿論、一番いゝのは両方をすることだつたといふことは分つた。それが一番自然な解決だつた！ 實際自然は怪物が嫌ひで、それ等は自然な解決で打ちこわす。最とも奇つ性な性物は高尚な感情を抱いて居る怪物だ。パーウエル・パーウロウイツチよ、俺はそのことを個人的な経験で知つて居るぞ！ 怪物に對しては自然は優しい母親ではなくて繼母だ。自然は片輪を生むが、それを憐れまずに罰するが、それも道理だ。パーウエル・パーウロウイツチよ、君や私のやうな人間はいふ迄もなく、この頃は上品な人間でも抱擁や許容の涙には代價を拂はなければならぬからな！

「さうだ、奴は愚鈍にも俺を自分の未來の花嫁に會はせに連れて行つた。へん！ 未來の花嫁にだ！ あゝいふ *Quasimodo* でなければザフレビン嬢の無邪氣さに助けられて新しい生活に復活する等といふことを考へはしない！ パーウエル・パーウロウイツチよ、然しそれは君の罪ではなかつた。君は怪物だから、君のまわりにあるものは何もかも、君の空想も希望も皆必然的に奇つ怪に成る。だが彼は怪物ではあつたが、自分の空想に疑念を持つて居た。だから、自分がひどくあがめうやまつて居たウエリチヤーニノフの御是認が必要だつたのだ。彼はウエリチヤーニノフに是認してもらひ、その空想は空想ではない、確かなものだといつて貰ひ度かつたのだ。彼は多分私達が灌木の蔭で、若いものゝやうに無邪

氣に抱き合つて涙を流すことゝ思うて私に對する心からの尊敬と私の感情の高潔さを信じて私をあそこへ連れて行つたのださうだ！ あの「永遠の夫」は遅かれ、早かれ、自分を罰しなければならなかつたのだ、自分を罰する爲めに剃刀をおつ取つたのだ——だとも偶然にはあるが、兎に角剃刀を取つたのだ！「だが彼は彼を小刀で突き刺しました。だが彼は結局知事の前で彼を突き刺したのです。ところであの附添人の話をした時にさういつたやうなことが彼の頭にあつたのだらうか。尙又、奴が寢床から起きて部屋の真中に立つて居たあの夜に何事かあつたのだらうか。ふむ！……いや、あの時奴は戯談半分に立つて居たのだ。彼は外に譯があつて起き上つたので、私が奴を見て怖がつて居るといふことを見て取つた時には彼は俺が奴を見て怖がつて居るのをひどく喜んで十分間も私に返事をしなかつた……あゝいふ考へが初めて彼に生じたのは、彼がその暗闇に立つて居たあの時からのことだつたらう……」

「だが若し昨日私があゝの剃刀をテーブルの上に忘れなかつたら、多分何事も起らなかつたらう。さうだらうか。さうだらうか。確かに以前には彼は私を避けて居た。二週間も私に會ひにやつて來なかつたぢやないか。彼は私を救す爲めに、私から隠れて居たのだ！ 勿論最初に彼は俺でなくバガウトフを選んだ！ 彼は小刀から憐れみと優しさへ氣持ちを辨換させやうと思つて、夜水の爲めに皿を暖めに走つたではないか！……彼はあの熱い皿で自分自身を救ひ、私をも救ひ度いと思つたのだ！……」

そして長い間この「世間的な男」の病的な頭はかういつた風に働らき続け、圓を爲してぐる／＼廻りをしてからやつと靜まつた。彼は翌る朝眼を覺すと、前日の頭痛が脱けて居なかつたに搦て、加へて、彼

の心には全然新しい、思ひ掛けない恐怖が潛んで居た……

この新しい恐怖は、彼の心中に突然強く成つた——彼、ウエリチャーニノフ(世間的の人間)が、今日自分の欲意で、パーウエル・パウロウイツチのところへ出掛けて萬事片つけるといふ斷乎たる確信から生じたものだつた。何だつて出掛けるのだ。何の爲めに出掛けるのだ。彼にもさつぱり譯が分らなかつた。不愉快で、譯を知り度くもなかつた。彼に分つて居ることは只何故か知ら彼のところへ出掛け度い氣がするといふことだけだつた。

だがこの狂氣——彼はそれに外の名前をつけることが出来なかつた。——は、それが成長するにつれ合理的な形を取り、可成り正當な口實にしがみついたといふのは、彼は昨日もパーウエル・パウロウイツチは自分の止宿へ戻つて、いつかマリヤ・スイソエヅナが彼に話した書記のやうに首を縊るだらうといふ考へに付き纏はれて居た。昨日のその想像が段々譯の分らぬ、然し頑固な確信に變つた。「何しにあの馬鹿が首をくゝらうぞ！」と彼は毎年分毎にわれと自分に反對を唱へて居た。彼はリーザの語を思ひ出した。……だが、彼の身に成つたら、俺だつても首をくゝるかも知れない。……さう彼は考へることもあつた。

結局、飯を食ひに行かないで、パーウエル・パウロウイツチのところへ行くことに成つた。「マリヤ・スイソエヅナに尋ねて見る丈けにしやう。」と彼はきめた。だが、彼は町は出ない内に、入口ではたと足を止めて、「さうか知ら。さうか知ら。」と、羞しきで眞赤に成つて叫んだ。「俺は抱いて、涙を流す」爲

めに、今かうしてしょんぼり出掛けるのか知らん。その馬鹿げた、下賤な事だけが「不面目」の仕上げに缺けて居たものなのだ!

だがその「馬鹿げた、賤しいこと」から彼はあらゆる上品な、生立の好い人々を守護し給ふ神に依つて救はれた。彼が町に一足踏み出すとすぐに、アレキサンドル・ローボフを偶然見つけた。かの若者は息が切れる程急いで居り興奮して居た。

「あなたに御目に掛りに來たのです! 私達の友達のパーウエル・パウロウイツチさんに對するあなたの御意見は如何です。」

「彼は首をくゝりましたよ!」とウエリチャウーニノフはやにはにつぶやいた。

「誰が首をくゝつたのです。何の爲めに首をくゝつたのです。」とローボフは大きな眼をして叫んだ。

「いやなに……で?」

「ふう! 畜生! だが、あなたは何て可笑しなことを考へていらつしやるのでせう。彼は首なんぞくゝりやありません。(何しに首をくゝりませう。)それどころか、彼は出發しましたよ。私は今彼を汽車に乗り込ませて、見送つて來たところです。いやもう實際、大將は飲みますよ! プレドポシロフも一緒でしたが、三人で三本倒しました——いや大將の飲むこと! 彼は汽車の中で歌を唄つて居ました。彼はあなたを思ひ出してあなたによろしくといつて居ました。だが彼は大悪者ですよ。さうは思ひませんか。」

若者は唯かにほろ酔ひ機嫌だつた。彼の上氣した顔、輝やく眼、もつれた舌がはつきりそれを現して居た。

ウエリチャーニノフは大きな聲で笑つた。

「ちや結局ブルーデルシャフト(譯者註、兄弟たること、相睦むことの意。を仕上げたのだな！ はつはつ！ 彼等は抱擁して、涙を流したのだな！ いや、シルレル流の詩人諸君！」

「悪口をいはないで下さい。彼はあそこで萬事を放擲しましたよ。彼は昨日もあそこへ行きましたが、今日もあそこへ行きました。彼は恐しく告げ口をしました。皆ながナヂーヤを監禁しました。彼女は二階のある部屋に居ます。泣かれた、歎いたりされましたが、私達は頑として動きませんでした！ だが彼はまあ何てよく飲むことせう。さうぢやありませんか！ 彼はモーヴェー・トーン(譯者註、車位の意)ではありませんか。少なくとも、モーヴェー・トーンといふ譯ではなくとも、何といつたらい、でせうか……彼はしよつ中あなたの話をして居ましたが、あなたと彼とは比べものには成りませんよ！ 何しろあなたは紳士で、一時は實際上品や社會に立ち交つて居られたが、貧乏の爲めか、どうか知りませんが、餘儀なく下つたので……私は彼のいふことがよく分りませんでしたよ。」

「おや、それぢや彼は私のことをさういつて話したのですか。」

「さうです。御怒りに成つては困ります。善き市民に成ることは貴族的な社會に立ち混つて居るよりは好いことですよ。私がさういふのは今日露西亞では皆なが如何なる人を尊敬す可きかを知つて居るもの

がないからです。あなたも御同意のことと思ひますが、人々が誰を尊敬す可きかを知らないのは今日の重大な病氣ですよ。さうぢやありませんか。」

「そりやさうです。彼は何といひました。」

「彼ですか。誰です。あゝ或る程！ 何だつて彼はしよつ中「ウエリチャーニノフは五十に成るが、放蕩もの」だといつて居たのでせう。何故だが、放蕩ものでなくて、そして放蕩ものではないのでせう。彼は笑つて、それを千度も繰り返していつて居ました。彼は汽車に乗つてから、歌を歌つて、いきなりわつと泣き出しましたが——全くどうも胸が悪く成りましたが、可憐さうでありましたよ。——酔つぱらつてたからのことですよ。いや！ 私は馬鹿は嫌です！ 彼はリザヴェクの供養に乞食に金を投げ出しました。——リザヴェタといふのは彼の細君のことですか。」

「彼の娘ですよ。」

「手をどうしました。」

「切つたのです。」

「治るでせう。あん畜生、彼が立ち去つて呉れたのはいゝことですよ。だが彼は來るとすぐにきつと結婚すると思ひますがね。如何でせう。」

「だつてあなたも結婚したかつていらつしやるぢやありませんか。」

「私ですつて。それは別の話です。本當にあなたは何といふ方でせう！ 若しあなたが五十歳なら、彼

は六十に違ひありません。論理的に考へて下さらなくちや！ 私はずつと前から心から親スラツたつたものですが、今日私達は西部から曉きを期待して居ます……だが失禮します。道で御會ひ出来てうれしく思ひました。上りますまい。失禮します。忙しいのですから！……」

さういつて彼は走り去らうとした。

「おつと」と彼は戻り乍ら叫んだ。「彼が私にあなたへの手紙を渡しました！ こゝにあります。何故あなたは彼の見送りにいらつしやらなかつたのです。」

ウエリチャーニノフは家へ歸りて自分に宛てた封筒を開いた。

その中にはパーウエル・パーウロウイツチが書いた只の一行の手紙も入つて居なかつた。そして別の手紙が入つて居た。ウエリチャーニノフにはそれが誰の筆跡か分つた。それは古い手紙で、紙も年月を経て黄色に或り、インキも色が變つて居た。それは十年前、彼がT——を去つてベテルスブルグへ歸つて後二ヶ月後に彼に對して書かれたものだつた。だがその手紙は彼のところへは來ず、彼はその代りに別の手紙を受取つた。このことはその古い黄色な手紙の内容から推して明かだつた。この手紙の中でナターリヤ・ワシーリエヴナは彼が實際受取つた手紙に於けると等しく、彼に永遠の別れを告げ、外のあつた人を愛して居るといふことが白狀してあつた。だが彼女は又身持に成つたといふことも彼に隠して居なかつた。それ所か彼を慰める爲めに、生れた子を彼に渡すことが出来るかも知れないといふ希望を述べ、續いて二人には外の義務があるといふが述べてあつた。簡単にいふと、理屈は立つてなかつたが

その主旨は明かだつた。といふのは今後彼は彼女を愛して困らせてくれないといふことだつた。彼女は一年も経つたら子供を見にT——に來ることも許した。どうして彼女が氣が變つてその代りに別の手紙を寄越したのかそれは分らない。

ウエリチャーニノフはそれを讀み乍ら眞青に成つたが、その手紙を見つけて、家の寶物なる青貝をちりばめた黒檀の箱を開いた儘、その前で初めてそれを讀んだ時のパーウエル・パーウロウイツチを想像した。

「彼奴も死骸のやうに青く成つたに違ひないと鏡にうつつた自分の顔をちらつと見て考へた。「奴はこれを読んで眼を閉ぢ、この手紙が無地の白紙に變つて、くれたらと思つて、又これを開けて見たに違ひない……多分彼は二度も三度もそれをやつたのだらう！……」」

第十七章

永遠の夫

以上に述べた事件があつてから、丁度二年程経つた。作者はある美しい夏の日に、わが國の新しく開通したある鐵道の汽車の中でウエリチャーニノフに再會した彼は氣保養に友達に會ふ爲めとそして又あ

る氣持ちのいゝ目論見との爲めにオデッサに行くところだつた。彼はその友達に依つて、彼がすつと前からしきりに知り合ひに成りたがつて居た非常に面白い女との面會を取極めたいと思つて居た。悉しいことは抜きにしてその二年間の内に彼はすつかり變つた、否寧ろ革新したといふことをいふにとゞめて置く。彼の昔の憂鬱症は凡んど微塵も後をとゞめなかつた。いろんな「思ひ出」心遣ひ——二年前訴訟が巧く行かなかつた時に彼に付き纏つて居た病氣の結果の内、自分の臆病を思つて秘かに羞しく思ふ念、それ丈けが後に残つて居た。幾分それを償つて呉れるものはそんなことは二度とは起らない、そして誰にもそれが知れることはないといふ確信だつた。尤もその頃彼はあらゆる社交を捨て、着物もだらしなくなり、人の姿を見るとこつそり逃げ出したりした。——そしてそれは勿論誰にも氣がついたに違ひなかつた。だが彼が自分の過ちを速かに承認し、自信ある、新しい生活と元氣に充ちた様子をして居たので、「皆な」がすぐに彼の一時的の墮落を許した。實際彼が挨拶をしてやらなかつた。當の連中が、うるさい質問もせずに、彼が彼等に關係のない、彼自身の事件の爲めに此方に居なくつて、今遠方から歸つて來た許つかりのところだといつたやうに、眞先に彼を認め、握手の手を差し出したのであつた。すべてこれ等良き變化の原因は勿論訴訟に勝つたからであつた。ウエリチャーニノフは六万留受取つた。六万留といへば大した高でもないけれど、ウエリチャーニノフに取つては非常な値打ちがあつた。第一彼は再び地盤が鞏固に成つたのを感じて安心した。彼は彼が最初の二つの財産を蕩盡したやうに、「馬鹿見たいに」この金を使ひ果しはしないといふこと、並びに彼は一生涯充分な兵糧を持つて居るといふこ

とを確かに知つて居た。「如何に社會の建物がぐらつき、如何なる喇叭の聲が聞えるとも」と彼はおのが身のまわり、並びに露西亞全體に渡つて行はれつゝあつた不思議な、信じられないやうなことを注目したり聞いたりし乍ら考へることがあつた。「如何なる人間、如何なる思想が現はれやうとも、俺はいつも今座つて食べやうとして居るやうに素敵に旨しい、上品な御飯を食べるだらう。だから俺は如何なるものにも面することを恐れない。」この安逸な考へは段々彼を占領し切つて、彼の精神はいふ迄もなく肉體にも變化を及ぼした。彼は作者が書いた二年前の「不精者」、あゝいふ見苦しい事件の起つた男とはまるで別人の觀があり、快活で、落着いて、氣品があつた。眼の下や額に現れそめて居た不機嫌な皺も凡んど消え去り、顔の色さへ變つて、皮膚は白く且つ赤く成つて居た。

その時彼は一等車の内にのら／＼して腰を下し、心を魅するやうな考へが胸に浮んで居るところだつた。次の驛は乗換場で、右の方へ行く支線が出て居た。彼は自分の胸に訊ねた。「今眞すぐに行くことを止めて、右へ曲つたらどんなものだらう。そちらの僅かに驛の離れたところへ行けば、彼は外國から歸つて來たばつかしの、或る知り合ひの婦人を訊ねることが出來た。彼女は田舎にたつた一人住んで居たがさういふ生活は彼女には非常に退屈だつたらうが、他には好都合だつた。オデッサに於けると同じやうに氣持ちよく遊ぶことが出來たらうから。殊に、彼はそこを訪問することを抜きにしたくはなかつたのだから。」だが彼は猶も躊躇して、すつかり心を定めることが出來なかつた。彼は彼の心を定めて呉れるものを待つて居た。兎角する内に停車場は近づき、そのあるものも遠くに離れては居なかつた。

この停車場では汽車が四十分間停車し、乗客は御飯を食べる間があつた。一二等の乗客の食堂の入口には例の如く待ち切れないで急いで居る連中が込み合ひ、例の如くに醜惡な事件が持ち上つた。素敵に綺麗だが、旅行するには些か流手過ぎたなりをした二等の客車から出た婦人が、非常に若い、美しい槍騎兵の將校を引きずつて來たが、騎兵は女の手を振りほどかうとして居た。その若い將校はへゞれけに酔つて居た。で、身寄りで年上のものでらしいその婦人は多分彼が安直に飲ませるバーへ突進することを心配したからだらう、——彼を放さうとはしなかつた。兎角する内に人込みの中でその槍騎兵はこれに亦だらしなく酔つばらつて居た若い商人にぶつかつた。彼は汽車に乗つて旅行を續けることも出來ずこの二日間といふもの飲んだり、彼を取巻く仲間に金を撒き放らして停車場のまわりにうろついて居た取つ組み合ひが始まり、士官は大聲擧げて叫び、商人は口汚なく罵つた。婦人は閉口して槍騎兵を引き退けやうとし乍ら、哀願するやうな聲で「ミーテンカ！ ミーテンカ！」と叫び續けた、これが若い商人には實に怪しからぬことに思へた鹽梅だつた。實際皆なは笑つたが、商人はこの不作法（彼はさう思つた。）に對して、一層腹を立てた。

「おいミーテンカ！」と彼は婦人の金切聲を眞似して悔しさうにいつた。「皆なの居る前で悔しくもな

く！」
彼は——すぐそばの椅子へ驅けつけて、槍騎兵を自分の側に座らせた婦人のところ迄よろめいて出掛け、二人を馬鹿にしたやうな顔してきよろ／＼眺め乍ら、歌を歌ふやうな調子でのろ／＼

「貴様は不精ものだ。汚ないもの、中を尻尾を引きずつて居やがる！」といつた。

婦人はきやつといつて、哀れな様子で、あたりを見廻して、逃げる手段を探して居た。彼女は羞しくもあり恐しくもあつたが、將校は椅子から跳び上り、黄色い聲を出して、商人に突撃したが、這つて、ばたりと椅子に倒れ込んで、すっかり味噌をつけた。彼等の周囲の笑ひ聲は一層高く成り、誰も彼女を助けやう等と夢想するものはなかつた。然しウエリチャーニノフが助太刀をした。彼は商人の襟を捉えぐるりと一廻りさせて、おつかなびつくりの婦人から五歩も向ふへ押しやつた。そしてそれで活劇は終つた。商人は驚ろき、ウエリチャーニノフの立派な姿に壓倒された。仲間が彼を連れて行つてしまつた高雅ななりをしたこの紳士の氣高い顔つきはわい／＼連に大きな影響を與へ、笑ひ聲は靜まつた。婦人は赤く成り、涙を流さむ許りで、感謝の情が溢れて居た。槍騎兵は「がとう、がとう！」と片言をいつて、ウエリチャーニノフに握手の手を差し出すやうな様子だつたが、それは止して突然椅子の上に足をのせて大の字に成つた。

「ミーテンカ！」と婦人はびく／＼し乍ら手を握り合せて、恨めし氣にいつた。

ウエリチャーニノフはこの珍事とその成り行きがすっかり氣に入つた。かの婦人は彼の眼に留つた。彼女は明かに地方の金のある女で、派手だが品の無いなりをして居り、その所作は可成り滑稽だつた。

——實際彼女は女に思召しのあるベテルスブルグの優男を參らせることが請合のあらゆる特色を一身にしよつて居た。話が始まつた。婦人は夫のことをしきりにこぼして、「彼は汽車を下りるとすぐに何處か

へ行つて了つたのです。だからこんなことにも成つたのです。だつて居て呉れなくちやならぬ時には、いつも何處かへ行つてしまふのですもの。」といつて居た。

「當り前だ。」と槍騎兵は小聲でいつた。

「ミーテンカー！」と彼女は又手を握り締めた。

「亭主はやつつけられることだらう。」とウエリチャーニノフは考へた。

「御主人の御名前は何とおつしやるのです。探しにいつて上げませう。」とウエリチャーニノフがいひ出した。

「パール・バーリツチで」と槍騎兵が答へた。

「あなたの御主人の名はパウエル・パウロウイツチとおつしやるのですか。」とウエリチャーニノフは不思議に思つて訊ねた。その時突然見慣れた。禿げ頭が彼と婦人との間に現はれた。と忽ち彼はザンペン家の庭や、無邪氣な遊戯、彼とナジエージダ・フォードセエヅナの間にしよつ中突き出された。うるつさい禿頭が心に浮んだ。

「まあどうしてたのです！」と彼の妻は神經質に叫んだ。

それは外ならぬパウエル・パウロウイツチその人だつた。彼はウエリチャーニノフの姿を見て幽靈にでも會つたやうにあたふたし、びつくり仰天して彼を眺めた。彼はぼうつとしてしまつて、腹を立て、居る彼のつれ合ひが早口に、いら／＼してしきりに何かいつて居ることも暫らくは飲み込めない様

子だつた。遂に彼はびくりとして自分の大變な位置、自分の罪、ミーテンカの振舞ひ、「この方(マーシヤ)は(何故か婦人はウエリチャーニノフのことをかういつた。)私達の救主で、守り神様だつたのですよ。それなのにあなたは——あなたは居て下さらなくちやならない時に、いつも何處かへ行つてしまつて……。」といふことを飲み込んだ。

ウエリチャーニノフは突然どつと吹き出した。

「私達は友達なのですよ。子供の時からの友達なのです！」と彼は婦人に向つて叫んだので、婦人はびつくりした。微かな笑を洩して居るパウエル・パウロウイツチの肩を、長者のやうな親しさを以て右手で抱き乍ら、彼はウエリチャーニノフの話をしませんでしたか。」

「え、未だ伺はないのですよ。」と婦人は少しどきまぎして答へた。

「奥さんに紹介して呉れてもよさうなものだ！」

「リボ！ チユカ……ウエリチャーニノフさんだよ。」とパウエル・パウロウイツチは語り出したが、どきまぎして中絶した。

彼の妻は眞赤に成つて、怒つたやうに彼をちらうと見たが、それは多分「リボ！ チユカ」といはれたからだらう。

「まあ聞いて下さい。この人は結婚したといふことも報せて呉れず、結婚式にも招いで呉れなかつたのですよ。だが、あなた、オリムビアード……」

「セミヨノヴァです。」とパーウエル・パウロウイツチが教へた。

「セミヨノヴァです。」と、うとくして居た槍騎兵が突然雷同した。

「オリムピアード・セミヨノヴァさん、私に免じて、かうして二人が出會はした際ですから彼を是非許して上げて下さい……彼はいい夫ですよ。」

さういつてウエカチャーニノフはパーウエル・パウロウイツチの肩を親しげに叩いた。

「私はほんの一分間許り餘所へ行つてたゞけだよ。」とパーウエル・パウロウイツチは語り出さうとした。

「自分の妻が侮辱されるのも平氣でね。」とリポーチユカはすぐにくちぼしを入れた。「あなたが居て下さらなくちやならない時には、何處へ行つたか分らないし、居なくてもいい時にはいつも鼻の先にいらしつて居なくてもいいところに、居なくてもいいところに……居なくてもいいところに……」と槍騎兵が相槌を打つた。

リポーチユカは凡んど息も切れる許りに興奮して居た。彼女はウエリチャーニノフの面前で、體裁のいい話ではないといふことを知つて赤い顔をしたが、我慢が出来なかつた。

「要りもしないところで鶉の目鷹の目に成つて居てさ！」と彼女はやにわにいつた。

寢臺の下に色男が居るだらうと思つて探してやがる……要りもしないところで……」とミーテンカは突然興奮し切つてつぶやいた。

だがミーテンカをどうすることも出来なかつた。だが、仕舞ひには氣持ちよく納まつて、すつかり仲直りが済んだ。パーウエル・パウロウイツチは珈琲とソツプを取りに遣られた。オリムピアード・セミヨノヴァはウエリチャーニノフに「私達は夫が就職して居る〇——から、田舎の家へ行つて二月許り送らうと買つて居る途中です、それはこゝから遠くはないので、この停車場から僅か三十哩のとらゝで、そこには素晴らしい家と庭があります、家はいつも御客さんで一杯です、それに近所に知り合ひもあります、若しあなたが、寂しい田舎へ一緒にやつて来て下さるならば、私はあなたを『私達の守り神様』として歓迎する、だつて、さつきのことは思ひ出す度にぞつとするやうなことですもの、若し——實際あなたは『私の守り神……』だといつた。

「そして全たく救済者だ」と槍騎兵は一心に主張した。

ウエリチャーニノフは彼女に丁寧に感謝して、いつ何時でもあなたの御用命に従ひます、私は何の務めも有さない全たくのらくらものだから、あなたの御招きは實以てありがたいと答へた。彼はそれに續いてすぐに陽氣な會話をはじめ、二つ三つ巧く御世辭を編み込んだ。リポーチユカはうれしくつて赤く成つた。そしてパーウエル・パウロウイツチが戻つて來るとすぐにアレキセイ・イウアーノウイツチが彼女の招待を承知して下さつて、田舎で彼等と一緒に暮らす一月暮して呉れる、一週間の内にはやつて來るといふことを約束して下さつたと熱心に語つた。パーウエル・パウロウイツチは黙つて絶望的に笑つた。オリムピアード・セミヨノヴァは勝手にしろといつたやうに肩をすくめて、天井へ眼を遣つた。

遂に彼等は立ち上つた。又もや熱烈なる感謝・又もや「守り神」、又もや「ミーテンカ」。パーウエル・パーウロウイツチはとう／＼妻と槍騎兵とを彼等の座席へ護衛して行つた。ウエリチャーニノフは葉巻に火を點じて、停車場前のバルコンを彼方此方歩き出した。彼はパーウエル・パーウロウイツチが又すぐに走り出て、ベルが鳴る迄話をしに来るだらうといふことを知つて居た。事實さうだつた。すぐにパーウエル・パーウロウイツチが顔にも、全體の様子にも不安な表情を表して、彼の前に立ち現れた。ウエリチャーニノフは笑つて、親しげに他の肘を捉へ、彼を近くの腰掛へ連れて行つて、先づ自分が腰掛けて、彼を自分の側へ座らせた。彼は黙つて居た。彼はパーウエル・パーウロウイツチの方から話し出すことを望んだ。

「ぢやあなたは私達のところへやつて來ますか。」とパーウエル・パーウロウイツチは口籠り乍らすぐに用件を訊ねた。

「かうだらうと思つて居た！ あなたはちつとも變つて居ませんか！」といつてウエリチャーニノフは笑つた。「あなたは私が」と彼は又彼の肩を叩いた。「あなたは私が實際あなたの方のところへ、而かもまる一月も出掛けると、たとひ一瞬間でも本氣に想像することが出來たとおつしやるのですか。」といつて笑つた。

パーウエル・パーウロウイツチはすつかり興奮した。

「ぢやあ、あなたは來ないのでですか！」と彼は安心したといふ様子をちつとも隠さずにいつた。

「行きやしませんよ！」といつてウエリチャーニノフは快げに笑つた。

だが彼も何故そんなに特別に面白いのか分らなかつたが、段々面白い氣持ちが増えて來た。

「本當にさうですか……本當にさうですか。」

かういひ乍らパーウエル・パーウロウイツチは心配で堪らなく成つて、實際席から跳び上つた。

「行かないといつたぢやありませんか、變な方ですね。」

「若しさうでしたら、一週間経つてから、家内は待つて居るにあなたはやつていらつしやらない、その時に何といつたらいいでせうか。」

「さうですね！ 私が足を折つたとか何とか、そんなことでもおつしやつたらいいでせう。」

「そんなことをいつたとして信じますまい。」とパーウエル・パーウロウイツチは悲し氣に、のろ／＼いつた。

「そしてあなたが怒られませう？」とウエリチャーニノフは笑ひ乍ら語り續けた。「それはさうと、あなたはあなたの實に面白い奥さんの前でびく／＼もので居ますね。」

パーウエル・パーウロウイツチは笑はうとしたが笑へなかつた。ウエリチャーニノフが彼等を訪問することを辭つたのは勿論いゝことだつたが、彼が彼の細君のことで彼に狎々しいのは不愉快なことだつた。パーウエル・パーウロウイツチはびく／＼して居たが、ウエリチャーニノフはそれに氣が付いた。兎角する内に第二のベルが鳴り、二人はパーウエル・パーウロウイツチを心配氣に呼はつて居る汽車か

らの金切聲を聞いた。パーウエル・パーウロウイツチは椅子の中でもぢく／＼して居たが、この最後の招喚では立ち上らうとしなかつた。ウエリチャーニノフから更に何か、決して彼が彼等のところへやつて来ないといふ保證を今一つ待ち望んで居る様子だつた。

「奥さんの里方の名前は何かとおつしやるのです。」とウエリチャーニノフはパーウエル・パーウロウイツチの心配を知らないものゝ如くに訊ねた。

「家内は私達の御坊さんの娘です。」とパーウエル・パーウロウイツチは汽車の方に聞耳を立て、そちらの方を眺め乍ら、落ちつかずに狼狽して答へた。

「あゝ分りました。あなたは奥さんが美しかつたので貰ひましたね。」

パーウエル・パーウロウイツチは又僻易した。

「それからあなた方と一緒にいらつしやるあのミーテンカさんといふのはどういふ方です？」

「あゝあれは私達——いや私の遠縁のもので、死んだ私のいとこの息子です。彼の名前はゴルブチコフと申しますので、亂暴な所業があつた爲め、軍隊で位を落されましたが、今度又昇進しましたので、彼の支度をしてやつて居ますが……不……な青年でしてね……」

「例の通りだ、人は揃つて居る。」

とウエリチャーニノフは思つた。

「パーウエル・パーウロウイツチ！」といふ聲が又もや汽車から聞えたが、今度はその聲にじれつたいと

いつたやうな調子が明かに現れて居た。

「パール・パーリツチ！」といふ片言も聞えた。

「パーウエル・パーウロウイツチは又もや落ち着かずにそわ／＼して居たが、ウエリチャーニノフは彼の肘を捉へて引き留めた。

「私が今出掛けて行つてあなたの奥さんにあなたが私の咽喉を切らうとしたことを話したら如何でせう。」

「何ですつて！」とパーウエル・パーウロウイツチはびつくり仰天した。「馬鹿な！」

「パーウエル・パーウロウイツチ！ パーウエル・パーウロウイツチ！」と呼ぶ聲が又も聞えた。

「それぢや、もういらつしやい！」とウエリチャーニノフはとう／＼彼を放し、依然としてにこ／＼笑ひ乍らいつた。

「ぢやいらつしやらないのですか。」とパーウエル・パーウロウイツチは凡んど躍氣に成つてもう一度さゝやき、昔のやうに手の平を合せて眼の前に差し出した。

「行かないといつて居るぢやありませんか！ 早くいらつしやらないといけませんよ。」

さういつて彼は氣取つて手を差し出したが、パーウエル・パーウロウイツチの仕打ちを見て驚いた。彼は彼の手を取らない許りでなく、自分の手を後ろへ引つ込めた。

三度目のベルが鳴つた。

忽ち彼等二人に變なことが起つた。二人は一變したやうに思はれた。今迄笑つて居たウエリチャーニ
ノフの心中に震へて、現はれたものがあつた。彼はパーウエル・パーウロウイツチの肩をつかみ、彼を
しつかり、激怒して捉へて引きとめた。

「私が――私があなたにこの手を差し出したら」切り傷の大きな痕が今も尙歴然たる左の手の掌の平を
見せ乍ら「あなたは握つてもよさうなものだ！」と彼は蒼白い唇を震はして私語いた。

パーウエル・パーウロウイツチも青く成り、唇も亦震へた。彼の顔は痙攣的に震へた。

「そしてリーザは？」と彼は早口で私語いた。と突然彼の唇、彼の頬、彼の顎がびく／＼震へ出して、
眼から涙が迸り出た。

ウエリチャーニノフはぼんやりして彼の前に立つて居た。

「パーウエル・パーウロウイツチ！パーウエル・パーウロウイツチ！」二人は誰か殺されてゐる居るや
うな叫び聲を聞いた。――と突然汽笛が鳴つた。

パーウエル・パーウロウイツチはやをら身を起して、手を振り上げ、全速力で汽車へ駆けつけた。汽
車は既に動き出して居たが、彼はどうかにかにか、かぢりつくことが出来て、彼の座席へ飛んで行つた
ウエリチャーニノフは停車場に残つて、外の汽車で元の道に出發した。彼は美しい友に會ふ爲めに右へ
曲りはしなかつた。――彼は非常に氣分が悪かつた。そして彼はそれを後でどんなに後悔したことぞ。

ところが翌日になつてみると、を悲しい驚きに陥れたのは、アレキサンドラ・ミハイロヅナに解し難
い、冷酷さが認められた事でした。私が心ならずも居合はすやうになつた、昨日のあの事件があつてか
ら、私と向き合ふといふのは清らかな慎ましやかた彼女に取つて辛いだらうといふことはよく判つてゐ
ました。この子供は私の前で顔を赤らめて、私の心を耻かしたらしいあの不幸な争ひについて許しを
求めるに相違ないと私は思つてゐたのです。ところが私は彼女に別な愁ひと悲しみが露骨に現はれてゐ
るのを、すぐさま見て取りました。冷めたい素氣ない返事をするかと思ふと、奥歯に物の挟まつたやう
な事を言つてみたり、さうかと思ふと、心にもないことの意地悪さをふいと悔いたかのやうに、私に媚
びやうとして見たり、彼女の優しい静かな言葉は非難してゐるやうに聞かれました。で私は思ひ切つて
何うかしたんぢやないか、私に何か話したい事はないか、彼女に訊ねました、私の突然の質問に彼女は
やゝどぎまぎした様でしたが、あの大きな落付いた瞳をあげて、優しい頬笑みを浮べて言ひました。

『何でもないので、ネートチカ、たゞ貴女があんまり突然に訊ねたんでちよつとまごついただけなの。判
つて？ 餘り突然だつたので……貴女を信するわ。だけど聽いて頂戴――そして本當のことを被仰い。
好い？ 若しもね、此のやうに誰かゞ突然に訊ねたとしたら、やつぱりまごつくやうなさういふものが
貴女のお心の中にある？』

『いゝえ』私は眼を輝かして彼女を瞋めながら答へました。

『あさう、ぢやいゝわ！ 貴女のこんな立派なお答へに對して何の位感謝して居るか、貴女が知つて下

れたら！ 私はね、何か悪いことで貴女を疑つてゐるかもしれないからぢやないんです——決してそんなことはないんです！ こんな事は思ふさへ許せないことなのです。でも聴いて頂戴い、あたし子供の時に貴女を引取つたんですけど、もう十七歳にもなつたんぢやないの。獨りでに解る筈だわ、私が病氣でまるで赤ん坊みたいで、私にはお守りが必要だといふことが。貴女に對する愛は私の心に有り餘る程あるんですけどもね、貴女の本當のお母さんには成り切る事は出来ないわ。若しもね、私が今苦しんで居るとしてもそれは勿論貴女の罪ぢやなくて私が悪いんです。こんな事を言つて御免なさいよ。そして貴女を引き取る時、貴女やお父さまに約束したあの約束を仕方がないとは言へすつかり違へて、ほんとに申し譯がないわ。この事が氣になつて仕様がなし、以前だつて心を痛めてたんです。ほんとに私は彼女に抱きついて泣き始めました。

「まあ、有難う。有難うよ。何といつて好いかほんとに！」私は彼女の手を涙で濡らしながら言ひました。「其んな事、もう言はないで。胸を掻き捲るやんなことは止して頂戴。貴女は私のお母さまでなくて何なの。貴女達二人が、公爵さまとお二人で、私に、この惨めな、一人残された女に盡して下すつた、その事に對しては神様が祝福して下さるでせう！ お氣の毒な、私の母さま！」

「澤山！ ネットチカ、も澤山よ！ もつと確り抱いて、さうさう。もつと強く、もつと強く！ 貴女知つてる？ 貴女が今、私を抱いたのが何うして最後の抱擁になるか、それは神様が御存じです」

「うゑ、うゑ」嬰兒のやうに泣きながら言ひました「うゑ、うゑ、そんなことないわ！ 貴女は幸福に

なれますわ！……まだ澤山の日が待つてます。私達が幸福になることを信じて頂戴」

「え、有難う、そんなに愛して下すつて、ほんとに有難う。私の周囲に今は誰も居ないやうだわ、みんなが私を捨て、了つたんですの！」

「捨てたつて、一體誰なの？ みんなつて誰のことなの？」

「以前私の周囲に居た他の人々のことなのです。貴女は知らないでせう、ネットチカ。幻のやうにみんな私を残して行つて了つたわ。私はその人達をほんとに、何んなにか待つてたでせう、一生待つてゐたんだわ。そんな事はもう何うでも宜いわ！ まあ御覧よ。ネットチカ、随分深い秋だこと！ 直きに雪が降つてよ。初雪が降つたら私も死ぬでせう——さうよ。だけど私は悲しんぢやゐないわ。さやうなら！」

彼女の顔は蒼白くて瘦せ削けてゐたし、兩頬には惡兆候の赤い斑點が現はれ、唇は内部の熱のために震えて乾き切つてゐました。

彼女はピアノに近づいて、二三の樂譜を取りましたが、此の瞬間に破れるやうに爆發し、長い、震えるやうな音を響かして行きました。

「聴いてるネットチカ、聴いてる？」彼女は何か感激した聲音でピアノを差し示しながら言ひました「この絃は餘り、餘り張り過ぎてゐるんだわ。で堪えられないで死んで行くわ。この音が哀れつぽく死んで行くこと！」

彼女は苦しうに話してゐました。物憂い、精神的の悩みが彼女の顔に現はれて、彼女の眼には涙が一杯たまりました。

『あゝ此んな事は止ませう。ネートチカ、私の仲よし。もう澤山よ、子供を拉れて来て頂戴』
私は子供をつれて来ました。彼女は子供を見すてホツと安心したらしく、一時間も経つてから向ふへ拉れて行きました。

『私が死んだら子供を見すてないの、ネートチカ？ えゝ？』彼女は、誰か盗み聞きして居やしないかと怖れて居るものゝやうに囁きました。

『澤山よ。貴女は私を苛めやうとして居るんだわ！』私はやうやう此れだけ答へることが出来たのです。

『今のは冗談ですよ』一寸黙つて彼女は微笑みながら言ひました『それを本當に取たの？ 私はともすると、何言ふか判らないんですの、私ね、今嬰兒みたいよ、すつかりお詫びしなけれや』

彼女は此う言つて置いて、何か言はう、言はうと思つてゐるらしく臆病さうに、私を睨めました。私は待ち受けました。

『氣を付けてね、彼を脅かさないで』彼女は眼を伏せて、顔を微かに赤らめて、やうやく私に聴き取れる位の靜かな聲で言ひ出しました。

『誰を？』私は吃驚して訊ねました。

『夫です。貴女は多分密つと、何もかも話して了ふでせう』

『何うしてなの、えゝ、何うしてなの？』私は段々驚かされながら繰返へしました。

『いいわ、大方お話しならないでせう！』やはり無邪氣さうな微笑を口元に輝やかし、顔に赤味を少しづつ増して来たとは言へ、出来るだけ狡く私を見やうと努めながら彼女は答へました『こんなことは、もう止めませう。やつぱり私は冗談言つてるんですよ』

私の心臓はぢり／＼苦しく緊め付けられて来ました。

『だけどお聴きよ、貴女は私が死んだら、あの子供達を愛するやうになるでせう——違つて？』彼女は又も秘密ありげな様子に返つて、眞面目に附け加へました『自分の本當の子供を愛するやうに——えゝ？ 私はいつも貴女を本當の子のやうに思つて實の子供と區別なんかしたかつたことを思ひ出して頂戴』

『えゝ、えゝ』私は涙と感動の餘り息塞りながら何と言つて好いか判らないで此う答へました。

手を引かうとする間もなく燃えるやうな接吻が私の手に焼き付きました。

『この人は何うしたのか知ら？ 何を考へて居るんだらう？ 昨夜一體何んな事があつたのか知ら？』私は想像して見ました。

二三分経つてから彼女は疲労を残念がり始めました。

『私ね、やつと前から身體が良くなかつたんですけど、貴女達お二人を驚かせたくなかつたばつかし

に」と彼女は言ひました「貴女は私達二人を愛してゐた筈だわねえ——さうでせう？ さやうなら、ネートチカ、私のことなんか關はないで。たゞ夕方折々来て頂戴。向ふへ行かないこと？」
私は何か言ひましたか、此處を離れたかつたのです。これ以上堪へることが私には出来なかつたのです。

「お氣の毒な、お氣の毒な方！ 何ういふ疑ひが貴女を墓場へ導くんでせう？ 泣きながら叫びました。「何んな新しい惱みが貴女の心臓を傷け、蝕んでゐるのでせう、そして貴女は其んな事を口に出さうともしないんです？ おゝ！ 私がもはや理解し、頭に残つてゐる永い苦しみ、この光明のない人生、何ものも要求しない、現在自分の死の床にあつても尙消えやらぬこの臆病な愛、苦痛の餘りに心臓が二つに裂けても、貴女は罪人のやうに少しの不平も怨みも言はない——新しい惱みを想像し、考へ出して其れに屈從して仰直りしやうとしたのです……」

夕方、丁度日の暮れる頃、モスクワから來たオヴロフが居ないのをいゝ幸にして圖書室に這入り込んで、本棚を開いて、アレキサンドラ・ミハイロウナに聞えるように讀むために本を何か探ひ出さうとして捜し始めました。ある企みをもつて彼女の心を惹くやうな晴々しい輕快なものを探ぼうと思つたのです……暫く私は考へて居たのですが、その中に呆りして了ひました。夕暗は濃くなつて來、それにつけて私の惱みも大きくなつて來ました。私の手にはあの頁を開いたまゝ本がのせられてあり、其の頁にはあの時から私の心を離れない手紙の痕や私の生活を滅茶滅茶にして了つてから改めてやり直した秘

密が今も眼に見えました。そして非常に冷めたい、明瞭しない、秘密な、無愛想な、今になつては私を脅しつけるやうなものが起り始めました……私達は何うなるんだらう、こゝろ私は思ひました。私に取つて暖かい不足のない部屋は——荒れ果てます。私の青春を護つて居た消らかな、輝かしい魂は私を取り残して行きます。何うなるでせう？ 私は暗黒な脅すやうな前途を見通さうと骨折つてゐる可愛い子供のやうに、自分の過去の或る事件の上に立ちました。……今でもなほ其の時の氣分になつて、其の瞬間を思出します。何の位強く私の記憶に喰ひ込んでゐるのでせう。

私は手紙を開いた本とを手につけて顔は涙に濡れてゐたのです。突然、私はゾツと身顫ひしました。頭の上に聞き覚えのある聲が響いたからです。と思ふ間もなく私の手から手紙が引つたくられたのを感じました。私はアツと叫んで見廻しました。すると私の前にピョートル・アレキサンドロウイチが立つてゐました。彼は私の手をしつかり握つて動けないやうにし、右の手に手紙を持つて明るい方に差向け、初めの頁を開らかうと骨折つてゐました……私は聲をあげました。この手紙を彼の手に渡す位なら死んだ方がましです。殊更らしい彼の微笑を見ると、初めの頁をうまく開いたらしいのでした。私は眼が眩みさうでした……。

と思ふ間もなく、私は我を忘れて彼に飛びかゝつて彼の手から手紙を取り戻しました。これはほんの僅かの時間に行はれたことであつて、何う言ふ風で手紙が再び私に戻つたか、今でも覚えてゐない程です。けれども又も彼が奪ひ返さうとしてゐるのを見て私は急いで、手紙を胸の中に入れて了つて、三足

ほど後退りしました。

私達は三十分程黙つたまゝ睨み合つて居ました。私は尙も怖しさに顔えてゐましたが、色は蒼醒め、唇は怒りの餘り蒼くなつて震えてゐた彼が先づ沈黙を破りました。

「好し！」彼は興奮の餘り弱くなつた聲で言ひました。「貴女は私が暴力を使用することを御好みにならないと考へますが、さつさと其の手紙を此方へ渡して貰ひたい」

此の時に初めて氣附くころでありました。そして侮辱、羞耻、不快といふものが野卑な暴力よりも私の魂を捉へました。熱い涙が火照つた私の頬を傳ふて流れました。私は激した餘り身を震はし、暫くは物言ふ事も出来なかつたのです。

「判りましたか？」彼は二足ほど近づいて言ひました。

「退いて下さい。其處を退いて下さい！」後退りしながら私は叫びました。「貴方は何んて賤しい事をなすつたのです。自分をお忘れになつて居ます……離して下さい……」

「えゝ？ それは何の事です？ 貴女がまだ其んな調子で居る覺悟なら……貴女が……その後で……此方へお渡しと言つてるぢやありませんか！」

彼は又も近寄りましたが、私を見て、私の覺悟を認めて逡巡しながら立止りました。

「好し！」とうとう、彼は何か決心したもののやうに素氣なく言ひましたが、自分を抑へることが出来ないやうでした。「此んどは自分の番だ、が最初に……」

彼は此う言つて見廻しました。

「貴女は……一體誰が貴女を圖書室に入れたんです？ 何う言ふ譯でこの本棚は開らかれてあるんです？ 何處から鍵を手に入れたんです？」

「お答へする限りぢやありませんわ」私は言ひました。「私は貴方とお話する譯に参りませんよ。行かして下さい。私を行かして下さい！」

私は戸口の方へ行きかけました。

「一寸」彼は私の手を掴んで言ひました。「此のまゝ行かしてなるものですか！」

私は何も言はないで手を振り切つて戸口へ行かうとしました。

「そんなら好い。だが何うあつても貴女を許す譯には行きませんよ、この家で自分の情人から手紙を受け取るなんて……」

私は驚きのあまり聲を立て、氣を失つたやうに彼を見ました。……

「で其がために……」

「お黙りなさい！」私は叫びました。「貴方はそんな事が言へるのですか？ 何うして其んな事が言へるのです？ お！ お！」

「えゝ？ 何です！ まだ脅かしてゐるのですか？」

けれども私は絶望に打たれて蒼醒めて彼を見てゐました。二人の間の様子は段々進んで行つて理解す

る事の出来ない位意地張りになつて了りました。此の上續かないやうにと眼で彼に嘆願し、此處を出して貰うがために彼の侮辱を許してやらうと考へて居ました。彼は凝乎と私を瞞めてゐましたが明らかに逸巡して居ました。

「好い加減に許して下さい」怖る／＼私は囁きました。

「いや！ 此れはきつぱり片を附ける必要があります！」彼は何か考へ附いたかのやうに、言ひました。「實を言ふと、此の考へに逸巡してゐたんです」彼は變んな微笑を浮べて附け加へました「然し、残念なことには事實其のものが物語つてゐますからね。私は幸にして手紙の冒頭を讀む事が出来たが、それは戀の手紙です、よもや否定しやしないでせう！ いや此んなことは頭から捨て、了ひなさい！ 若しも一寸でも私が疑ふならば、この事件は貴女の色々な美點に持つて行つて、嘔吐き上手なといふ材能を附け足さねばならないことを證據だてゝゐるに過ぎない。で私は繰返しますが……」

彼は話すにつれて段々と顔色が險はしくなつて行くのでした。顔は蒼醒め、唇は歪んで震え、仕舞には最後まで言ふのが苦しい程でした。

暗くなつて來ました。私は抵抗も出來ず、たゞ一人自分の妻を侮辱することの出來る人の前に立つてゐました。やがて様子が私に取つて不利になつて來ました。耻しさに心を裂かれ、此の人の醜いことを理解する事が出來ないで、呆然としてゐたのです。彼には返事もしないで、怖しさに我を忘れて部屋から駆け出しましたが、間もなくアレキサンドラ・ミハイロウナの書齋の入口に立つてゐました。けれど

ども此の瞬間に彼の足音も聞えて來たので、私は部屋の中に這入らうとしましたが、雷に驚かされたやうに不意に立止つたのです。

「彼女は何うなるだらう？」私の頭に閃めきました「この手紙！ さうぢやない、彼女に最後の打撃を與へる程なら例へ何んな事をしたつて好い」私は駆け戻らうとしましたが、もつ間に合ひませんでした。彼は私の身近くに立つてゐました。

「何處へでもお望みの方へ行きます。たゞ此處に居ては不可ないのです、此處に居ては！」私は彼の手を握つて囁きました「彼女を許して下さい！ また圖書室の方へ行きますから、でなければ……何處でもいゝんです！ 彼女を殺すやうなものです！」

「あなたが妻を殺さうとして居るのですぞ！」私を押のけて彼は言ひました。私の望は残らず消えて了ひました。彼はすべての光景をアレキサンドラ・ミハイロウナに何うしても報らせやうとしてゐるのが感じられたのです。

「お願いです！」私は力一杯彼を引止めて言ひました。けれども此の瞬間にカーテンがあがつて、アレキサンドラ・ミハイロウナが眼の前に姿を現はしました。彼女は驚いて私達を見ましたが、彼女の顔は何時ものやうに蒼白く、兩足で立つて居るのが苦しさうでした。私達の聲を聞き附けて此處まで來るのに非常に骨折つたらしく見えました。

「誰です？ 此處で何を話してゐるんです？」極度に驚いて彼女は私達を見ながら訊ねました。

暫く沈黙が延びましたが、彼女は布のやうに蒼ざめました。私は彼女に飛びついて堅く抱擁して部屋へ曳き戻しました。ピョートル・アレキサンドロウイチは私にくづきました。私は彼女の胸に顔を埋めて、堅く抱きついて、何んなことになるかと思つて失心したやうになりました。

「何うしたの、一體何うした譯ですか？」また、アレキサンドラ・ミハイロヴナは訊ねました。

「この方にお訊きなされるがいい。貴女は昨日も此うして庇つたのだ」ピョートル・アレキサンドロウイチは苦しうに安樂椅子に腰を下しながら言ひました。

私は益々堅く彼女を抱きしめてゐました。

「だけど、まあ何と言ふことだらう？」アレキサンドラ・ミハイロウナは怖しく驚いて言ひました「貴方は其んなに腹を立て、居るし、此の娘は涙ぐんで身震ひしてゐるし、アンネタ、何んな事があつたかすつかり言つて御覽！」

「いや、御免なさい」ピョートル・アレキサンドロウイチは私に近づいて手を握り、アレキサンドラ・ミハイロウナから引離して「其處に立つて居なさい」と部屋の中を指さし言ひました「貴女の母さんの代りをしてゐる人の前で貴女を裁きたいと思ふ。だが貴女は心配しないで下さい、おかけなさい」彼はアレキサンドラ・ミハイロウナを安樂椅子に腰かけさせて附け加へました「この不愉快な曝露から貴女を救ふことの出来ないのは私に取つて苦痛です。しかし止むを得ません」

「おゝ！一體何うなるんでせう？」アレキサンドラ・ミハイロウナは私と夫にかわるく視線を移し

ながら深い悲しみをもつて此う言ひました。私は運命の決まる瞬間を豫感して、すつかり絶望しました。最早彼から許しを期待し得なかつたのです。

「要するにです」ピョートル・アレキサンドロウイチは言葉をつぎました「貴女も私と同時に判断して頂きたい。貴女は何時も何故か判らないが、怖らく貴女の空想の一つです。貴女は何時も——現に昨日も、例へば考へたり話したり……だが何う言つたら好いか分らないが、私は想像して顔が赤くなる……一言で言へば貴女は彼の女を保護し私を攻撃し、私の頑迷な厳格さを非難し、その頑迷な厳格さへ私を引つぱつて行く或る一つの感情を暗示した。貴女は……しかし台點のゆかないのは、何故私は自分の感情、貴女が何んな事を想像して居るか其れを思ふ時赤面しますが、それを押し隠すことの出来ない事です。何故あの事について打明けて公々然と言へないか、其の事です。この娘さんについては……要するに貴女は……」

「まあ、貴方の何んな事をなさるなんて！いゝえ、貴方が此んなことを言ふ筈はない！」アレキサンドラ・ミハイロウナは耻しさに焼かれ、すつかり興奮して叫びました「いゝえ、此の娘を可愛さうと思つて下さい。私の爲です、が皆考へ出した事なんです！私はすこしも疑つては居ないので。私をお許し下さい。私は病氣です。許して頂かねばなりません。でなければ此の娘に云はないで置いて下さつたら、いゝえ……アンネタ」彼女は私に近づいて言ひました「アンネタ、早く向ふへいらつしやい。早く？此の人は冗談言つてゐるんです。何もかも私が悪いんですから。これはね譯の判ない冗談なんですよ……」

要するに貴女は此の娘さんに關して私に嫉妬して御出になる』ビョートル・アレキサンドロウキチは、切なさうに返答を待つてゐた彼女に返答として此んな言葉を投げたのです。彼女は聲立て、蒼ざめ、脚で立つて居れないで安樂椅子に倒れかかりました。

『神様が貴方をお許しになるでせう！』彼女は力ない聲でやうやく言ひました『此の人のことは私に免じて許して頂戴、ネートチカ、許してね、みんな、も、私が悪いんだから。私は病氣で、私は……』

『まあ何といふ虐待です、恥知らずです、卑劣です！』何の爲に彼が妻の眼の前で私に罪を着せようとして居るのか、それが今やうやく私に判つたので吃驚しながら叫びました『これは何う考へても賤しいことです。貴方は……』

『アンネター！』アレキサンドラ・ミハイロウナは恐怖に襲はれて私の手を握りながら叫びました。

『喜劇だ！ 要するに喜劇に過ぎない！』ビョートル・アレキサンドロウキチは形容の出来ない位に激して言ひました『喜劇だ、敢へてさう言ふ』凝乎と氣味の悪い笑を浮かべて妻を睨みながら言葉をつづけました『この喜劇の中で皆を欺してゐるのは獨り——貴女なんだ。此う言ふことを信じて頂きたい。我々は——』彼は口訥つて私を指しながら『此ういふ事件の曝露を怖れない。此のやうな事件が我々に向つて話し出された時に、羞耻を覺えたり、顔を赤らめたり、耳を塞いだりするだけの貞潔さは早既に我々には無いといふことを信じて頂きたい。御免なさい。私は手取り早く卒直に、飾り氣なく申しますが、恐くはさうしなけれやならないのです。奥さん貴女は批難の打ち處のない行ひだと保證出來ます』

か？ 此の……娘さんの』

『お、神様！ まあ何うした事です。貴方は何うかして居らつしやいます！ 恐怖の餘り知覺を失つて、死人のやうになつてアレキサンドラ・ミハイロウナは言ひました。

『お願いですが、大きな聲を出さぬやうに！』ビョートル・アレキサンドロウキチは嘲弄するやうに遮りました『其ういふ事は私の好まぬ處です。事件といふのは簡單な、筋道の通つた、至つて月並みなものです。私は此の娘さんの素行についてお訊ねしたいが、貴女は御存知ですか……』

けれども彼に終りまで言はせないで私は彼の手を掴んで向ふへ曳つばつて行きました。此の儘二三分経つたら——何もかも滅茶／＼になつたでせう。

『手紙の事は言はないで！』私は口早に囁きました『その場で彼女をお殺しになるやうなものです。私に對する非難は同時に彼女に對する非難となるでせう。彼女は私を裁くことは出來ないでせう。それは私がすつかり知り抜いてゐるからなんです……お判りですか、私はすつかり知つてゐるんです！』

彼は怪しげな好奇心をもつて瞬きもせず私を睨めてゐましたが、落付きがなくて顔から血の氣が消えました。

『私はすつかり知つてゐます。すつかり！』私は繰返しました。彼はまだ思ひ迷ふて居る様子でしたから機先を制しました。

『此ういふ次第なのです』私は、私達の方を怯々した切なさうな驚きをもつて見てゐるアレキサンド

ラ・ミハイロウナの方に向いて、聞こえるやうに言ひました「すべて私の罪です。丁度四年前に貴方達を欺ましたのです。私は図書室から鍵を持出して、今まで四年の間密かに本を読んで居たのです。私が本を読んで居る時にビョートル・アレキサンドロウキチに捕へられたのです。その本は……出来ない……私の手にすべき本でなかつたのです。私の身の上を氣づかつて此の人が貴女の前で危険を除いたのです……私は辯解してゐるんぢやないんです(彼の唇に皮肉な笑を認めて私は調子を早めました)すべて私が悪いのです。誘惑に負けて一度罪を犯しましたが、私は自分の罪を告白するのが耻かしかつたです……此れでみんなです。私達の間のことを言ふのは此れだけです」

「おゝ何と言ふ大膽な!」ビョートル・アレキサンドロウキチは私の言ひ終つてから此う囁きました。

アレキサンドラ・ミハイロウナは耳を澄まして私の言ふのを聞いてゐましたが、彼女の顔には疑惑がアリ／＼と現はれてゐました。彼女は交る／＼夫と私とを見較べました。沈黙がつづきました。私は辛うじて息が吐けたのです。彼女は胸の上に頭を垂れて、手で眼を蔽ふて、何か想像を描いてゐましたが、私の言つた言葉を一つ一つ考へてゐたのは言ふまでもありません。とう／＼彼女は頭をあげて瞬きもせず私を睨めました。

「ネートチカ、決して嘘なんか吐けない筈だわね」彼女は言ひました「此れですつかりなの?、本當に此れつ切りなの?」

「えゝすつかり」私は答へました。

「すつかりだつて?」彼女は夫に訊ねました。

「さうです。すつかりです」彼はやつと答へました「さうです!」

私はホツとしました。

「誓つて頂戴! ネートチカ?」

「えゝ誓ふわ」私は口訥つて答へました。

けれども平氣で居れなかつたのでビョートル・アレキサンドロウキチを見やりました。彼は嘲笑つて私の誓を聞いてゐたのです。私はハツと思ひましたが、私の動搖は哀れなアレキサンドラ・ミハイロウナに隠すことは出来なかつたのです。壓しつけられたやうな切ない悲しみが彼女の顔に現はれました。

「それで結構だわ」彼女は悲しげに言ひました「貴女を信じますよ。貴女を信じない譯には行かないものね」

「私は思ひますが、此の告白は價值のあるものです」ビョートル・アレキサンドロウキチは述べました

「貴女はお聞きでしたか? 何んと考へたものでせう?」

アレキサンドラ・ミハイロウナは何とも答へませんでした。空氣は段々苦しくなつて行きました。

「明日にでもなつたら本をみんな檢べて見ませう」ビョートル・アレキサンドロウキチは言ひました「何んなものが彼處にまだ有つたのか、それは知らないが……」

「そして、何んな本を読んだんです?」アレキサンドラ・ミハイロウナは訊ねました。

「本？ お答へなさい」私に向つて彼は言ひました『説明するには私より貴女の方がよく知つてる筈だ』裏に嘲りを含んで彼は言ひました。

私は困つて了つて一言も言へなかつたのです。アレキサンドラ・ミハイロウナは赤くなつて眼を伏せました。長い沈黙がつづきましたビョートル・アレキサンドロウキチは焦々して部屋の中を行つたり來たりしてゐました。

「貴方たちの間に何んな事が起つたかは知りませんがアレキサンドラ・ミハイロウナは思ひ切つて、しかし一語一語弱々して言ひ出しました『若しも此れつ切りだつたら』彼女は自分の言葉に特殊な意味を持たせようと努めながら、見まいとしてもつひ見字には居れない夫の凝視にすつかり度を失ひながら言葉をつぎました。若しも此れつ切りだつたら私達は何んで此んなに悲しんだり絶望したりするのか私には判りません。誰といふよりも私に一番罪があるので、それで私は心を痛めてゐるのです。私は此の娘の育ちを輕ろんじてゐたので、悉べてについて私の責任なんです。此の娘が私を許して下れるので、私が彼女に罪を負はせるなんて出來ない事だし、さうする勇氣もありません。だけれど、私達は何で絶望するんでせう？ 危険は過ぎ去つたし、此の娘を御覽なさい』彼女は段々と興奮して來て好奇心に輝く眼を夫に投げました『御覽なさい。この娘の不動慎な行ひが何かある結果を惹き起したのは本當でせうか？ 此の娘の心は潔くて立派だといふことや、この鋭い頭で』と私を撫でて、引寄せながら『智慧が敏つこく働いてゐて、良心が欺くことを怖れてゐる、それを私が知らなかつたのは本當かしら？』もう

澤山だわ！ 好い人達！ 止めませうよ！ 私達の悲しみの中には何か外のものが匿されてあるらしいんです。大方、私達には憎しみの影が残つてゐるんでせう。だけれど、親しい調和でもつて憎しみの影を追つ拂つて、お互ひの行き違ひを散らさうちやありませんか、多分、お互ひに澤山の行き違ひがあるらしいんです。これは第一に私の罪です。初め貴方に隠し立てしたのでした。初め何ういふ疑ひが私にかけたかかは存じません、これは病氣になつた私の頭が悪いです。だけれど……だけれど若し私達が幾分でも打明けて話が出来たら貴方達御二人は私をお許し下さる事と思ふんです……それでその、私が疑ひをかけられたについては大した罪ぢやないです……』

此う言つて彼女は顔を赤らめ、怯々しながら夫の方を見やつて苦しさを夫の言葉を待ち受けました。彼女の言ふ言葉を聽いて行く中に彼の唇に嘲るやうな薄笑ひが見えました。彼は歩くのを歇めて彼女の前に立止つて後に手を組み、彼女の興奮を観察して楽しんでゐるらしく思はれました。この凝視を身感じて彼女はまごつきました。彼は此の次に何んな事が起るか、それを待ち受けてゐるものやうに時を移しました。彼女の困惑は二倍になりました。つひに彼は、靜かな、長い皮肉な笑でもつて此の重苦しい空氣を破つたのです。

「お氣の毒です、可愛さうな方ですね！」つひに彼は笑ふのをやめて痛ましげに、眞面目な調子で言ひました『貴女は自分で演らうとも思はなかつた役割をお演りでしたね、何うなさらうと言ふのです？ 貴女は返事の中で新しい疑惑、いやもつと適切に言へば、貴女がご自身の言葉で巧みに隠すこと事の出來

なかつた昔の疑惑を私に燃え立たせやうとなすつたのですね？ 貴女の言葉の意味は、この娘さんに腹を立てないこと、不道德な本を讀んだ後でも矢張り此の娘さんは善良であること、本の倫理觀念なるものは——此う言ひませう——怖らく何等かの影響を與へるので、貴女も仕舞ひにはご自身で此の娘さんに代りお答へになつたやうです。違ひますか？ 貴女は説明しながら何か或ることを暗示してゐます。私の疑惑と冷酷とは或る別な感情から出てゐると貴女は思つてゐるらしいが。貴女は昨日も暗示してましたよ——どうぞ邪魔立てしないで下さい。私は卒直に言ふのが好きです——貴女は昨日も暗示してました。或る二三の人々に（覺えてゐますが、貴女の考へに依ればこれ等は優れて眞面目な、嚴格な、正直な、教養のある、羽振の好い人々で貴女が寛大の徳をもつてこれ以外に何とか名付けたか何うかは知つた事ぢやない）その二三の人々の處では、繰返へしますよ、愛といふものが（何うして此れを貴女が思ひ出したか神が知つてゐる！）外の例へば嚴格さや熱心さをして現はれないで、疑惑と冷酷として現はれるに到つたと暗示しましたね、昨日貴女が何んな事を言つたかよくは記憶しませんが……どうぞ邪魔はしないで下さい。貴女の養女さんを私はよく知つてゐますが、何でも聴くことが出来ますよ。何でも私は百遍でも繰返して言ひます——何でも出来ます。貴女は嘔吐きです。しかし今もつて判らないのは、私がさうした人間であると言ひ張ることが何うして貴女の氣に入るのか、といふ點です。私に此ういふ滑稽な役をしると命するのは何故か判りません。私は此の娘さんに戀するといふ歳でもありませんよ。それで、私は自分の義務を知つて居るといふことを信じて頂きたいのですよ。そして貴女が如

何に寛大に私を許してやらうとしてものです。私は過去のことを言ひますよ、つまり悪いことは何時になつても悪いことであり、罪惡は何時まで経つてもやはり悪い、耻づべき、汚はしい、下卑たものであり、腐つた感情を何の位に高めて見た處でやつぱり同じだとひます。しかし澤山です！ もう厭き／＼しました！ 此ういふ醜いことはこれ以上耳にしたくはない！」

アレキサンドラ・ミハイロウナは泣いてゐました。

『私のやる通りにさして置いて下さい、私に委して下さい！』彼女は泣いて私を抱きながら言ひました
『私の疑ひが耻しいものであつても打つちやつて置いて下さい。貴方の好きなだけ残酷にお笑ひなさい！ だけど此の哀れな娘は何の咎で此のやうな辱しめを耳に入れなげやならないのでせう？ それに私は庇ふことも出来なかつた！ 聲を出さなかつた！ おゝもう黙つて居れない、且那樣！ 我慢が出来ません……貴方のやり方は白痴氣てゐます！……』

『もう好いぢやないの、えゝ！』私は、我慢することが出来なくなつて残忍な罵倒が彼の口から出るのを怖れて、彼女を慰さめやうと此う囁きました。彼に對する恐れを絶へず押しかくして居ました。

『しかし眼先きの見えぬお方ですね！』彼は叫びました『貴女は知らないし、見もしないんだ……』
彼は暫く黙り込みました。

『其處から離れなさい！』彼は私の方に向いて、私の手をアレキサンドラ・ミハイロウナの手からもぎ取りました『私の妻に觸れることは許しませんぞ。貴女は私の事を汚したのだ。貴女が居ることは私の妻

を侮辱する事になるのです！ しかし……しかし話する必要のある場合、何で沈黙させられるのですか？」彼は足を踏み鳴らして叫びました「私は言う、すっかり言つて了ふんだ。貴女はあそこで、お存知ですかお嬢さん！ 何で私を脅かさうとしてゐるのか私は知らない。しかしそれを知らうとも思はぬ、お聴きなさい！」彼はアレキサンドラ・ミハイロウナの方に向けて言葉をつづけました『お聴きなさい！』

『お黙んなさい！』私は前へ駆け出して叫びました『お黙んなさい！ 一言だつて！』

『お聴きなさい……』

『お黙んなさい。爲になりませんよ』

『誰の爲にだ？ お嬢さん！』私の方をチラと鋭く睨んで遮りました『誰の爲にならないのです？ 私が此の娘さんも戀人から來た手紙をこの娘さんの手から奪ひ取つたのをご存知ですか？ これが私の家庭でなされたことです。これが貴女の身近でなされたことです。貴女が見なかつたもの、知らなかつたものと言ふのは之です！』

私は其の場に立つて居れない程でした。アレキサンドラ・ミハイロウナは死のやうに蒼醒めました。

『其んな筈はない』彼女は聴き取れない位の聲で囁きました。

『私はその手紙を見ましたよ、奥さん、その手紙は私の手に這入つたので、最初の頁を読んだのです。間違ひはありません、正しく戀人からの手紙でした。と、此の娘さんが其れを引つたかつたので、今は

此の娘さんが持つてゐる筈です——これは知れ切つたことで、疑ふ餘地はないのです。若しまだお疑ひになるならば此の娘さんを調べてご覧なさい。その後で疑ふなり何なりして頂きたい』

『ネートチカ』アレキサンドラ・ミハイロウナは私の傍に駆け寄つて『いゝえ、話しちや不可ない。不可ない。何う言ふことか知らないけれども……おゝ……おゝ……おゝ……』

彼女は両手で顔を蔽ふて泣き出しました。

『いゝえ！ どうしても其んな筈はない！』彼女はまた叫びました『貴方の間違ひです。これは……これは何んなことを意味するか判つてゐます……』彼女は凝乎と夫を見つめながら言ひました『貴方……私には出來ない……貴女は私を欺してはゐない。欺すことは出來ません！ 隠し立てしないで、すっかり、すっかり話して頂戴！ 此の人の言ふことは間違なんぞでせう？ 間違ひでせう？ 此の人は見當違ひなことを言つてるんでせう？ まつたく本當ぢやないでせう？ 嘘なんぞでせう？ お聴きよ、何うしてすつかり話して下れないの？ アンネタ。私の子供、本當の子供！』

『お返事なさい。早くお返事なさい！』頭の上でビョートル・アレキサンドロウイチの聲が聞こへました

『お答へなさい。貴女の手にある手紙を私が見たか、それとも見なかつたか何うか……』

『えゝ！』感動で息塞りながら答へました。

『その手紙は貴女の戀人からの手紙ですか？』

『さうです！』私は答へました。

「その人と今もなほ関係がありますか？」

「ええさう。さうです」私達の苦痛をすっかり片付けて了はうとして、すべての間に徹底的の返答をしながら我を忘れて此う言ひました。

「あれをお聴きですか。さてこれから何を言ふつもりですか？ 善良な間違ひのない心をお信じなさい」彼は妻の手を取つてつけ加へました「貴女の病氣から生れた想像をすて、私の言ふ事を信じなさい。今こそ分つたでせう。此の娘さんが何んなお方か。私は貴女の疑ひがみんな有り得ないものだといふことを正して置きたかつただけです。私は此うもあらうと前から氣附いてゐたので、それが貴女の前で事情が發ばかれたので悦しいです。此の家で同じ卓を圍んでゐて、貴女と抱き合つてゐる此の娘さんを見るのは堪らなかつのです。それがつひに此うです。貴女の盲目が私を奮起させたので、それがために私は此の娘さんに注意を拂つて、後を跟け廻はしてゐた譯です。貴女が一等初め何んな疑を抱いたか、何んな事が想像に織り込まれたかは知らない。でももう決定してしまつて、あらゆる疑ひが晴れた譯です。そして明日にでもなつたら、お嬢さん！ 明日にでもなつたら此の家から出て行つて貰ふことにしませう！」私の方へ向いて彼は言ひ終へました。

「おやめなさい！」アレキサンドラ・ミハイロウナは椅子から立上りざま此う言ひました「この有様はすべて信じられないことです。私をそんな怖しい眼をして見なくともいゝでせう。笑はないで下さい。私は貴方の言ふことを自分の考へで判断します。アンネタ、私の子供、此方へいらつしやい。手をお貸し

さうさう。私達はね、みんな罪深いんです！」彼女は涙のために聲を震はして憤ましげに目を見やりながら言ひました「誰が私達の中で誰かの手を斥けることが出来ませう？ 手をお貸しアンネタ、可愛いあたしの子供、私は貴女より立派ぢやないし、善良でもないわ。貴女がゐたつて決して私を侮辱するとはありませんから。私だつてやつぱり罪人ですもの」

「奥さん！」ビョートル・アレキサンドロウイチは吃驚して叫びました「奥さん待つて下さい！ お忘れないうちに！」

「私、何も忘れちや居ませんよ。遮ぎらないで下さい。證據を見せて頂けませんか。貴方は此の娘の手紙を見たとし、讀みまでしたんぢやないですか？ そして此の娘は……その手紙は自分の愛する人から來たことを告白したと貴方は言ひますね、しかし此れは此の娘の罪を證明してゐるといふのですね？ 多分この娘を此ういふ風に待遇ひ、此うして貴方の妻の前で辱しめる事が許されてあつたのでせうね？ 旦那様！ 貴方の妻の前ですよ。この事件を貴方はお裁きになりましたね？ 多分此れは何であつたかお判りでせうね？」

「私は逃げるものが残つてゐる。まだ此の娘さんにお詫びすることが残つてゐる。これは貴女が望んだ事ぢやありませんか？」ビョートル・アレキサンドロウイチは叫びました「貴女の言ふことに我慢が出来ない！ 貴女は自分の言つた事を覚えてゐますか！ 何んな事を自分で言つたか判つてゐますか？ 自身で何んな事を、誰を庇はうとしてゐるかお判りですか？ それに私はすっかり知り抜いてゐるんぢや

ありませんか……」

「それで、事件の發端を知らないのです。それは怒りと傲慢が眼を遮つてゐるからかうなんです。何を私が庇ふか、何んな事を言ひたいのか、それを貴方は少しも知らないのです。私は過失を庇はうとはしません。しかし貴方は裁きました——裁いた程ですから明澄見てゐるでせう何を——大方——この娘に罪はないと裁いたでせう！ さうです。私は過失を庇ひ立ては致しません。お望みとあれば辯解もします。若しこの娘が人妻で、人の母であつてそして自分の義務を忘れたならば貴方の言ふのに賛成しませうが私は此の通り言ひ譯しましたよ。これを知つたら咎めないで下さい。若し手紙を受け取つたとすれば此の娘は悪いこととは知らなかつたのでせう！ 若しも経験しない感情に惹きつけられたとすれば、誰が止めることが出来たでせう？ 誰よりも私に罪があるとすれば、それは此の娘の心を看督することが出来なかつたでせう。これは最初の手紙ぢやないでせうか？ この娘の持つてゐる處女の香はしい感情をご自身の卑しい疑ひで辱しめたんぢやありませんか？ 手紙に關するこの娘の空想をご自身の犬儒學的な考へで汚したんぢやないですか？ 貴方は此の純潔な處女の羞耻といふものを見ないので。それは純真そのやうに純潔なこの顔に輝いてゐるもので、今でも見てゐるし、驚いて氣を失つてゐる此の娘さんが、口に出す術を知らないで苦しさで悶えながら貴方の情知らずの間に對して告白してゐるあの時にも認めました。えゝさうですとも！ 情知らずですとも。残忍です。私は貴方が判らない、私は貴方にお詫びなんぞ決して、決してするものですか！」

『どうぞ私を許して下さい！』私は彼女を抱きしめて叫びました『私を許して、信じて下さい。衝きとばさないで……』

私は彼女の足元に倒れかゝりました。

『若しかしたら、とう／＼』彼女は息づまるやうな聲でつづけました『若しかして自分の言葉で此の娘を怖れさせ、この哀れな娘に自身が悪かつたと思ひ込ませ、若しかして此の娘の良心や魂を苦しめ、安らかな心臓を傷つけたのであつたら……おゝ！ 貴方は此の娘を追ひ出さうとして居るんです！ 誰が此んなことを仕出かしたかお判りですか？ 此の娘を追ひ出すんだつたら、二人一緒に——私もやつぱり追ひ出されるのはご承知でせう。お判りですか？ 旦那様！』

彼女の眼は輝いて胸はうねつて、病的の緊張が高まり、とう／＼最後の危機にまで到りました。

『いや厭々する程聞きましたよ、奥さん！』ビョートル・アレキサンドロウイチは叫びました『もう澤山です！ プラトニツクな情熱だといふことも——これが私に取つて破滅だといふことも知つて居ます。奥さん。お判りですか。私の破滅ですぞ。奥さん。渡金した罪惡でもつて私を苦しめないで下さい。箔を取つて了へ！ 貴女が自分で悪いと感じてゐるならば、自分について或ることを知つてゐるならば、（貴女に思ひ出させるのは私の役ぢやない）また、私の家に残つてゐるといふ考へが貴女のお氣に召すならば……私はたゞ一つ云ふことがある。思ひ出さしてあげることがある。貴女が自分の考へを實現することを忘れやうたつて駄目ですよ。それ、今を去ること……若しお忘れなら思ひ起こさしてあげる

が……」

私はアレキサンドラ・ミハイロウナをチラと見ました。彼女はもはや心の苦痛に堪え兼ねて、眼を少し開いたまゝ、際しない苦しみを受けつゝ、痙攣るやうにして私に倒れかかりました。危く打つ倒れる處でした。

「お願ひです。今度だけでも此の人を助けて下さい！ お終ひの言葉を言はないで下さい」私は自分が何うなつたか知らないで、ビョートル・アレキサンドロウイチの足元に膝まづいて叫びました。けれども間に合ひませんでした。私の言葉に答へる力なげな叫びが聞こえると、哀れな女は意識を失つて床に打倒れました。

「アとうとう！ 貴方は此の女を殺して了ひましたね！」私は言ひました「誰か呼んで下さい！ 此の女を助けてやつて下さい！ 私は貴方の書齋で貴方をお待ちします。貴方にお話したい事があるんです。すつかりお話しませう！」

「話すつて何を？何を？」

「後で！」

氣絶と發作は二時間續きました。家中の人は恐怖に囚へられました。醫者は疑はしげに頭を傾げました。二時間経つて私はビョートル・アレキサンドロウイチの書齋に這入りましたが、彼は今妻の所から歸つたばかりで、心を爪で掻きむしりながら蒼さめ、混亂して部屋の中を歩き戻りしてゐました。

私は此うした彼の様子を一度も見たことがなかつたのです。

「私に話したいと言ふのは何んな事です？」荒々しい聲で彼は言ひました「何か話したい事があるんですか？」

「これが貴方が取りあげた手紙です。貴方知つて居るでせう？」

「かうだ」

「お取んなさる」

彼は手紙を手にして明りの方へ持つて行きました。私は注意深く見守りました。彼は二三分経つてから四頁目を返して署名まで読み了へました。彼が逆上したらしいのが私に判りました。

「何です此れは？」彼は驚きの餘り呆りして私に訊ねました。

「この手紙がある本の中で見つけたのは丁度二三年前でした。置き忘れられたものに違ひないと思つて読んで見ました——それですつかり解つたのです。誰に渡しやうもなかつたので、其の時からすつと手紙を持つて居たのでした。彼女に渡す事は出来なかつたのです。貴方には？ 貴方はこの手紙の内容を知ることが出来ないのです、この手紙の中には痛ましい物語が充満です……何うして貴方の虚偽を——それは知りません。此れはどうも不可解です私はまだ貴方の暗い魂をハッキリ突き止めることは出来ません。貴方は彼女の頭を抑へやうと欲して抑へる事が出来ました。けれども何の爲めに？ それは病人の混亂した想像に對して勝利を得るため、彼女が間違つてゐることを證據立てるため、また彼女よりも罪

が少いことを證據立てるためでした！そして貴方は目的を達しました。それは、彼女の疑ひが消え去つた思想のこびり附いた考へであり、多分、貴方も加はつてゐる群衆の不公平な裁きに服した毀された心の最後の嘆きでしたらう。『貴方が私を愛してゐるのは何といふ不幸です』これは彼女の言つた言葉で、彼女が貴方に證明したかつた所です。貴女の高慢と嫉妬心のつよいエゴイズムは冷酷でした。さやうなら！ 辯解はご無用です！ けれども御覽なさい。私はすっかり知つてゐます。すべてを見抜いてゐます。これをお忘れならないやうに！』

何んな事をしてつたか、少しも判らないので自分の部屋に私は這入りました。入口にビョートル・アレキサンドロウイチの助手オフローフが立つてゐました。

『一寸貴女にお話致したいんですが』彼は叮嚀にお辭儀して言ひました。

私は彼が何を言つたのか少しも判らないで彼を睨めました。

『後にして下さいな。すみませんけれども。氣持が悪いから』彼の傍まで行つて此う答へました。

『さうでございますか。ぢや明日また』彼は何か二重の意味を含んだ微笑を浮べて別れ去りました。

けれども、怖らく此れは私にさう見えただけでしたらう。これ等のものは皆——私の眼の前で閃いたかのやうに思はれたのでした。

白
夜

市橋善之助譯

白 夜

夢想家の日記からの感傷的な物語

第一夜

親愛なる讀者よ、不思議な夜、私達が若い時にだけあり得るやうな夜だった。空には星が輝き、あかるくて、それを見ると誰でもこんな空の下に不機嫌な、氣儘な人間が住んで居るか知らず不思議に思はずには居られない。親愛なる讀者よ、それもうら若き、非常にうら若き疑問だが、願はくば主がもつと屢々それを諸君の心に入れ給はむ事を！……氣儘な、不機嫌な人々の事をいふと、私はその日一日の私の精神状態を思ひ出さずには居られない。私は早朝から異様な意氣沮喪に抑へ付けられて居た。突然私は一人ぼつちで、皆が私を棄て、私から去つて行くやうな氣がした。勿論、誰でも「皆な」とは誰かと訊ねる権利がある。何故なら私は凡んど八年ベテルスブルグに住んで居たけれども、凡んど一人の知己も無かつたから。されど私は知己を何に求めたか。私は全ベテルスブルグがその儘知己だった。だ

から私は全ベテルスブルグが荷造りをして夏の別荘に出掛けた時、皆が私を見棄てるやうに思つたのだ。私は只一人残されはしないかと心配して、ひどく落膽し、どうしていゝか分らずに、まる三日間町をさまよひ歩いた。ネフスキーを歩いても、ガードンスへ行つても、堤防をぶらついてても、一年中同じ時、同じ場所できまつて會つて居た人の顔が一つも見えなかつた。勿論彼等は私を知らないが、私は彼等を知つて居る。私は彼等を精しく知り、彼等の顔の研究を凡んど濟せて居た。そして、彼等が快活な時には私も喜び、彼等の顔が曇つて居る時には私もがっかりした。私はフォンタンカで、きまつた時間に、出會はす老人と友達見たいに成つた。非常に眞面目で、物思ひに沈んだ顔をして居た。彼はしよつ中一人言をいひ、左手を振り、右手には金の頭の付いた長い、節だらけのステツキを持つて居る。彼は私を注目し、私に温情を感じる。私が偶然フォンタンカのきまつた場所に、きまつた時に居ないと、きつと彼は失望することだらう。だから僕等は殊に二人とも上機嫌の時にはすんでの事にかしらを下げ合はうとするのだ。いつか二日も會はず、三日目に會つた時には、僕等は實際帽子に觸つたが、早く氣が付いて手を下し、物いひ度げな顔して擦れ違つた。

私は家も知つて居る私が歩いて行くとあらゆる窓から彼等は私を探しに道へ走り出て「御早う！御達者か。御蔭で私は至極丈夫だ。五月には僕のところにもう一階出来る筈だ」とか「御達者か。俺のところは明日装り變へるのだよ」とか「俺はすっかり焼けつちやつた。怖かつたよ」とかいひさうだ。中には僕の御氣に入りもあり、親友もある。彼等の中の一つはこの夏建築家に治療して貰はうと思つて居

る。私は毎日わざ／＼手術をやりしくじりはしないかと見に出掛ける事だらう。下らない！ 然し私はとき色の非常に綺麗な小さい家に起つた出来事は決して忘れないだらう。それは非常に美しい、小さい煉瓦作りの家で、私を非常に懇ろに、見苦しい隣家は非常に高慢な風で見てたので、そこを通り掛る時にはいつでも私は嬉しかつた。突然先週私が通りを歩いて居て、私の友達を見たら、「皆なが私を黄色に塗ります！」といふ悲しげな聲で聞えた。悪人め！ 野蠻人め！ 彼奴等は何にも彼も、圓柱も、軒蛇腹も容赦せず、私の小さき友は可哀さうに金糸鳥の如く黄色く成つて居た、すんでの事に癩癩持ちに成りさうだつた。そして今に成つても私は、支那帝國の色を塗られた、可哀相な、醜い友を訪れる勇氣が無い。

讀者よ、そこで諸君に、私がどういふ意味で全ペテルスブルグの知己か分つたでせう。

まる三日自分の不安の原因が分らずに苦んで居た事は既に前に述べた。そして私は通りに居ると不安だつた——此奴は行つて了つた、彼奴も行つて了つた、もう一人の奴はどうしたのだらう？——家に居ても私は氣が氣でなかつた。この晩といふもの、私は私の隠れ家で頭を痛めて、どうしたのだらうと考へた、どうしてこゝでこんなに落ち着けないのか。そして思ひ餘つて、私は、マトローナの御蔭でうんと大きく成つた蜘蛛の巢でおゝはれた、汚ない、緑色の壁や天井を熱々視た。私は「原因」がそこにあるのか知らと思つて、家具を悉皆一々調べ、椅子を一々調べた（何故なら、椅子が一つでも昨日あつたと同じところに無いと私は氣が氣でない）。私は窓も見た。然し何にも成らなかつた。……それで少しも氣

持快く成らなかつた！ 私はマトローナを呼びに行つて、蜘蛛の巢や一般にだらし無い事を、親父らしく訓戒してやる事迄思ひ付いた。然し彼女は仰天してきよ／＼私を眺めたゞけで、一言もいはずに立ち去つたので、蜘蛛の巢は今日に至る迄氣樂にその場所に引つかゝつて居る。とう／＼今朝初めて私はどうしたのか分つた。さうだ、皆なが私をまいて、夏の別荘へ馳け出して居るのだ！（いひ方の通俗な事は御容赦あれ。私は飾つた語には氣が向かぬのだ。）……何故ならペテルスブルグにあつたものは皆休暇に出かけたか、出かけつゝあつたからだ。何故なら辻馬車に乗つて居た威嚴ある様子をされた尊敬すべき紳士が皆、すぐに面のあたりで、日々の務が済んでから、團樂せる家庭、夏の別荘へ行く尊敬すべき一家の長に一變したからだ。何故なら「や通行人が「皆僕等はおう少しの間こゝに居るだけだ。後二時間の内には夏の別荘へ出掛けて居るよ」と逢ふ人毎にいつて居るやうに思はれる。一種全たく特別な風をして居たからのことだ。雪のやうに白いきやしやな手が硝子窓をこゝ／＼たゝいて窓が開き、植木鉢を持つて居る行商に聲が掛つて、綺麗な娘の頭が現はれると——閉ち籠めた町の下宿所で花と春とを味ふ爲めだけでなく、皆なが田舎へ直ぐに出掛けるので持つて行く事が出来るやうに花を買ふのだと私は忽ち想像した。その上、私は私の新しい一種特別な研究が進歩して、様子を見たゞけで、この男はどんな夏の別荘に住んで居るか正確に識別する事が出来た。カメンニイ島やアプテカルスキ島、ペテルホフ通りに住んで居る人は凝つた雅致のある様子、流行の夏服、町へ乗つて来る立派な馬車でそれと知られた。バルゴロヴォやもつと隔つたところへ行く人々は一瞬で程好い、品の有る様子の印象を残す。ク

レストヴスキー島の旅行者は仰へ切れぬ陽気な様子で分つた。正しく山のやうな家具、テーブルや椅子や、オットマン(譯者註、褥附きの椅子にして、長椅子の背部、及び腕懸なきもの)や、長椅子や、ありとあらゆる家事向きの道具を積み、自分の腫子かなんかのやうに主人の財産を守護して、よくそのつてつべんにおいぼれた料理人が座つて居る荷馬車の側を、手に手綱を控へてのろくさ歩いて行く驅者の長い行列に偶然ぶつかつたり、家事用の品物をうんと積んだ小舟がネヴァ河やフォンタンカを黒海や諸島の方へ匂ひ行くのを見ると——その馬車や小舟が私の心の中では十倍にも百倍にも成つた。私は何も彼も動き出し活動し、本式に隊を組んで夏の別荘へ出掛けやうとして居ると想像した。ペテルスブルグが今にも荒地に成りさうに思へたので休暇に行くところも無く、出掛ける縁もないのが今や羞かしくつて、無念で悲しかつた。どんな荷馬車とでも一緒に出掛け、辻馬車に乗つて居る尊敬す可き様子をしたらどんな紳士とでも一緒に出掛ける氣だつたが、誰も全たく誰も私を招いて呉れなかつた。彼等は私を忘れて了ひ、私は本當に彼等に赤の他人のやうな氣がした!

いつもの如く何處を歩いて居るかすつかり忘れて續け様に遠方迄ぶらついたが、突然氣が付いて見ると私は市の門に居た。忽ち私は氣樂に成り、疲れを忘れ、重荷が私の靈から落ちるか如くに只ぼつとして關門を過ぎ耕作した野や草地の間を歩いた。通行人も皆私に非常に心安い顔つきをして、すんでの事に挨拶しさうに思へ、彼等は皆何か非常に嬉しさをうらな様子だつた。彼等は一人残らず葉巻烟草をくゆらして居た。で私は此上なく愉快に成つた。突然氣が付いたら伊太利に来て居たといつた感じだつた——

都市の壁の間で窒息しさうな、私のやうに半病人の町民に對する自然の効果はそんなに強かつた。

春が近づいて天が授けた全威力、あらゆる力を出し、俄かに葉を出し、おつびらにめかし込み、花の眞珠を付けると、ペテルスブルグ附近の自然には言表し難く感動的なものがある……どういふものか私は弱々しい、肺病の娘を聯想しすには居られない。皆な彼女を或る時は憐愍を以て、或る時は同情的な愛を以て見、或る時はまるで注意しないが、突然瞬く間に彼女は偶然合點の行かぬ程可愛らしく、美妙に成るので、諸君は印象を受け、酔つぱらつた様に成つて、どういふ力があの悲しげな、憂ひに沈んだ眼をあんな火できらめかせたか。何があの青白い頬に血を招んだか。何があの優しい顔を情熱に浸したか。何があの胸を嵩ませたか。何がかくも突然にあんな微笑を浮ばせ、あんな快活な、活潑な笑で輝やかせて、かの憐れな娘の顔に力と、生命と美とを招び入れたかと不審を抱かすには居られない。諸君は振り返り、誰か居るのぢやないかと思つて捜し、諸君は憶測する……然しその瞬間が過ぎ、翌日に成ると多分は以前の如く物思ひにもみ、ぼんやりした様子、青い顔、溫和しい、おどろ／＼した動作、更に悔恨のしるし、非常な苦悶と、疾く過ぎ行く心を紛らすものに對する追惜の痕に出會はすだらう……そして諸君はこの瞬間的美がかくも速かにうつろひて、又還らず、諸君を照したが、かくも頼りに成らず、果敢なかつたを悲しみ、彼女を愛する間もなかつたのを悲しむ……

而かも私は夜の方が晝間よりも好かつた。といふのはかういふ譯だつた。

私は非常に遅く町へ歸つた。そして、宿所の方へやつて來ると十時打つた。私はその頃合には誰にも

出會はさない運河の堤防を通つた。私は町の非常にへんびな部分に住んで居る。私は歌を歌ひ乍ら歩いた。といふのは、私は普段、喜びを分つ友も知己も無いものがすべて然るが如く、幸福な時には一人で鼻唄を歌つて居たから。突然私はまるで思ひも寄らぬ冒険をやつた。

運河の欄干に倚つ掛り、肘を手摺に戴せて或る女が立つて居た。彼女は一心に運河の泥水を見て居る様子だつた。彼女は素敵な帽子を冠り、派手な小さい黒いまんとを着て居た。「ありや娘だが、屹度悲觀して居るのだ」と私は考へた。私の足音が聞えぬ様子で、私が息を殺し、胸をどきどきさせて側を通つた時にも身じろぎもしなかつた。

「變だな」と私は考へた「何か非常に考へ込んで居るのに違ひない」と忽ち私は石化したやうに立ち止つた。私は忍び泣きを聞いた。さうだ！間違ひでは無かつた。娘は泣いて居た。と思ふ間も無く私はしきりに泣きじやくるを聞いた。どうしたのだらう！私は氣が沈んだ。で、私は女には臆病だつたけれども、この時は一種特別だつた！私は振り向いて、彼女の方へ一足進んだが、この間投詞が露西亞の社交界の小説にどれにも千度も使つてある事を知らなかつたら、確かにこの「マダム」といふ語を口にしたに違ひない。私を制したのはひとへにその考へだつた。だが私が語を探して居る間に、娘は不圖氣が付き、振り返り、下を向き、堤防傳ひに、私の側をこつそり逃げた。私はすぐに彼女の後を追つたが彼女はそれを察して道を横切り、人道を歩いた。私は彼女の後から通を横切る勇氣は無かつた。私は捕へられた鳥のやうに胸が躍つて居た。突然偶事が來て私を助けた。

人道の同じ側、娘から隔つてないところに燕尾服を着た、立派な年をして居るが態度はちつとも立派でない紳士が突然現はれた。彼はよろめき、念入りに壁にぶつかつて居た。娘は夜誰にも家へついて來て貰ひ度くない娘にきまつて見えるおどろした急がしさでまっすぐに矢のやうに飛んだので、私の「好運」がそのかさなかつたら、きつとかのよろ／＼した紳士は彼女を追つかけ無かつたらう。

突然誰にも物をいはずに、かの紳士は私の未知の婦人を全速力でおつかけ出した。彼女は風のやうに駆けつこしたが、紳士は段々追ひ付き——とう／＼追ひ付いた。娘は悲鳴を擧げたが、私は……仕合にも、素敵な、節のついたステツキがその時偶々私の右の手にあつた。忽ち私は町に向ふ側に行き、忽ち、かの無遠慮な紳士ははつと氣がつき、服せざるを得ぬ議論を飲み込み、一言もいはずに退却し、すつと離れてから初めて、幾分活潑な語で私の行動に不服を言つた。が彼の語は凡んど私達に聞えなかつた。「腕を御貸しなさい」と私は娘にいつた。「さうすりやあもう、うるつさい眞似はしないでせう」

彼女は興奮と恐怖とで未だふるへて、物もいはずに私の腕を持つた。お、無遠慮な紳士！私はその時どんなにか君に感謝した事だらう！私は彼女を偷み見た。彼女は非常に愛嬌があり色が黒かつた。——私の憶測は當つて居た。

彼女の黒い睫毛には——今し方の恐怖の爲めか、さつきの悲しみの爲めか、それは分らないが——依然として、一滴の涙がきらめいて居た。然し唇には既にかすかに微笑が浮んで居た。彼女も私を偷み見て、仄かに赤面して、下を向いた。

「そら御覧なさい。さつき何故私を追つ拂つたのです。私がこゝに居たら、何事も無かつたでせうに……」

「だつて私、あなたが分らなかつたのですもの。私、あなたも……」

「ちや、今は分つて？」

「幾らかは！ ね、例へば、あなた、どうしてふるへていらつしやるの？」

「おや、初めつ端から巧く當てましたね」と私は娘が利口なのを喜んでいつた。智慧は美と一緒になつて、不適當のものではない。「さうだ、あなたは一目でどんな人間を相手にして居るか、當てましたよ。全くその通りです。私は女には羞かしがりなのです。僕は胸騒ぎがするのですよ。嘘ぢやありません。あなたが今さつき紳士に驚かされた時と同じ様にね。僕は今驚いて居るのですよ。夢のやうです。私が女の人と話をするところがあるなんて、夢にも思つた事がありませんよ。」

「えゝつ？ まさか……」

「本當ですよ。僕の手がふるへたら、そりやああなたのやうな可愛らしい、小さい手で持つて貰つた事が無かつたからのことです。僕はまるで女の人は知らないのです。つまり女の人に慣れて居ないので。ね、僕は獨りで暮して居ます……女の人にはどういふ風にして話していゝかさへ分りません。ね、僕はあなたに何か馬鹿な事を云やしませんでしたか！ 正直にいつて下さい、初めに保證して置ませうね。僕は滅多に怒りやしませんよ……」

「いゝえ、ちつとも馬鹿な事、おつしやりやあしませんわ。私にどうしても打明けていへとおつしやるなら申しますが、女はさういふ臆病は好くものです。もつと御話する事なら私も構はないの。家迄の間にあなたを追つ拂やしません」

「あなたの御蔭で」と私は嬉しくつて息も切れなくいつた「私の臆病も無く成りませう。さうすると今度はすつかり機會がなくなる……」

「機會ですつ？ どういふ機會でせう——何の？ 餘りいゝ語ぢやありませんね。」

「御免々々、いけないや。いひそこなひです。だが、かういふ時に、望みの無いものが居るでせうか……」

「好かれ度いといふ望みの事？」

「さうですよ、だが、後生だから、怒らないで下さい。私の事を考へて見て下さい！ ね、私は二十六年なのに、誰にも會つた事が無いのですよ。どうして、巧く、如才無く、適切に話が出来ませう。すつかり正直に御話したら、合點が行くでせう……心がしやべつて居るのに、黙つて居る事は出来ません。だが、決して……本當ですよ。女は一人も知りません！ 一人だつて知りません！ 僕は只、いつか誰かにひよつくり出會はすだらうと毎日空想して居るだけです。あゝ、僕がしよつ中さういふ戀をして居る事を知つて下さつたら……」

「どんなの？ 誰に？」

「いや、誰にでも無い。理想にですよ。寝て、夢に見る人ですよ。僕は夢で本式の小説を拵へるので
すよ。あゝ、分らないの！で、實際、もう二三人の女に會つた事がありますよ。だが、どんな女だつ
たでせう。皆な主婦さんでしたよ……だが、僕が何度も、通りを歩つて居る誰か貴族的な婦人に、勿論
向ふが獨りの時に、話し掛けやう、思ひ切つて無邪氣に話し掛けてやらう、勿論おどくし、謹んで、
熱心に話し掛けてやらう、僕は孤獨で死に掛つて居ますといつてやらう、私を追つ拂はないで下さいと
歎願しやう、僕は機會がなくなつて、女の方に知り合ひが無いといはう、私見たいな不運な男のこんなお
どくした祈願を斥けない事は眞に女の義務だといふ事を飲み込ませてやらうと思つたといふ話は可笑
しいでせう。事實、その女が二言三言、姉さんらしいことを同情を籠めていひ、一寸見たゞけで私を斥
けず、私を信用して、私のいふ事を聞いて呉れ、何なら私をからかつても構はないから、私に勇氣を附
けて呉れ、たとひ後で又會ふ事がないにしろ、二語、たつた二語でいゝから私にいつて呉れる事が僕の
望の全部なのですよ！……だが、あなたは笑つてますね、然し、だから僕が……」

「怒つちやいやですよ。私は只あなたがぶつかつて見ないで、一人くよくくしていらつしやるのが可笑
しいのです。やつて御覧なつたら、たとひ町中でも、多分成功なさつたでせう。飾り氣がない程好いわ。
……情深い女だつたら、馬鹿か、それより、その時、何かで虫の居所が悪かつたら、あなたがそんなに
おどくして請求なさるその二言を呉れずにあなただを追つ拂ふ氣には成れないでせう。……ですが、私
は又何をいつてるのでせう？ 勿論女はあなたを狂人だと思ふでせう。私は一人で考へました。私の人

達の生活も私好く知つてますわ。」

「あり難う、あり難う」と私は叫んだ「御蔭でどんなにか爲めに成つたでせう！」

「嬉しいわ！ 嬉しいわ！ ですが、どうして分つたの、……私がね注意したりつき合つたり仕甲斐の
ある女だといふ事が……實際、あなたがおつしやつたやうな御主婦ぢやありませんのに、どうして私に
近づく氣に成つたの。」

「どうしてですつて？……だつてあなた御一人だし、あの——紳士はどうも横着でしたし、夜と來て居
る。……一つの義務だつたといふ事を認めて下さらなくちやあ。」

「いゝえ、私のいふのは前の事よ、向ふ側の事よ、——ねえあなたは私に近附かうと御思ひに成つたぢ
やありませんか。」

「向ふ側で？ 實際僕はどう御答へしていゝか分らない。僕は……僕は今日は幸福だつたのですよ。僕
は歌を唄つて歩き、田舎へ出掛け、こんなに幸福だつた事は無かつたのですよ。あなたは……多分それ
は僕の想像だつたらうが。こんな事をいひ出したからつて怒らないで下さい。僕はあなたが泣いて居る
と思つたのですよ。それで僕は聞いて居られなかつたのですよ……僕は心が痛みました……あゝ、あゝ
まさか、僕があなたの事を心配したからつて差し支へ無いでせう。あなたに兄弟見たいな憐愍を抱いた
からつて悪い事は無いでせう……許して下さい、憐愍といひましたね……、簡単にいへば、まさかあな
たは僕が知らず／＼刺戟されて、あなたに近附かうとした事を怒つてやしないでせう？……」

「いゝのよ、もう分つたのよ、もういはなくつてもいゝの」と娘は下を向き、私の手を握り締めていつた。「そんな事をいひ出したのは私が悪かつたの。でも、私あなたを誤解しなくつてよかつたわ……」ですが、私もうこゝが家なの。この曲り角を降りなくちや、こゝからもう二足許りですの……さいなら、ありがたう御座いました!……」

「まさか……まさかあなたは……もう二度と御目に掛らないといふ積りぢやないでせう?……まさかこれだけでけりだといふ譯ぢやないでせう?」

「ね」と娘は笑つていつた「最初、あなたはたつた二語でいゝとおつしやいまして。それなのに今は……でも、私は何とも申しますまい……多分御會ひする事もあるでせうよ……」

「僕は明日こゝへ來ます」と私はいつた。「あ、御免、僕はもう無理をいつて居る……」

「えゝ、あなた餘り辛抱悪い方ぢや無いのね……利かぬ氣の方ね。」

「まあ聞いて下さい!」と私は彼女を遮ぎつた。「話が側道へそれから御免……ね、僕は明日こゝへ來すには居られないのです。僕は夢想家です。僕には實生活が非常に少ないので、かういふやうな瞬間は非常に稀だと思ひ、かういふ瞬間は再び夢想で繰返さずには居られないのです。僕はあなたの事を夜つびて、一週間で、一年中夢想する事でせう僕は確かに明日こゝへ、丁度この場所へ、丁度同じ時間によつて來て、今日の事を思ひ出しては幸福に成つて居るでせう。こゝは僕にはもう懐しいのです。僕にはもうペテルスブルグにかういふところは二三箇所あります。僕も會て……あなたのやうに……思ひ出の

爲めに涙をそゝいだ事があります。事に依つたら、多分あなたも十分前にさういふ思ひ出の爲めに泣いていらつしやつたのでせう……だが、御免、又僕はうっかりしちやつた、多分あなたはこれ迄に此處で特別に幸福だつた事があつたのでせう……」

「宜しい」と娘はいつた「大抵私も明日十時に此處へやつて來てよ。私あなたを御禁めする事が出來ないのが分つたわ……。實は私こゝへ來なくちや成らないの、あなたと會ふ約束をするのだと思つちや困るわ、前以て御話して置きますが、私は自分の用事で此處へ來なくちやならないの、ですが……私あなたにあつて御話しますが、あなた本當にいらつしつても私構はないの。第一今日のやうに不愉快な事があるかも知れませんが、氣にしちや嫌よ……簡単にいふと、私只あなたに御目に掛つて二語御話し度いの。ね、只、私を見下げちや嫌よ! 私がそんなに輕々しく會ふ約束をすると思つちや嫌……私ある事が無ければ約束しやしないでせう……ですが、その或る事は私の秘密にさせて下さいな! 唯前約なの……」

「約束ですつて! 話して下さい、聞かせて下さい、前以てすつかり聞かせて下さい、僕はどんな事でも承諾する。僕はどんな事でもします」と私は喜んで叫んだ。「私は自分の事に責任を負ひます、僕は從順に、鄭重にします……あなたは私を知つて下さるでせう……」

「私あなたがよく分つて居るからこそ、明日來て下さいといふのですよ」と娘は笑つていつた「私あなたの事がすつかり分つてよ。ですが、先づ第一に(怒らないで、私、御願ひするやうにして下さい)――

ね、私、飾らずにいつてよ）私に戀しないといふ條件で来て下さらなくつちや困るわ……それは本當にいけませんよ。私友情は悦んで受けるわ、さあ手を……ですが、御願ひですから、戀しちやいけませんよ！」

「誓ひます」と私は彼女の手を強く握つて叫んだ……

「まあ、誓つたりしちや嫌よ、あなたが火薬のやうに今にも痲癩を起しさうな事が分るわ。あんな事をいつたからつて私を悪く思はないで頂戴。あなたが分つて下さりさへしたら……私にも、物をいつたり、忠告を求めたりする事が出来る人は誰も無いのよ。勿論誰も、町で忠告者を探しはしませんわ、でもあなたは例外よ。私あなたの事はもう二十年も友達だつたかのやうによく分りますわ……あなた私を瞞しやしないでせう。……」

「後で分るでせう……只僕はどうしてこれから二十四時間生き長らへたらいいか分りません」

「よつく御休みなさい。さいなら、私ともつとくにあなたを信用した事を覚えて下さい。ですが、あなたは今し方、本當に氣持ち好く『まさかあらゆる心持、たとひ兄弟らしい同情にしろ、責任を負はされる筈はあるまい！』といひましたわ。ね、それを本當に氣持ち好くおつしやつたので、あなたを信じてもいゝといふ氣が直ぐにしましたわ。」

「どうか信じて下さい、然し何をだ。何なのだ。」

「明日迄御待ちなさいな。それ迄は、それは秘密にして置ませうね。その方があなたには好いわ、さ

うすればローマンズの仄かな風致が附くわ。あなたに明日話して上げるかも知れず、話して上げないかも知れないわ……その前に私も少し話してよ、私達御互ひにもつと知り合ひに成れるでせう……」

「宜しい、僕は明日自分の事をすつかり御話しませう！ だがどうしたつてんでせう。何だか奇蹟によつかつたやうだ……あゝ、私は何處に居るのだ。ね、外の女なら誰でもする所でせうか、最初に怒つて私を追つ拂ふは無くつたつてよかつたと思つては居ませんか。二分間で、あなた私を永久に幸福にして呉れました。さうです、幸福です、事に依つたら、あなたは私を私自身と仲直りさせ、私の疑惑を氷解して呉れましたよ！……多分或る瞬間に出會はずでせう……だがそれは明日すつかり御話します、萬事、萬事分つて下さるでせう……」

「宜しい、承知しました、話して下さい……」

「宜しい。」

「それぢや又明日ね！」

「ぢや又明日！」

そして私達は別れた。私は一晩中歩き廻つた、歸宅する氣に成れなかつた。私はそんなに幸福だつた……明日！

第二夜

「おや、生き残つて居ましたね！」と彼女は私の両方の手を握り締めていつた。

「僕はもうこゝに二時間居ましたよ。一日中僕がどんな状態だったか御存じ無いでせう。」

「分つてるわ、分つてるわ。でもそのことは又後にして何故私がやつて来たか分つてるの。昨日のやうに下らない事を話す爲めぢやないわ。ね、私達はこれからもつと賢く振舞は無くぢやならないわ。私昨夜その事をしみく考へましたわ。」

「どういふ風に僕等はずと賢く成らなくぢやならないのです。それはよろしいが、然し、實際、私の生涯にこれ位譯の分つた事があつた事はありません。」

「本當？ 第一、私の手をそんなに握り締めないで下さいな、それから、御話なくぢや成らないが、私は今日あなたの事を考へて、疑はしく成りましたわ。」

「そしてそれはどう始末が付きました。」

「どういふ結末ですつて、結局、私達は今一度すつかりやり直さなくぢやならないわ、だつて私が今日ついた結末は、私にはあなたがちつとも分つて居ない、昨夜私は赤ん坊のやうに、小さい娘のやうに振舞つた、といふ事でしたもの。勿論、實際の話、私の優しい心がいけないのだ——つまり、いつも私

達が自分の行ひを解體して最後にするやうに私も自分自身の讚美の歌を唄つてしまひましたの。ですから、私が思ひ違へて居るところを直す爲めに、私あなたの事をすつかり一々探る氣に成りました。でも私の爲めに何事にしろ探つて呉れる人は誰もありませんから、あなた御自身に何もかも充分に話して下さいさなくぢやいけませんよ。ね、あなたはどんな方なの。さあ、すぐに——ね——あなたの歴史をすつかり話して下さいな。」

「僕の歴史ですつて！」と私は驚いて叫んだ。歴史ですつて！ だが誰が僕に歴史があると申しました。僕には歴史なんぞありやありません……」

「ぢや、歴史が無かつたら、これ迄どうして暮して来ました。」と彼女は笑つて遮つた。

「全くどんな歴史もありません！ 私は人と交はらず、つまり、全然孤獨——孤獨、眞に孤獨で暮して来ました。孤獨といふ事はどういふ事が分ります。」

「ですが、どうして孤獨なの。誰にも會つた事が無いといふ意味なの。」

「いや、勿論僕は皆あなたに會ひます。だがそれでも僕は孤獨です。」

「ぢや、誰にも話をしないの。」

「嚴密にいへば、誰とも話をしません。」

「ぢやあなたはどういふ方？ はつきりおつしやつて下さい！ 待つて下さい、私當てるわ、多分私のやうに御婆さんがおありでせう。御婆さんは盲目で、私を何處へもやつて呉れないので、私まるで話の

仕方もちれちまつたわ。二年前に私がいたづらしたら、私を抑へる事が出来なと思つて、私を呼び付けて、私の着物を自分の着物へ留針で留めつちやつたの。で、それからといふもの、私達は毎日毎日さういふ風にして座り、御婆さんは盲目だけれど、長靴下を編み、私は側に座つて、縫物をしたり、御婆さんに朗讀してやつたりしますの——そりやあ變よ。こゝ二年間といふもの私は御婆さんのところへびん留めに成つてるの……」

「おや〜！ 堪らないね！ いや、然し、私にはそんな御婆さんはありません。」

「ぢや、御婆さんが無いのに、どうして家に座つてらつしやるの？……」

「ね、あなたは私がどんな人間か御分りに成り度いの？」

「知り度いのよ！」

「本當に？」

「實際、心からだわ。」

「宜しい、私は變りものです！」

「變りものですつて！ どんな風に？」と娘は丸一年も笑ふ折が無かつたかのやうに笑つて叫んだ。「あなたと話してると本當に面白いわ。ね、こゝに腰掛があるから掛けませう。こゝは誰も通りやしないし誰も私達のいふ事を聞きやしません。ですから——あなたの歴史を御始めなさいな。だつて、あなたがおつしやつたつて駄目よ。私あなたに歴史がある事が分りますもの。あなたが隠して居るだけだわ。」

先づ變りものゝ何あに？」

「變りものですか？ 變りものとは變人です。可笑しな人間の事です！」と私は彼女の子供らしい笑ひに動かされていつた。「それは變人だ。ね、夢想家つてどんなものゝ事か分つて？」

「夢想家ですつて？ 分ると思ふわ。私自身夢想家ですの。御婆さんの側に座つて居ると、時々、いろんな事が胸に浮んでよ。私達は空想し出すと、空想を好きなところへ連れて行くものね——私達は支那の王様と結婚するのよ！……夢想するといふ事も、時にはいゝものですけれど！……いゝえ、分らないわ！ 殊に、空想は別として考へ事がある時にはね」と娘は今度は幾らか眞面目に附言した。

「素敵だ！ 支那の皇帝と結婚した事があるなら、私をすつかり分つて呉れるでせう。ぢや御聞きなさい……いや一寸待つて、私は未だあなたの名前を知らない。」

「とう〜氣が付いたの！ 随分それに氣が附かつたのね！」

「お〜！ まるで氣が附かなかつた、實際僕はすつかり幸福だつたから……」

「私ナステンカといふの。」

「ナステンカですつて！ それから外に？」

「外には無いの！ だつて、それだけいゝのぢやないの、しつこい方ね。」

「それだけぢやいけないいつて？ 何あに澤山だ、實に澤山だ、ね、あなたが私に初めつからナステンカだといふ事なら。」

「本當にさうだわ！ ぞ？」

「ぢや、御聞きなさい、これから馬鹿々々しい御話ですよ。」

私は彼女の側に腰掛け、學者振つた眞面目な態度を装ひ、原稿からでも讀むやうに語り出した――
「あなたは知らないかも知れないが、ペテルスブルグには奇妙な隅つこがありますよ。全ペテルスブルグの人々を照す太陽はそこは覗き込まず、外の、違つた、新しい太陽がその隅つこへ、特別に眺へられて、それがいろんなものを、一種別な光で照します。これ等の隅では、私達の廻りに波打つて居る生活とはまるで違ひ、この眞面目な、生眞面目な時代の連中には無いが、多分何處か未知の國土には存在すると思はれるやうな生活が送られて居ます。で、その生活は全たく空想的で、熱烈に理想的のものと、（あゝ！ ナステンカ）信じられぬ位俗な事はいふ迄もなく、汚なく散文的で、平凡なものと混合的ですよ。」

「まあ！ おや／＼！ 何といふ前置でせう！ 何ですか。」

「まあ御聞きなさい、ナステンカ。僕はあなたの事をナステンカといつて何時迄も飽き無いやうな氣がします。御聞きなさい、それ等の隅には、夢想家といふ奇妙な人間が住んで居ます。夢想家といふものは――すつかりどんなものかといへば――人間では無くつて、中間的な活物です。普通、彼は日光を避けるかのやうに、何處か入り込めぬ隅に住ひます。一旦隅にするりと嵌まると、蝸牛のやうにそれにびつたり成つてしまふ。少なくとも彼はその點では動物と家とを兼ね、龜と呼ばれる、かの毛色の變つた

活物に非常に好く似て居ます。どうして彼が、相變らず、綠色に塗られ、汚なくつて、隱氣で、我慢が出来ない位煙草臭い壁があんなに好きだと思ひますか。どうしてこの可笑しな男は、澤山も無い知り合ひが誰か訪れることだね（彼は自分の友達皆なから逃げてしまふのだ）どうしてこの可笑しな奴は壁のうちで何か悪い事をしてゐたといつたやうに、にせ金でも拵へて居たかのやうに、それとも、眞の詩人が死んだからその友は彼のものを發表する事を自分の神聖な義務と考へると書いた匿名の手紙を附けて新聞を送らうと思つて自分が詩を書いて居たといつたやうに當惑し、顔色を變へ、うろたへて、その知り合ひに會ふのはどうしてぞせう。ね、ナステンカ、どうしてその二人の友人の話がすらくと行かないのでせう。どうして笑はないのでせう。外の時には多分笑ひも、活潑な話も、女やその外陽氣な題目が非常に好きなその新來者が、どうして當惑して了つて、その口から活潑な語が出ないのでせう。一體どうしてこの友達は、多分新しい友達で、初めて訪ねて來たのだらうが――だつて凡んど二度訪ねて來る人はあるまいし、この友達だつて二度とやつて來た事はあるまいが――どうしてこの友達もだね――向ふでも形勢を巧く繕ひ、話を引立たせ、禮儀ある社會に對する知識を見せびらかせ、女の話もし、かくもへり下つた努力をして、水から出た魚のやうに、間違つて自分を訪ねて來たこの憐れな男を喜ばせる爲めに、大いに努力するが効果が無いので、全たくどうする事も出来無くつて途方に暮れて居る亭主役のうつむいた顔を見ながら、（才があつても）才を利かす事が出来なくつてすつかりうろたへ、口が廻らぬのはどうしてぞせう。どうして紳士は突然ありもしないのに、非常に大事な用事を思ひ出したとい

つて一心に後悔を現はし、しくじつた事を取り返さうと思つて居る亭主役の懇ろな握手から、自分の手を引つたくり、突然帽子を引つ掴んで、急いで出て行くのでせう。どうして友達は出て行く時にくすへす笑ひ、この奇妙な男は實際、非常にぬい好で友達は（不圖慰みに）話して居る時のこの奇妙な男の顔色を、子供達に瞞されて取つつかまされ、亂暴に取り扱はれ、おどされ、いろんな辱めを受け、結局、すつかり弱つて暗がりの椅子の下へ彼等から隠れ、そこでゆつくり、毛を逆立てたり、ふう／＼いつたり、辱められた顔を兩足で洗つたりして、その後暫らくは、生活や万物情深い女中頭が主人の正餐から取つて置いて呉れる食物をも怒氣を含んで眺める、不幸な仔猫の表情と比較しずには居られないけれども、又ところの奇妙な男に會ひに來まいと誓ふのは何故でせう。」

「ね」と眼と小さな口とを開けてしよつ中びつくりして聞いて居たナステンカが遮つた。「ねえ、どうしてそんな事に成るか、何故そんな馬鹿々々しい事を御尋ねに成るのか、さつぱり分らないわ。只、その變な事が、その儘あなたにあつたに違ひないといふ事は分るわ。」

「本當です」と私は至極眞面目な顔して答へた。

「ね、それはきまりきつて居ますから、先を御話しなさいな」とナステンカはいつた「どう成るか本當に知り度いのですから。」

「ナステンカ、あなた、私達の主人公、即ち私は——といふのはこの事件全體の主人公は僕だつたから——隠れ家でどんな事をしたか知り度いの。どうして私が、友達の思ひ掛けぬ訪問の爲めにあはて、

一日中氣が轉倒してたか知り度いと思ふの。どうして私がそんなにびつくりしたか、部屋の戸が開いたらどうして赤面したか、どうして御客をもてなす事が出来なかつたか、その癖何とかもてなし度くつて苦んだか、知り度いの。」

「本當に聞かせて下さいな」とナステンカは答へた「それが聞かせて貰ひ度いのだわ。ね。あなたは美しく話して下さいますが、もう少し普通に話せなくつて？ 本の抜讀みでもして居るやうだわ。」

「ナステンカ」と私は笑はずには居られなかつたが嚴格な、威嚴のある聲で答へた「ナステンカ、成程僕は飾つたもの、いひ方をしますが、我慢して下さい、外に話し方を知りませんから。ナステンカ、今この時、私は七つの封印附きで、遺骨壺に千年も横つて居てから、その七つの封印が取り去られて了つた時のソロモン王の精靈のやうです。ナステンカ、僕等が久しく別れて居て、遂に會つた今——といふのは、僕はあなたをすつと／＼前から知つて居ました、だつて僕はすつと／＼前から誰かを探して居ましたから。それが、僕が探して居たのはあなたとつたといふ證據です。そして、僕等は今會ふといふ事が定つて居たのです——今や頭の中の百千の瓣膜は開き、僕は立て続けにしゃべらずには居られないのです。でないと私は窒息するでせう。だからどうか僕の話の邪魔をしないで、溫和しく素直に聞いて下さい。でないと僕は黙つてしまひますよ。」

「邪魔しません！ 決して先を聞かせて下さいな！ 私一言も申しませんわ！」

「ぢや先を話しませう。ナステンカ、私は一日に、此上無く好きな時が一時間あります。それは凡んど

すべての用事や、仕事や、務が終つて皆たが飯を食べたり、横に成つたり、休息したりする爲めに家へ急ぎ、道々皆なが晩や夜や、その他自分の自由な時間に關係のある愉快な事柄を考へる時の事です。その時、僕等の主人公もといふのは、ナステンカ、許して下さい、僕は三人稱で話します。だつて一人稱で話すのは本當に羞しいものだから——で、その時、自分にも仕事がある、私達の主人公は外の人達の後ろからのろくさ歩いて行きました。だが變に愉快で彼の青つ白い、皺くちやな顔も生々として居た。彼は冷たいペテルスブルグの空に徐々に消え行く夕暮の輝やきをも心なしには見なかつた。彼が見たといつたら、私は嘘をいつて居るので、彼はそれに着眼するでは無く、見るつもりで無しにそれを眺め、彼は疲れるか、何か外の面白い事に心を奪はれて、周圍のものには凡んど眼を呉れる事が出来ない様子です。彼は翌る日迄、嫌な仕事から解放されて居るので喜び、遊戯や悪戯が出来るやうに教室から解放された學生のやうに幸福でした。ね、彼は何か考へて居ますが……正餐の事だとあなたは思ひますか。晩の事でせうか。彼はあゝいふ風にして何を見てるのでせう。威勢が好い馬がひいた馬車で過ぎ行く婦人に繪に畫いたやうに美しく頭を下げて居る、威嚴のある様子の紳士を見てるのでせうか。いや、すべてそんなつまらない事が今彼に取つて何であらう！彼は彼自身の生活で豊富です。彼は突然豊かに成り、薄れ行く日没が彼の前にあんなに喜ばしさうに最後の輝やきを與へ、彼の興奮した心からいろんな印象を呼び起して居るのも徒勞には成りません。外の時ならどんなつまらない事でも彼の注意を牽く道路にも人は凡んど氣を付けて居ません。人や既に(ズムコフスキーでは無いが)「空想の女神」が想像の

手で金のたていとを紡ぎ、それで、不思議な、魔法的な生活の模様を織り出した——で、多分その想像の手が彼を、彼が歩いて居る上等な花崗岩の人道からずつと離れた水晶の極樂淨土に連れて行つたのでせう。一寸彼を止めて突然彼が今何處を歩いて居るか、何といふ通りを歩いて居るか訊ねて御覽なさい——彼は多分何にも何處へ行くのか、何處に立つて居るのか覺えが無く、因つて眞赤に成つて體裁を繕ふ爲めに、きつと何とか嘘をいふでせう。だから賤しからぬ老婦人が道の眞中で丁寧に彼を止らせて道を訊ねると彼はびっくりとし、凡んど叫び聲を挙げむ許りにし、驚いてあたりを見廻はすのです。困つて顔を曇らし、通行人が一人ならず、笑つて振り向いて彼を見送り、小さい娘がびつくりして彼をよけ、聲を立て、笑ひ、彼のむき出して一人笑ひや、いろんな身振りをまじ／＼見てるのに凡んど氣が付かずに、彼はとつと歩きます。然し空想が氣まぐれに高飛びして、かの年取つた女や、物好きな通行人や(私達の主人公はその時、運河づたひに歩いて居ると思ひませう)フォンタンカで荷揚舟で夜を送つて居る百姓を捉へて誰も彼も、何も彼もを蜘蛛の巣の蠅のやうにカンパスに織り込みます。そして、この奇妙な男は心が慰みをする、新鮮な貯へを持つて自分の安樂な巢に歸り、座つて御飯を濟せ。——いつも考へ込み、沈んで居る——彼の給仕をするマトローナがテーブルを掃除し、パイプを呉れると初めて彼はわれに歸る。かくて彼はわれに歸り、自分が御飯を食べた事を思ひ出して驚くが、どうして御飯を食べたかまるで覺えがない。部屋は既に暗く、心は悲しく、空虚で想像の王國全體は何處かそこ等で崩壊し、跡かた無く、がたともいはずに崩壊し、夢のやうに流れ去り、何を空想して居たのか自分でも思ひ出せ

ない。然し漠然とした心持が微かに彼の心を動かし、痛ましめ、何か新しい慾望が誘惑するやうに彼の空想を攪ぐり刺戟し、しのびやかに、新しい幻想の群を呼び起す。静かさがその小さい部屋に君臨し、想像は孤獨としよう事無さで養はれ、勢無く燻ぶり、力無く沸き、すぐそばの臺所で靜かに彼方此方動いて居る年取つたマトローナが珈琲を拵へて居る水のやうだつた。ところで、想像は激發したり沈んだりして、何の氣も無く、ぼんやり取り上げた本は三頁も讀まない内に、わが空想家の手から離れる。彼の想像は又動き出し、仕事を始め、新しい世界、新しい魔力ある生活が再び彼の前に眺望を展開する。新しき空想即ち新しき幸福！ 快く、逸樂的な毒の元氣好き突進！ 實生活が彼に取つて何だらう！ 不健全な彼には私達、あなたも非常にぼんやり、のろくさと、味氣無く暮して居り、私達は皆自分の運命に不満で生活に疲れて居るやうに思へる！ そして實際、御覽なさい、一見、私達のところは万事が冷たくつて、不愛想で、不機嫌でもあるかのやうな事を……憐れむ可し！ と私達の空想家は考へます。事實さう考へるのは不思議ではない？ 非常に奇怪な、生々とした繪と成つて彼の前に心を恍惚たらしめ、可笑しな様子で、氣輕に自由に集るこの奇怪な幻想を御覽なさい、その繪の前景の一番重立つた人物は勿論風采の好い自分自身、私達の空想家です。このいろんな變事、果し無く群れる、魅するやうな空想を御覽なさい。多分あなたは、彼は何を空想して居るか尋ねるでせう？ どうしてそんな事を尋ねるので？——いや、ありとあらゆる事を空想するのです……初めは認められないが、やがて、桂冠を報ひられる詩人の運命や、ホフマンとの交際、聖バルトロオの夜、ダイアナ、ヴァーノン、イ

ワン、ワシリエウイツチのカザン占領に當つて勇士の彼を演ずる事 Clara Mowbray Ethie Deans 高僧會議、彼等の前に於けるフツス「惡魔のロバート」に於ける死者の復活（あの音楽を憶えて居ますか、墓地の匂ひがする！）Minna と Brenda、ベレジーナの戦闘、伯爵夫人ヴィー・ディー家に於けるダントンの詩の朗讀、クレオパトラ Ci suoi avanti コロムナの小さい家、自分の小さい家庭とその主人の側に、今あなたが私のいふ事を聞いて居る時のやうに冬の晩に小さい口と眼とを開いて主人のいふ事を聞いて居る愛するものゝ事を……いや、ナステンカ、彼のやうな逸樂的な不精者に、私達が非常な熱望を抱いて居るやうなものがこの世にあるだらうか。彼は他にも多分いつか悲しむ可き死の時が來て、この憐れむ可き人生の一時間の爲めには、幻想のあらゆる年月をも與へ度く思ひ、而かもそれを喜びや幸福の爲めに與へ度く思ふのでは無く、他の悲哀、悔恨、限り無き悲愁の時には撰り好みもしやうと思はない事を思はずに、この世は詰らなくつて、憐れむ可きものと考へて居ます。だがその威嚇の時が來ない内は——彼は何にも欲しません。といふのは彼は満足して居ますから。彼はあらゆる慾望を超越して居ますから。彼は何も持つて居ますから。彼は彼自らの生活の藝術家で、それを自分でいつも、自分の最近の出來心に合ふやうに作りますから。そしてこの仙女國の空想的な世界は樂々と自然に拵へられます！ それが迷想でなんか無いやうに！ 實際彼は或る時には、この生活全體は感情が招び出したものでなく、蜃氣樓でも無く、想像の迷ひでも無く、具體的で、眞實で、實體的なものだといふ事を信じる！ ナステンカ、さういふ時にどうして私達はかたづを呑むのでせう？ 一體、如何なる魔法、如

何なる不可解なむら氣に依つて、鼓動が早く成り、夢想家の眼から涙が湧き、その青つ白い、濡れた頬が輝やき、體全體に名狀し難い、慰藉的な感じが充ちるのでせう？ 眠らざる幾夜さが無限の喜びと幸福の裡に閃光の如くに過ぎ去つて了ひ、ペテルスブルグと同じく曉が窓に桃色に輝やき、夜明けが陰氣な部屋をぼんやりした、夢のやうな光で漲ぎらせると、私達の空想家はへと／＼に疲れて床に身を投げ病的に過勞した心にはぞく／＼するやうな喜び、胸には疲れた、快い痛みを抱いてうと／＼と眠るのはどうしてとせう。さうだ、私達は間違つて知らず／＼の裡に眞實の情熱が私達の心を動かして居ると信じ、私達の無形の空想の中に何か生きた、觸知し得るものが居ると信じて居るのです？ 一體それが夢想でせうか？ 御覽なさい、譬へば彼の胸には愛が、その底知れぬ歡喜、その居ても立つても居られぬ苦しみと結びついて居ます……彼を御覽なさい、さうしたらあなたは承認するでせう？ ナステンカ、彼を見れば、彼が魅力ある空想の中で戀をする女を未だ知つて居ないといふ事も信じられるでせう？ 彼が只彼女を誘惑し、幻想の中で會つただけで、この情熱は一片の空想に過ぎ無いといふ事は本當か知らん？ 定めし彼等は幾とせを一緒に手を取り——彼等二人つ切りで、あらゆる世間をかたぐり棄て生活を共にして暮したに違ひない。定めし別れの時が来て、女は險惡な空の下に吹き荒ぶ嵐をも打ち忘れ、彼女の黒い睫毛から涙をひつつかんで、運び行く風にも心を止めず、彼の胸にもたれてすゝり泣き、悲しんだに違ひない。それが皆一場の空想だつたらうか——彼等があんなに幸福に連れ立つて歩いたものだつた、彼等が希望も持ち、悲歎もし、愛しもし、あんなに長い間「あんなに長い間、そしてあんな

に優しく愛し合つた、寂しい陰氣な、小さい、苔蒸した徑のある、ふさいで居り、見棄てられ、荒れ果てたあの庭も？ そしていつもだんまりで、氣難かしくて、御互ひに愛を隠し合つて居た彼等を恐がらせた不愛想な、年取つた夫と一緒に、心淋しく、悲しく幾年を彼女が過した、あの奇妙な先祖傳來の家もか？ 何といふ苦痛、何といふ恐る可き苦悶を二人は味はつたでせう。二人の戀はどんなにか無邪氣で、純だつたでせう。そして（いふ迄ありませんが）人々は何てたちが悪かつたでせう！ そして御聞きなさい！ 定めし男は後で、二人が生國の海岸からはずつと離れ、他國の空の下、熱い南方の神の如く永遠な都市で、舞踏會のまぶしい輝やきの中で、燈の海に溺れた Halnyo でそれは Halnyo に違ひない）桃金嬢や薔薇の絡んだバルコニーで女に會ふに違ひない。彼と知つて彼女は急いで假面を脱ぎ「私は自由です」と囁いてふるへ乍ら、男の腕に身を投げ掛け、狂喜の叫びを擧げて二人は抱き付き、一瞬間のうち二人は彼等の悲しみ、彼等の別離、あらゆる苦悶、更らに、彼の遠き國の陰氣な家や、老人や物淋しき庭や、最後の情熱的な接吻を残して、彼女が苦悶と絶望とで痺れた男の腕から體を引き裂いたかの席の事も忘れます……ナステンカ、不意に體のがつしりした、厭にひよる長い男で冗談好きな男か。なんか訪ねて来て、人の部屋の戸を開いて、事も無げに「え、つと、今パウロウスクからやつて来たところですが。大變です！ 老伯爵様が御亡く成りに成りました、世の中は暗闇です——で皆ながパウロウスクからやつて来ました！」と叫んだら、誰でもびくりとしてうろたへ、隣りの家の庭から盗んだ林檎をポケットへ押し込んだ學校子供のやうに眞赤に成るといふ事はあなたも認めて下さるに違ひ無

哀つぽい訴へを済ませて、哀つぽく中休みした。私は一心に作り笑ひをしやうとして居た事を思ひ出した。といふのは私は既に悪意ある邪神が私の内で動き、胸が一杯に成り、顎がびく／＼し、眼が段々しめつて来るのを感じて居たから。

私は利口さうな眼を開いて私のいふ事を聞いて居たナステンカが子供らしく、堪へ切れずに吹き出すだらうと思つた。そして私は既にはめを外して、長い間心中で密かに考へて居た事を要りもしないのに話した事を後悔して居た。それは私は書いたものからでも讀むやうに話す事が出来た。といふのは私はずつと前に自分自らに對し判決を下して居たので、分つて貰へるとは思はなかつたが、それを讀み、告白しすには居られなかつた。ところが驚いた事には彼女は沈黙を續け、暫らく過つて、私の手を軽く握り、おづ／＼して、同情を籠めて尋ねた――

「まさかこれ迄ずつとそんなに暮らしていらした譯ぢやないものでせう？」

「これ迄ずつとです」と私は答へた「これ迄ずつとです。何だかいつ迄もこれが續きさうです。」

「それぢやいけませんよ」と彼女は心もとなさうにいつた「そんな事はありませんよ。ところで、私も御婆さんの側で一生さうして暮すかも知れませんよ。そんな風にして暮す事はちつともよありませんわね。」

「そりやさうですよ！」と感情を制し切れなく成つて叫んだ。「花の時代をすつかり無駄にした事を何時

に無く感じます！ よく分りました。神がそれを告げ示す爲めにあなたを私に遣はされた事が分つたので、それを一層苦しく感じます。あなたの側に座つて話して居るので、これからの事を考へると變です。だつてこれからは又――孤獨で、あの微臭い、下らない生活を繰返すんですもの。あなたの側に居て事實にこんなに幸福だつた後で、何を空想したらいゝでせう！ 最初に私をはねつけず、少なくとも二晩私は生活したといふ事が出来るやうにして下さつたあなたに幸福があるやうに。」

「いえ／＼！」とナステンカは叫んだが、眼には涙がきらめいた「これからはそんな事はありません。この儘御別れしては成りません！ 二晩位が何でせう。」

「ナステンカ！ あなたの御蔭でどんなに落着けた事でせう。時々さうだつたやうにわれとわが身を悪く思ふ事がこれからはなくなるといふ事が分りましたか。多分自分の生活の罪惡を數く事を止めにする事でせう。といふのは、さういふ生活こそ惡であり、罪であるから。私が何か誇張して話したと思つちやいけません――どうかさう思わないで下さい。といふのは時々或る不幸が私を覆ふんですから……といふのはさういふ時には實世間的な生活を初める能力が無いやうに思はれて來ますから。自分が現實に對するあらゆる觸覺や、あらゆる本能がなくなつたやうに思へましたから、遂にはわれとわが身を呪ふのでしたから。空想勝ちの夜のあとで、恐しい正氣に歸る時がありますから！ 一方、身の廻りには、生活の渦きの中に居る連中の旋轉や怒號が聞え、實際に生活して居る人々が眼に見え、耳に聞え、彼等には生活する事が禁じられては居す、彼等の生活は夢や幻のやうに漂ひ去らず、彼等の生活は絶えず更

新され、いつも若々しく、一時間だつて外の一時間とは違つたところがある事が眼に見えるのに、空想はまるで活氣無く、平凡な程單調で、消え安く、影や觀念の奴隷で、太陽を覆ひ、太陽を神の如く思へる眞のペテルスブルグ人の心を曇らして、意氣沮喪さす最初の雲の奴隷です——一體沈衰した空想が何に成りませう。この疲れを知らぬ空想が不斷の働きの爲めに遂に疲れ、疲れ果てた事を私達は感じます。といふのは私達が育つて大人に成るにつれて、古い理想だけに合はなく成り、それはぎれぐれに粉々に碎かれます。外に生活が無ければその斷々から生活を私達は組み立てなければなりません。一方靈は何か外のものを憧がれ切望します！で空想家は煽いで燃え立たせ、その再燃した火で冷たい胸を温ため、も一度そこへあんなに快かつたもの、心を動したものの、血を沸かせ泣かせ、あんなに氣持ちよく彼を感はしたものを皆招び起す爲めに燃え残りの間から火花を探すやうに自分の古い空想を掻き廻すけれども徒勞です！私が到着した結論はどんなだつたでせう。今私は外に詮なく自分自らの感覺の週年祭、會てはあんなに楽しかつたが事實存在した事は無かつたもの、週年祭をやつて居ます——といふのはこの週年祭はあの馬鹿げた、からげぼな空想の爲めにやるのですから——そしてこれをやるのはあの馬鹿げた空想が今は無く、それを招ぶ代も無いのだからです。空想だつて何かやらなくつちや参りません！私は今會て（私流にですが）幸福だつた場所を思ひ出しては或るきまつた時に訪問する事が好きなので、上。現在を取り返しの付かぬ過去に做つて組立てる事が好きで、屢々ペテルスブルグの通りや曲つた路地を影の如く、あとかた無く、悲しくふさいでさ迷ます。それ等は何といふ紀念でせう！例へばこゝ

を丁度一年前、丁度今頃、この人道を今日のやうに心淋しく、ふさいでさまよつたといふ事を思ひ出すのは。そして、私達はその時も私達の空想の悲しかつた事を思ひ出します。そして過去の方が善かつたわけではないが、どういふものか好かつたやうに、生活も平和で、今しよつ中附き纏つて居る暗い考へ等無く、良心の苛責——今は晝と無く夜と無く私を苦しめて居る隱鬱な、暗い苛責にも責められ無かつたやうに思ひます。で、わが空想は今何處にあるとわれとわが身に尋ねます。で、頭を振つて歲月は如何に早く移り行く事ぞと申します！そして再びわれとわが身におのが歲月をどうしたらつかと尋ねます。花の時代を何處に葬つたか。御前は生きた事があるか、それとも否か！見よこの世が何て味氣なくなつて行く事ぞと獨言をいひます。もつと年が経つと隱鬱な孤獨がやつて來るでせう、それから老年が撞木杖をふるへつゝついてやつて來て、その後からは難澁と頼り無さが續く事だせう。空想の世界は青白く成り、空想は色あせて死に、木々の黄ろい葉のやうに落ちるでせう……ナステンカ！只獨り全く只一人残つて失ひしを惜むものも無く、絶対に無いのは悲しい事だせう……といふのは、失つたものは皆、無で、馬鹿げた、只の虚無で、空想の外何も無かつたからです！

「そんな事仰つしやると悲しく成りますわ」とナステンカは頬を傳ふ涙をふき取つていつた。「もうこれからはそんな事はありませんよ！これからは二人が一つに成りませうね。どんな事があつても、決して別れないやうにませう。ね、私は愚かな娘で、あまり教育もありません。尤も御婆さんは私を生につけて呉れた事がありました。私本當にあなたのおつしやる事は分りますわ。だつて御婆さんが

私を自分の着物へピン留めにしたので、あなたがおつしやつた事はすつかり自分でも通つて来たのですもの。勿論、私だつたら、あなたのやうに巧く話せやしなかつたわ。私教育が無いのですもの」と彼女は私の哀れつばい辯舌と誇大な話し方に今尙一種の尊敬を感じ乍ら、おづ／＼附言した「だけれど、あなたがすつかり打ち明けて下さつたので私嬉しいわ。もう私にはあなたがすつかり分りましたわ。あのね、私も歴史をすつかり包み隠さずに御話したいわ。あとで私に忠告をして下さらなくつちや嫌ですよ。あなたは利口な方ですわ。忠告して下さる約束をなさつて下さいな。」

「ナステンカ」と私は叫んだ「僕は忠告した事も無く、決して氣の利いた忠告なんかした事はありませんが、然し、私達がいつもかういふ風にして進んで行つたら同じ忠告も氣の利いたものに成り、御互ひに澤山氣の利いた忠告をし合へるやうに成るだらうといふ事は分ります！ところで、ナステンカ、あなたはどんな忠告がして欲しいの。正直におつしやい。僕は今非常に嬉しくつて幸福で、非常に大膽で頭がはつきりして居るから、何か申上げる事も難かしく無いでせう。」

「いえ、いえ！」とナステンカは笑ひ乍ら遮つた。「私は氣の利いた忠告だけが欲しいのぢや無いの。私あなたがこれ迄すつと私を好いて、下さつたかのやうな温かい、兄さん見たいな忠告がして欲しいわ！」

「よろしい、よろしい！」と私は喜んで叫んだ「二十年間すつとあなたを好いてたにしても、今好いてるよりもつとあなたが好きに成つてた筈はありません。」



「手を御貸しなさいな」とナステンカはいった。

「さあ」と私は彼女に手を與へ乍らいつた。

「ぢや、私の話を始めませうね！」

ナステンカの歴史

「私の身の上話の半分はあなたも知つてらつしやるわ……といふのは私には年取つた御婆さんがあるといふ事をあなたが知つてらつしやるといふ事よ……」

「残りの半分もそんなに短かけりや……」と私は笑ひ乍ら遮つた。

「黙つて聞いてらつしやい。第一私の邪魔をしない事を承知して下さらなくつちや嫌ですよ。でないと私ごちや／＼に成つてしまひさうよ！ さあ、黙つて聞いてらつしやい。」

「私には年取つた御婆さんがありますの。御父さんも御母さんもなくなつたので、本當に小さい子供の時に、御婆さんに養はれる事に成りましたの。御婆さんもとは金持ちだつたに違ひ無いわ。だつて今でなにがしも何某といはれた頃を思ひ出しますもの。御婆さんは私に佛蘭西語を教へて呉れました。それから先生をつけて呉れました。私が十五の時(今は十七です)御稽古をする事を止めました。私がいたづらをしたのはその頃でしたわ。何をしたかは申しませんが、大した事では無かつたといへば、それで

わ。だけど、御婆さんは或る朝私を呼びつけて、私は盲目だから、御前の見張りが出来ないと申しまして、留針を取つて、私の着物を御婆さんの着物にピン留めにして、一生涯かうして座つて居ませう。勿論御前が好い娘に成らなかつたら話たがと申しました。實際初めの内は、御婆さんから離れる事が出来ませんでした。仕事も、讀書も、勉強も皆な御婆さんのそばでしなくつちや成らなかつたのですもの私一度御婆さんを瞞してやらうと思つて、私のところに座つて居て呉れるやうにフェルカを説き付けました。フェルカといふのは私達の日傭女でつんぼです。フェルカは私の代りに座りました。御婆さんはその時脇掛椅子に眠つて居りましたので、私はすぐそばの御友達に會ひに出掛けました。ところが、困つた事に成つてしまひました。御婆さんは私が留守の間に眼を覺して、何か尋ねました。私がいつも居るところに矢張り温和しく座つて居ると思つたのです。フェルカは御婆さんが何か尋ねて居るのだといふ事は分つたが、何の事か分りません。どうしたらいいか知らと思つて、ピンを外して驅け出してしまひましたの……」

かういつてナステンカは話を止めて笑ひ出した。私も一緒に笑つた。彼女はすぐに笑ふことを止めた。「ね、御婆さんの事を笑つちや嫌ですよ。私は只可笑しいから笑ふの……。御婆さんがそんな風ですもの、私何が出来ませう。それでも私何だか御婆さんが好きだわ。まあ何て私その時怒られた事でせう。すぐにいつものところへ座らされ、それからは身動きしてもいけないといはれました。」

「おや、御話する事を忘れましたが、私達の家は私達、といふのは御婆さんものですよ。小さい木製の

家で充分すて、御婆さん見たいに古ぼけた窓が三つと二階がついて居ます。ところで私達の二階に新しい寄宿人が越して來ました。」

「ぢや前にも寄宿人が居たのですね」と私は不圖いつた。

「さうですとも」とナステンカは答へた「あなたよりも御しやべりで無い方だつたわ。實際その人はまるでしやべつた事が無かつたのよ。啞で、盲目で、跛で、ひからびた小さい老人だつたもので、とうくまゐつて死んでしまひました。それで私達は新たに寄宿人を見つけなくつちやなりません。だつて寄宿人が居なくつちややつて行かれませんか——まるで、御婆さんの年金と間代の外何にも入らないのですもの。ところが、その新しい寄宿人は生憎若い人で、この邊の人ぢや無いのですよ。間代を値切らないので、御婆さんは置いたのですが、すぐあとで「ナステンカや、寄宿人はどんな方だい——若い方か、年取つた方かい？」と私に尋ねました。嘘をいひ度くなかつたので、若いといふ方ではありませんが、年取つてはいらつしやいませんと申しました。」

「そして、綺麗な方かい？」と御婆さんが尋ねました。

「矢つ張り嘘をいひ度くなつたので——「え、綺麗な方よ」と私はいつたの。「あ、うるさい事だ、うるさい事だ！ したらその方に掛り合つちやいけませんよ。何といふ時勢だらう！ へんそんな下らない寄宿人が、而かもそいつが又綺麗な奴と來て居る。昔は今とまるで違つた！」と御婆さんは申しました。」

「御婆さんのべつに昔を思ひ歎いて居りました——御婆さんも昔は若かつたし、御天道様も昔は温かに照らされたし、クリームだつて昔はこんなに酸っぱくは成らなかつた——昔はちつとも味が變ら無かつたといつてね！ 私はいつものやうに座つて黙つて、何故御婆さんは私にあんな事をいひ出したのだらう、寄宿人は若くつて綺麗かどうかなんてどうして尋ねるのでせうと一人で考へたものですが。それだけの話で、一寸考へたゞけで、又一針二針と數へて長靴下を編み、その事はすっかり忘れました。」

「ところが、或る朝寄宿人が私達に會ひに来て、その方の部屋に紙を貼る約束の事を尋ねました。いろんな話が出ました。御婆さんは話好きでしたが「ナステンカや、私が寢る部屋へ行つて、勘定早見表を持つて御出で」といひました。私はすぐに跳び上りました。何故か知らないが耳たぼ迄赤く成り、御婆さんのところへピン留めにされて座つて居る事も忘れ、寄宿人の方が氣付かないやうに靜かにピンを外す代りに——ひよいと動いたので、御婆さんの椅子が動きました。私、寄宿の人が私の事をすっかり飲み込んだといふ事を悟つて、赤く成り、射られたかなんかのやうに立ち止まり、突然おい／＼泣き出しました——私ひどく羞しく、悲しくつて、何處へ眼を遣つたらいいか分りませんでしたの！ 御婆さんが大きな聲で「何を愚圖々々してのさい。」といつたので、私餘計困つちやつたの。寄宿人は自分が居るので私が羞しがつて居るといふ事が分ると頭を下げて、すぐに出て行きました。」

「それからといふもの邸下に少しでも音がすると、私死に度く成つたのよ。「そう寄宿の方だ」としよつ中思ひました。そして、故意にこつそりピンを外しましたの。だけでも、分つて見ればいつもさうでは

無くつて、寄宿の方がいらつしやつた事はありませんでした。二週間過ぎて、寄宿の方はフョークラに言づけして、佛蘭西語の本が澤山あるが、皆、娘さんが讀んでもいい、善い本だから、娘さんの退屈浚ぎに、御婆さん、讀ませなかつたら如何ですとの事でした。御婆さんは喜んで承知しましたが、道徳的な本か、といふのは、その本が不道徳なのだつたら、思ひも寄らぬ事で、誰でも悪い事を覚えるからとしつこく訊ねて居ました。」

「御婆さん、一體どんな事を覚えて？ さういふ本にはどんな事が書いてあるの。」

「それに書いてある事は」と御婆さんは申しました。「若い男が品行の好い娘をそゝのかしたり、一緒に成り度いといふ口實で娘を兩親の家からおびき出したり、後でその可哀さうな娘をほつたらかすので娘は哀れな死様をするといふやうな事だよ。私もそりや澤山讀んだが」と御婆さんはいつたの「そりや巧く書いてあるので、夜明して内所で讀むものだよ。だから、ナステンカや、御前はさういふものは讀んちやいけないよ」と御婆さんはいつたの。「寄宿人はどんな本を御よこしたつたい？」

「皆なウオーター、スコットの小説よ。」
「ウオーター、スコットの小説だつて！ だが御待ち、何か仕掛けがありやしないかい？ その中に戀文が入つてやしないか？」

「嘘よ」と私はいつたの「戀文なんかありやしないわ。」

「だが表紙の下を御覽。野郎どもは時々表紙の下へ押し込むから！」

「表紙の下にも何にも無いのよ。」

「それぢや、それでいゝが。」

「で私達はウォーター、スコットを読み出しましたが、一月かそこらで大抵半分は読んでしまつたのよ。それで寄宿の人は次から次へ寄越して呉れました。プーシユキンも寄越して呉れました。それでとう／＼本が無くては暮して行けないやうに成り、支那の王様と結婚したらどんなにいゝだらう等といふ空想は止めてしまひました。」

「かういふ風に成つてから、或る日私は偶然椅子段で寄宿の方に會つたのよ。御婆さん何か私に取りにやつたのよ。寄宿の人は立ち止り、私も赤く成り、その人も赤く成つたのよ。だけど寄宿の人は笑つて御早うといつて、御婆さんは御達者かと訊ねてから「ところで、本は読みましたか」といひましたの。私えゝと答へたの。「どれが一番好きでした？」と彼はいつたの。私「アイヴァンホーとプーシユキンが一番好きでした」といつたの。そしてその時は私達の話はそれで御しまひでしたの。」

「一週間経つて又、梯子段で會ひました。その時は御婆さんの用で行つたのぢやなくつて、自分で何か持つて来やうと思つて行つたの。二時過ぎで、寄宿人はその時刻にいつも家へ歸つて来ました。「今日は」と彼は申しました。私も今日はと申しました。」

「一日御婆さんと一緒に座つて、退屈ぢやありませんか」と彼は申しました。」

「彼がそれを尋ねた時、私何故か知らないが、眞赤に成つたの、私羞しく成り、腹も立つたの——そり

や、他人が私にそんな事を尋ね出したからだと思ふわ。私返事しずに行つちまはうと思つたけれど、さうする勇氣には成れませんでした。」

「御聞き下さい」と彼はいひました「好い方だから。私がかんな事をいふのを許して下さい。ですが、私は本當にあなたの御婆さん同様にあなたの御幸福を望んでるのですよ。あなた、尋ねて行けるやうな御友達が御ありますか。」

「私一人も無いといふ事、マーシエンカの外には友達が無かつたが、そのマーシエンカもブスコフへ行つてしまつたと申しました。」

「ね」と彼は申しました「御一緒に御芝居へ行きませんか。」

「御芝居へ？ 御婆さんはどうしますのです？」

「いや、御婆さんに内所にいらつしやらずやあ。」と彼はいひました。

「いえ」と私はいひました「私御婆さんを瞞す事は嫌ですから。さいなら。」

「ぢや、さいなら」と彼は答へて、何も申しませんでした。

「御飯の後ですぐに彼は私達に合ひに来ました。長い間御婆さんと話して居ましたが、御婆さんはこれ迄に何處かへ行つた事があるか、知り合ひはあるか等と尋ねて居りましたが、突然「今晚歌劇にボツクスが取つてあります。セヴィルの床屋をやるのです。友達が行かうと思つて居たのが後で辭つたので、切符は私が使へるのです」と申しました。「セヴィルの床屋といふ」と御婆さんは叫びました「昔よく

やつたあれですか。」

「さうです、あの床屋です」と彼はいつて私をちらつと見ました。私どういふつもりか分つたので眞赤に成り、不安で胸がどきどきしました。

「よく知つてますよ」と御婆さんはいひました「昔、素人芝居で、私がロシーナの役をやつたのですもの！」

「ちや、今日いらつしやいませんか。」と寄宿の入はいひました。「私の切符が無駄に成りますから。」

「是非行きませう」と御婆さんはいひました「是非参りませう。このナステンカは一度も芝居へ行つた事が無いのですよ。」

「何て嬉しかつたでせう！ 私達はすぐに用意し、他所行きを着て、出掛けました御婆さんは盲目だけれど、それでも音楽を聞き度がありました。それに、御婆さんは親切な老人で、御婆さんが一番好きな事は私を喜ばせる事でした。芝居へ来た事が無かつたのもつい來なかつただけで、外に譯があつたのぢやないの。」

「セヴルの床屋を見てどんな印象を受けたか、それは御話しますまい。ですがその晩は、私達の寄宿の人がそれは氣持ち好く話したので、私すぐに、今朝彼が二人つ切りで行かうといつたのは私を試めつもりだつたといふ事が分つたの。何て嬉しかつたでせう！ 私そりや得意で、嬉しく寝ましたが、胸がどきどきして少し熱が出て一晩中セヴルの床屋の謔言をいつて居りました。」

「私彼がこれからはしよつ中遊びに來るだらうと思つて居りましたが、さうぢや無かつたのですよ。まるでやつて來ませんでした。月に一度位一寸やつて來るだけで、それも私達を御芝居に誘ひに來るだけでした。私達はそれから又二度参りました。私だけはそれがちつとも面白くありませんでした。私、彼が、私が御婆さんにひどい目にあふので、すつかり私に同情して居る事が分つたわ。だけど、それだけの話よ、時が経つにつれ、私は段々落ち着か無くなり、じつと座つて居る事も出來なければ本を讀む事も出來ず、仕事する事も出來無く成つたの。笑つて御婆さんを困らすやうな事をするかと思へば、住いたりするのでした。とうとう私段々痛せて、私まるで病氣に成つちやつたの。歌劇の季節がしまへて、私達の寄宿人は私達に會ひに來る事をすつかり止め、二人が會ふことは——勿論、いつも例の梯子段でどしたか——彼は話したく無いやうに黙つて、眞面目な顔して頭を下けて、玄關へ下りて行き、私は彼の姿を見ると全身の血が頭へ上つて、櫻坊のやうに赤くなり、梯子段の中途にちつと立ち止つてしまひました。」

「もうぢきに御しまひよ。丁度一年前五月に、寄宿人が私達のところへ來て、此方の仕事を濟せたから一年許り、モスコウへ歸らなければならぬと御婆さんにいひました。私はそれを聞いて、半分死んだ様に成つて椅子にぐつたり座り込みました。御婆さんは何にも氣が付きませんでした。彼は私達と別れるといふ事を報せると、頭を下げて、出て行きました。」

「私どうしたらよかつたでせう。私はいろ／＼考へ、やきもきしましたが、とう／＼私は心をきめまし

た。翌る日彼が立つ筈でしたから、私その頃、御婆さんが寝たら、萬事結末を付けやうと思ひましたの。ところでかういふ事に成りました。私は、私の着物をすつかりと——必要な下着類をすつかり——小さく包み、その包を手を持つて、生きた心地無く、二階の寄宿人のところへ行きました。梯子段に一時間も立つて居たに違ひ無いと思ふわ。私が彼の戸を開いたら、彼は私を見て叫びました。彼は私を幽霊だと思ひました、それから、私が凡んど立つて居る事が出来無かつたので、私に急いで水を飲ませやうとしました。私は胸が烈しく鼓動したので、頭が痛み、自分のしてる事が分りませんでした。私は氣が付くと、先づ包を彼の寢床の上に置き、その側の座り、手で顔を隠して、わつと泣きしました。彼は萬事がすぐに分つた様子で、悲しさうに私を見たので、私は胸がはり裂く思ひでした。

「ね」と彼は語り始めました。「ね、ナステンカ、私には何にもする事が出来ません、私は貧乏人です、といふのは、私には何にも、ちやんとした寢臺も無いのですから、二人が結婚したら、どうして暮して行かせよう。」

「私達は長い間話しました。だが、あとでは私はすつかり氣違ひのやうに成つて、今後御婆さんと一緒に暮すことは出来ないといふ事、御婆さんのところから逃げ出すといふ事、御婆さんのところへピン留めに成つて居度くないといふ事、それから、彼の望みなら、モスコへも行く、何故なら、私は彼無しには生きて行かれないからといふ事。羞かしさと傲りと愛とが同時に、私の心中で波打ち、私は凡んどひきつけた業に成つて寢床に倒れました。私はそんなに拒絶を恐れました。」

「彼は暫し黙つて座つて居たが、やがて立ち上つて、私のところへ来て、私の手を取りました。」

「ね、ナステンカ、御聞き、私はあなたに誓ふ、結婚する事が出来るやうに成れたら、あなたに私の「幸福」に成つて貰ひます。確かに、今あなただけが私を幸福にする事が出来る方です。ね、私はモウコへ行つて、そこに丁度一年居る事に成りませう。私は私の位地を築き度いと思つて居るのです。私が戻つて来て、その時も尙、あなたが私を愛して下さるなら、きつと一緒に成ります。今は駄目です。何も御約束する事が出来ませんし、さうする権利もありません。よく御聞き、一年間以内で無くつても、確かに何時かです。といふのは、勿論、外の誰かをあなたが好きに成らなかつたら話です。といふのは僕はあなたをどんな約束でも縛る事は出来ませんし、そんな事はしませんから。」

「それが彼が私にいつた事でした。そして翌る日行つてしまひました。私達は御婆さんには一言も話さない事を約束しました。それは彼の希望だつたのです。もう私の歴史も大低しまへました。丁度一年たちました。彼は来ました。彼はもう此方に三日居ます、そして——」

「そしてそしてどうしたのです」と私は御しまひが聞き度くて堪ら無くつて叫んだ。

「そして今迄、婆も見せて呉れません！」とナステンカは勇を鼓すやうにして答へた。「影も形も見せない。」

かういつて彼女は止め、暫し休み、頭を傾げ、両手で顔を覆つてすゝり泣きを始めたが、それを聞いて私は胸が一杯に成つた。私はそんな大膽は少しも豫期して居なかつた。

「ナステンカ」と私はおぼく／＼氣を牽くやうな聲で語り始めた。「ナステンカ！　どうか泣かないで下さい！　どうして分るの！　多分未だ此方へ来て居ないのでせう……」

「来て居ます、来て居ます」とナステンカは繰返した。「此方へ来て居るのです。私その事を知つてゐるわ。私達はその時、その晩に、彼が行つてしまふ前に契約しましたわ。私が御話した事を私達がすっかり話し合ひ、話が纏つてから、私達はこゝへ、この堤防へ散歩に來ましたのよ。十時でした、私達はこゝへ腰かけました。私その時には泣いては居なかつたのよ。彼がいふ事を聞くのは楽しうございました……そして彼は來たらすぐに私達のところへやつて來る、そして、私が彼を厭で無かつたら、その時には、仔細を御婆さんに話さうといつたのよ。今彼は此方へ來て居ます、私その事を知つてゐるの、それなのに彼はやつて來て呉れません！」

そして再び、彼女は泣き出した。

「あゝ、私はあなたの悲しみを救ふ爲めに何かして上げる事は出來ないか知ら。」と私はすっかり絶望して、席から跳び上つて叫んだ。「ね、ナステンカ、私が彼のところへ行つて上げる事は出來ないか知ら。」

「出來ないかつて？」と彼女は頭を擧げて不意に訊ねた。

「いや、勿論いけません」と私は自分を制していつた。「だが、あのね、手紙を御書きなさい。」

「いえ、それは駄目、私そんな事は出來ません」と彼女は頭を傾げ、私を見ないで、きつぱり答へた。

「どうして駄目です——何故駄目です？」と私は自分の考へに固執して、語を續けた。「然し、そりや手

紙の種類に依ります、手紙にもいろんな手紙がありますが……ナステンカ、私のいふ事に間違ひは無い、私のいふ事を信頼して下さい、悪い事はいひませんから。それは纏める事が出來ます！　あなたは第一歩を踏み出したのですもの——どうして今一步を進めないのです？」

「出來ません。出來ません！　何だか向ふへ無理強ひに押し掛けて行くやうですもの……」

「あゝ、ナステンカ」と私は微笑を隠し切れずにいつた。「いや、實際、さうする権利がありますよ。だつて先方があなたの約束したのですもの。その上、いろんな事から彼が心の優しい人で、對度もなかつたといふ事が分ります」私は一層自分の議論と確信の論理に運び去られて語を續けた。「どういふ風に彼は振舞つたでせう。彼は約束で自分を縛りました。彼は結婚するのだつたら、あなた以外の人とは結婚しないといひました。彼は同時に彼を辭はる充分の自由をあなたに與へました。さういふ譯だから、あなたは第一歩を踏み出したら宜しい。あなたには権利がある、あなたは特權のある地位に居る——例へば、あなたが彼の約束を許してやらうと思ふならば……」

「ね、どういふ風に書いたらいいでせう。」

「何を書くのです。」

「その手紙をよ。」

「私の書き方を話して上げませう」「拜啓」……」

「私本當にそんな風に書き始めなくつちや成らないの。」「拜啓」なんて。」

「え、本當だ！ 尤とも、矢張り、私にも分らないが、私が思ふに……」
「で、それから？」

「拜啓——私は御詫びしなければなりません——」いや、然し、詫びする必要は無い、事柄それ自身が萬事を肯定します。只かう御書きなさい——

「一筆申し上げます。辛抱が無い事を御許しなさつて下さい。でも私この一年といふもの、希望があればこそ幸福だったのですもの。今、疑ひの日を一日も辛抱する事が出来ないからとて、私が悪いといへるでせうか。此方へいらしつて、御氣が變つたのでせう。若しさうでしたら、この手紙は私は怨みもせず、あなたを咎めもしないといふ事を御報せします。私自分があなたに取つて何物でも無いからとて、あなたを咎めは致しません。それが私の運命ですもの！」

「あなたは立派な方です。この堪へ性の無い文章を御覽に成つても、微笑もなさらず、御怒りにも成らないでせう。これは可哀相な娘が書いたといふ事、彼女は孤獨で、彼女を導くものも、彼女を教へるものも無い事、それから、彼女は自分で自分の心を馭する事も出来ないといふ事を忘れないで下さい。ですが、或る疑ひが——瞬間にしる——私の心に忍び入つた事を御許し下さい。あなたをあんなに迄愛した、又今も愛して居る女を、心の中でも、輕蔑する事は出来ません。」

「さうよ、本當にそれが私が考へて居た事だわ！」とナステンは叫んだ。そして眼には喜びの色が浮んだ。「あゝ、あなたは私が困つて居た事を解決して下さいました。神様があなたを私のところへ御寄越し下さつたのだわ！ ありがとう、ありがとう！」

「何があるがたいの。何が。神様が私を御寄越しに成つた事が？」と私は彼女の喜ばしさうな小さい顔を、嬉し氣に見乍ら答へた。

「さうよ、その事の爲めにも。」

「ナステンカ！ いや、自分と同じ時に生きて居て呉れる事を感謝し度く成る人があるものですよ。私はあなたと偶然出會はし、一生あなたを思ひ出す事が出来るのを感謝して居ます！」

「もう澤山、澤山！ ですが、御話し度い事があるから御聞き下さい。彼は來ると直ぐにこの事を何にも知らない、私の知り合ひの、誰か御人好しに手紙を頼んで私に知らせるか、手紙といふものは、いつでも萬事を盡すといふ譯には行かないから、私に手紙を書く事が出来無かつたら着いたその日の十時に私達が會ふ事にきめて置いた此處へやつて來るといふ約束をその時にしたのよ。彼がもう來た事は私知つてゐるわ。ところが、もう三日目なのに、影も形も見えなければ、手紙も來ないの。朝の間は御婆さんのところから逃げ出す事が出来ないの。今御話した親切な人達に明日私の手紙を渡して下さいな。その人達は彼のところへ渡して呉れるでせう、そして、若し返事があつたら、あなた明日の十時に私のところへ持つて來て下さい。」

「だが、その手紙は！　ね、先づ手紙を書か無くつちや駄目です！　だから、萬事明後日の事に成るでせう。」

「手紙……」とオステンカは少し間誤つて行つた「手紙……然し……」

然し彼女はいひ終ら無かつた。最初彼女は私から顔をそむけ、薔薇のやうに赤く成つたが、突然私の手に、明かにすつと前から書いてあつて、出来上つて居り、密封した手紙が觸れた。親しい、楽しく、心を奪ふやうな記憶が私の心に浮んだ。

「ル・オー——ロ、ス・イー——シ、ス・アー——ナ」私は歌で始めた。

「ロシナー」と私達二人は一緒に口の中で歌つた、私は嬉しくつて、彼女を抱かむ許りにし、彼女は赤面する事しか出来ないかの如くに赤面し、黒い睫毛に眞球の如くきらめく涙の中から笑つた。

「ぢやこれで！　ぢやさいなら」と彼女は口早にいつた。「さあ、手紙を、此處にこれを届けて下さる宛名があるの。ぢや又！　明日又！」

彼女は私の両手を懇ろに握り締め、點頭して、側通小路を矢のやうに飛んで行つた。私は彼女を眼で見送つて長い間ちつと立つて居た。

「明日又ね！」といふ聲が私の耳に響いて、彼女は漸次見えなく成つた。

第三夜

今日は陰氣な雨降りで、やがて来る老年の如くに、微光も見え無かつた。私は非常に奇異な考へ、非常に陰氣な感じに抑へ付けられて居り、いつもの如くぼんやりした疑問が私の頭に群がり——それを鎮める力も無ければ、意志も無いやうな氣がする。これ等を鎮める事は私には出来ない！

今日は私達は會はぬだらう。昨日私達が別れを告げた時、空一杯に雲が群がり出し、霧が立つた。私は明日は天氣が悪いだらうといつたが、彼女は答へなかつた。彼女は自分の希望に反對な事をいひ度くなかつたのだ。彼女には今日は輝やかしく晴れて、一片の雲も彼女の幸福に影をさし無いやうに思へた。

「雨が降つたら、御會ひしません」と彼女はいつた「私参りませんわ。」

彼女は今日の雨を氣にすまいと思つたが、彼女はやつて來なかつた。

昨日は私達の三度目の對面、私達の三度目の白夜だつた……

だが喜びや幸福は人々を如何に好へする事ぞ！　その心は如何に愛をもて溢るゝ事ぞ！　心の底迄注ぎ出し度く思ひ、萬物が喜ばし氣に、嬉々たる事を欲する。而してかの喜びは如何に傳染的なる事ぞ！　昨日私に對する彼女の語には非常な優しさがあり、彼女の心には非常な温情があつた……彼女は何て苦勞性で、懇ろだつたか、如何に優しく私を元氣附けやうとした事ぞ！　あゝ幸福の翻弄よ！　私……私はこの幸福を本物と思つて居た時には、私は彼女が……と思つて居るのだ。

だが神よ、私はどうしてそんな事を考へたのだらう。すべて既に人に取られてしまつて居て、自分のものとは何も無く、事實、彼女の私に對する優しさうのものも、私の爲めの配慮、私に對する愛……

さうだ愛も、外の或る人にすぐに會へると思ふ喜び、私をも彼女の幸福の中に包み込まむとする欲望に外ならなかつたのに、私はどうしてそんなに盲目だつたらう。……彼は來ず、私達が待ちを喰つた時には、彼女は顔をしかめ、おづく、そしてがっかりしてしまつた。彼女の動作や、彼女の語は最早餘り快語でも、ふざけつぽくも、樂しげでも無く、變な事には、望みが遂げられ無かつた時には自分自身非常に切望して居たものを私に無茶苦茶に與へやうと本能的に望んだかの如くに私に對する配慮を倍増にした。わがナステンカはひどくうつ／＼とし、非常にうるたへて居たので、彼女はとう／＼私が彼女を愛して居る事を悟り、私の憐れむ可き愛を可哀相に思つて居たやうに思へる。かくの如く、人は不幸の時には、他人の不幸を一しほ感じる。同情は破壊されずして、濃く成る……。

私は興奮して彼女に會ひに行き、非常にせか／＼して居た。こんな感じを受け、萬事幸福には終らなだらう等とは思ひも掛けなかつた。彼女は愉快さうな顔をして居た。彼女は一つの答へを待つて居た。この答とは彼その人の事、彼はやつて來て、彼女が呼べば走つて來る筈だつた。彼女は私が來るよりも丸一時間前に來た。初め彼女はいろんた事でくす／＼笑ひ、私がいつた事を一言一言笑つた。私は語り出したが、黙つてしまつた。

「あなたを見ると私どうしてこんなに嬉しいか分つて？——どうして私今日はこんなにあなたが好きなのでせう？」と彼女はいつた。

「どうして？」と私は尋ねたが、胸がどき／＼し出した。

「私あなたが私に戀しなかつたから、あなたが好きなのよ。ね、あなたの位置に外の人が居たら私を困らせたり、苦しめたりし、自分も歎き悲しみ、不幸にも成つたのでせうに、あなたは本當に氣持ちが好い方ですもの！」

そして彼女は私の手をひどく握り締めたので、私はすんでの事に叫ぼうとした。彼女は笑つた。

「あゝ、あなたは本當に好い御友達だわ！」と彼女はすぐ又眞面目に語り出した。「神様があなたを私に御寄越しに成つたのだわ。あなたが私と一緒に居て下さらなかつたら、私どう成つた事でせう。あなたは付て自分の事を考へ無い方でせう！ 信實に私の事を氣に掛けて下さるのでせう！ 私が結婚したら私達は親友に、兄弟以上に成りませう、私丸で彼と同様にあなたの事を何くれと無く思ふやうに成るでせう……」

私はその時非常に悲しかつたが、而も笑ひに似たものが私の心に動いて居た。

あなたは非常に煩悶して居ますね」と私はいつた「あなたは心配して居ますね、彼が來ないだらうと思つてるのでせう。」

「まあ！」と彼女は答へた「若し私が今のやうに幸福で無かつたら、あなたが信じて下さらない事——あなたの攻撃で私きつと泣いた事でせうよ。でも、あなたは私に考へさせ、考へる事を澤山呉れました。でも、考へる事は後にしませう。そしてあなたのおつしやる事は本當だといふ事を認めるわ。さうよ、私何だか變だわ、私本當に不安だわ、私何事も何だか餘り軽く考へ過ぎて居るやうよ。ですが一

す！ その話はそれだけでいいわ……」

その時私達は足音を聞いた、そして暗闇に私達の方へ近づく人影を見た。二人は跳び上つた、彼女はすんでの事に叫びさうだつた、私は彼女の手を放して、この場を去らうとするやうな所作をした。然し私達の間違ひでそれは彼では無かつた。

「何が恐いの？ どうして私の手を放したの？」と彼女は又手を與へ乍らいつた。「ね、どうしたの？

私達は一緒に會ひませう。私あの人に私達がどんなに仲好しか見せ度いのよ。」

二人がどんなに仲好しかですつて？」と私は叫んだ。「ナステンカ、ナステンカ」と私は考へた「その語は何て意味深長だらう！ さういふ好愛は時には心を冷たくし、悲しくする。あなたの手は冷たく、私の手は火のやうに燃えて居る。ナステンカ、あなたは何て盲目だらう！……あゝ、幸福な人間といふものは時には何て嫌なものだらう！ だが勿論私はあなたを怒つたのでは無い！」

今や、私は胸が一杯に成つた。

「ね、ナステンカ！」と私は叫んだ。「今日一日私はどうして暮したか分りますか。」

「どういふ風にして？ 早く話して下さいな！ 何故今迄何もおつしやら無かつたの？」

「ナステンカ、先づ第一、私はあなたの御頼みをすつかり濟し、手紙を渡し、あなたの御友達に會ひに行つたから、それから……それから家へ歸つて寝たんです。」

「それつ切り？」と彼女は笑ひ乍ら遮つた。

「あゝ、これで大體全部です」と私は我慢していつた、といふのは馬鹿々々しい涙が既に眼に浮び出したから。「私は、私達の約束の一時間に眼を覺したのですが、それで居て、何だか、僕は寝なかつたやうな氣がしてたのですよ。僕はどうかしたのか分らないのです。僕は何だか時がじつと動かずに居り、私には或る一つの感覺、感情があつた時から永遠に付き纏ひ、或る瞬間が水久に続き、私には全生活が立ち止つて居るやうな氣持を感じ乍ら、萬事をあなたに報せに來たのです……私は眼が覺めた時、すつと前から知つて居た、昔何處かで聞いたが忘れて居た、逸樂的に快い或る音楽のモチーフを思ひ出した時のやうな氣がしたのです。こんな氣がしたのです、それが私の心でこれ迄すつと騒いで居たのだが、今初めて……」

「あゝ、そりや一體何の話？ 私にはちつとも分らないわ。」

「ナステンカ、私はどうかしてあなたにあの奇妙な印象が傳へ度かつたのですよ……」と私は悲し氣な聲で語り始めたが、それには未だ、微かな希望だつたけれど、希望がひそんで居た。

「御止しなさいな。ねえつ！」と彼女はいつたが、忽ちこのはしつこい猫は推測したのだつた。

突然彼女は法外に御しやべりに成り、嬉々とし、惡戯好きに成つた。彼女は私の腕を取り、笑ひ、私にも笑はせやうとした。そして私がいつた混亂した語を一言々々彼女はいつ迄もからくと笑つた……私は腹が立つて來たが、彼女は突然ふさげ出した。

「あなた」と彼女は語り出した「私あなたが私を戀しないので、少しじれつたいのが分つて？ 人間の

心つて分らないものね？ この近づき難い先生だからつても矢つ張り、あなた私がこんなに馬鹿だからつて咎めちやいけないわ、私あなたにどんな馬鹿な事を考へても、すつかり、すつかり話すわ。」

「そら！ ありやきつと十一時だ」と私は遠くの塔から鳴り響くゆるやかな鐘の音を聞き乍らいつた。彼女は突然話を止め、笑ふ事を止めて、數へ出した。

「十一時だわ」と彼女はおづくした、ぼんやりした聲でいつた。

私は彼女に鐘の音を數へさせ、彼女を驚かせた事を直ちに後悔した。そして、自分の性質の悪い衝動を自分と自分で呪つた。私は彼女が可哀相に成つた、そして私がした事をどうして償つていゝか分らなかつた。

私は彼が來ない理由を探し、いろんな論證や證據を陳べて彼女を慰め出した。その時の彼女位嘯し好かつたものは無い、又實際誰でもかういふ時には、慰さめなら何にでも喜んで耳を傾け、影のやうな言拔けが見つかつても有頂天に成るものだ。

「實際、馬鹿々々しい話だ」と私は私の仕事に乗り氣に成り、自分の論證の非常な明快さを感心しながら語り始めた。「いや、彼が來る筈は無かつたのですよ、あなたが僕をぼりんやさせ、混亂させたので僕も時間の計算が分ら無く成つたのですよ……まあ考へて御覽、彼は今手紙を受取つたか、受取らないかだ、假りに彼が來る事が出來ず、手紙の返事を書かうとして居ると思つて御覽なさい、會へるのは明日から後の事です。明日明るく成つたらすぐにその事を出掛けて、すぐにあなたにも御報せしませ。」

考へて御覽なさい、どんな事があるかも知れませんよ、或ひは手紙が行つた時に家に居なくつて未だそれを讀んで居ないかも知れません！ どんな事があるかも知れませんからね。」

「さうよ、さうよ！」とナステンカはいつた。「私その事に氣が付か無かつたわ。本當にどんな事があるかも知れませんかね。」と彼女は他の違つた考へがその中に、惱ましき不調和の如く聞えはしたが、反對を示さない調子で語を續けた。「かうして下さいな」と彼女はいつた「明日成りたけ早く出掛けて、何か分つたらすぐに報せて下さいな。私のところは分つて居るでせう？」

さういつて彼女は彼女のところを私に繰り返していひ始めた。

それから彼女は突然非常に優しく、私の事をいろ／＼氣に掛けて呉れるやうに成つた。私が彼女に語つた事を彼女はよく氣を付けて聞いて居るやうに思へた。だが、何か質問をしたら、彼女は黙つて混亂してそつぽを向いた。私は彼女の眼を探るやうに見た——さうだ、彼女は泣いて居ただつた。

「どうしたの？ どうしたの？ まあ何てあなたは赤ちやんだらう！ 何て子供見たいだらう！……さあ、さあ！」

彼女は微笑み、落ち着かうとしたが、頬はふるへ、胸は今尚波打つて居た。

「私あなたの事を考へて居たのよ」と一寸の間黙つて居てからいつた。「あなたは本當に親切ですもの、若し私を感じ無かつたら私は石ですわ。私今何を考へて居たか分つて？ 私あなた方二人を比べて居たのよ、何故彼があなたで無いのでせう。どうして彼はあなたのやうで無いでせう。彼はあなたの

やうに親切ではありません。あなたよりも彼を愛しては居ますけれど。」

私は答へなかつた。彼女は私がいふのを待つて居るやうに思へた。

「勿論私に彼が未だすつかり分らないのかも知れません。ね私いつも何だか彼が怖かつたのですもの。彼はいつもそりや重々しくつて何だか威張つて居たのですもの。勿論彼はさういふ風に見えるだけだといふ事は私分つて居るわ。私よりも彼の方が優しいといふ事は分つて居るわ……私、私が——憶えてゝ？——包を持つて彼のところへ入つて行つた時に彼がどんな顔して私を見たか憶えて居るわ。でも矢つ張り私を尊敬し過ぎて居るわ。それでも私が同等で無い事が分りやしませんか。」

「いゝや」と私は答へた。「それであなたが彼を世界中の何よりも、あなた自身よりもすつと愛して居る事が分ります。」

「まあそれはさうとしても」とナステンカは天真爛漫に答へた。「今私が何を考へて居るか分つて？ 私只今彼の事を話して居るのぢやないの、一般の話をして居るのよ、これは皆少し前に私の頭に浮んだ事なのよ。ね、私達は皆どうして兄弟のやうに成る事が出来ないでせう。どうして一番いゝ人達もしよつ中外の人々に何か隠し、何か隠まつて居るやうに思はれるのでせう。無駄事をしやべつて居るので無いといふ事を自分で承知して居乍ら、どうして、自分の心中をすつかり話さないでせう。ですから、皆な急いで自分の感情を述べて、それを傷つける事を恐れて居るやうで、實際よりも無情な人間のやうに見えますわ。」

「ナステンカ、あなたのおつしやる事は本當です、ですけれど、それにはいろんな理由がある」と私はその以前よりも一層自分の感情を抑へ乍ら口をさしはさんだ。

「いゝえ！」と彼女は深く感動して答へた。「例へばこゝに居るあなたは外の人達と違つて居るわ！

私、自分が感じて居る事をどういふ風にして話したらいいか本當に分らないわ、ですけれど、例へばあなたは……今……私の爲めに何か犠牲にして居て下さるやうな気がするわ」と彼女は私をちらつと見て、おづ／＼附言した。「私がこんな事をいつたからつて怒らないで下さいな、だつて私馬鹿な娘ですもの。私世の中の事はそりや知らないのよ、ですから御話しの仕方が本當に分らない事があるのよ」と彼女は微笑まうとはして居るが、何か或る隠れた感情の爲めに打ち震へる聲で附言した「ですけれど、私只かういふ事がいひたかつたのあり難く思つて居るといふ事と、私が萬事を本當に……と思つて居るといふ事を。あゝ、神様があなたにその爲めに幸福を授けられる事を私は祈るわ！ あなたが空想家に就いて話して下さつた事は私はすつかり嘘ですわ——といふのは、それはあなたに取つては本當で無いといふ意味よ。あなたは回復なさつていらつしやるわ、あなたは御話しなさつたのとすつかり違つた人間ですわ。あなたが誰かに戀する事があつたら、神様が御二人に幸福を授けられる事を祈るわ！ 私その女の方の爲めに何にも望まないわ、だつて、あなたと一緒にならば幸福ですもの。ね、私は女ですもの、女の私がいふのですもの、信じて下さら無くちやあ。」

彼女は語る事を止めて、私の手を懇ろに握り締めた。彼も感情無しには話せ無かつた。數分間經過し

た。

「今夜彼はきつと参りませんでせう」と彼女はとうとう頭を擧げていつた。「もう遅いのよ。」
「明日やつて来るでせう」と私はこの上なく確乎たる、人を信服させるやうな調子でいつた。
「さうよ」と彼女はさつきの意氣沮喪の跡も無く附言した。「自分でも今は、彼が明日より前には来る事が出来なかつた事が分るわ。ちやさいなら、又明日ね。雨降りでしたら多分私はやつて来ませんわ。ですけど、明後日は参りますわ。どんな事があつてもきつと来てよ、きつと此處へ来てよ、私あなたに會つて、いろんな事が御話がし度いのですもの。」

それから私達が別れる時、彼女は手を私に與へ、私をまともに見乍ら「私達はいつも心を合せて暮しませうね？」

おゝ、ナステンカよ、ナステンカよ！ 私が今どんなに寂しいかを知つて呉れさへしたら！

九時が打つと直ぐに、私は家に居る事が出来無くつて、着物を着、天氣を冒して外出した。私はそこへ行つて、私達が座るところに腰掛けて居た。私は彼女の町へ出掛けたが、彼女の家から二歩許しのところへ行くと、羞く成つて、彼女の家窓も見ずに歸つた。私はこれ迄に無く意氣沮喪して家へ歸つた。何といふ濕つばい、わびしい日だらう！ 天氣が好かつたら、私は夜つびて歩き廻つた事だらう……。だが、明日、明日！ 明日は彼女が萬事話して呉れるだらう。然し、手紙は今日も来なかつた。然しそれはさうある筈のものだつた。彼等は今頃一緒に……。

第四夜

あゝ、萬事如何いふ風に終つたらうか！ 萬事何を以て結末がついたらうか！ 私は九時に着いた。彼女は既にそこへ行つて居た。私はずつと此方から彼女に氣が付いた、彼女は第一夜の如く、手摺に肘をもたらせて立つて居り、私が彼女に近づく足音にも氣が付かなかつた。

「ナステンカ！」と私は努力して激力を抑へ乍ら、彼女に聲を掛けた。

彼女は直ぐに私の方を向いた。

「えつ？」と彼女はいつた。「えつ？ 早くいらつしやいな！」

私はうろ／＼して彼女を見た。

「ね、手紙は何處にあるの？ 手紙を持つて来て下さつて？」と彼女は手摺につかまらうとし乍ら繰り返した。

「いや、手紙はありません」と私は遂にいつた。「彼は未だあなたのところへ参りませんでしたか。」彼女は恐ろしく色青さめ、長い間身動きもせず私を眺めた。私は彼女の最後の希望を打ちこわしたのだつた。

「よろしい、彼とはさいならです」と彼女は遂に弱々しい聲でいつた。「さういふ風にして私を棄てるの

だつたら、彼とはさよならです。」

彼女は下を向いた、それから私を見やうとしたが、見る事は出来なかつた。數分間彼女は自分の心と闘つて居た。突然彼女は向ふを向き、肘を手摺にもたかして、わつと泣き出した。

「ね、泣くものぢやありませんよ！」と私は語り始めた、だが、彼女を見たら、それ以上何も氣には成れなかつた。それで私は彼女に何といつたらよかつたか。

「私を慰めないで下さい」と彼女はいつた。「彼の事を話さないで下さい、彼は来るだらうだの、彼は私をそんなに残酷に、そんなに不人情に棄てたのでは無い等といはないで下さい。何故でせう——何故でせう？ 私の手紙、あの不吉な手紙に何かいけない事が書いてあつたか知らん。」

その時すゝり泣きが彼女の聲を止めた、私は彼女を見乍ら、心はひき裂かれる思ひだつた。

「まあ何て不人情に残酷でせう！」と彼女は再び語り始めた。「而かも一行も返事を寄越して呉れませぬ！」彼は少なくとも、彼には私が要らないのだ、彼は私を棄てるといふ事だけでも書いて呉れてもよさうなものです——それなのに、三日に成るのに一行も書いて寄越して呉れませぬ！ 過ちといへば只彼を愛して居るといふ事だけの憐れな、頼り無い娘を傷つけ、侮蔑する事なんか彼には何て容易い事だでせう！ あゝこの三日間といふものは何て苦んだ事だでせう！ あゝ！ 私の方から先に彼のところへ出掛け、彼の前にへり下り、泣いて、彼に少しでもいゝから愛して呉れと頼んだのだと思ふと……そしてそれから！ 聞いて下さい」と彼女は私の方を向いていつたが、その黒い眼は輝いたさうぢやな

いわ！ そんな筈は無いわ、そんな譯は無いわ。あなたか私か孰らかと思ひ違ひしてるのだわ、多分彼は未だ手紙を受取つて居ないのでせう。多分彼は未だ何にも知らないのです。誰でもどゝして——自分で判断して御覧なさい、話して下さい、どうぞ説明して下さい、私には分らないのですから——誰でもどうして彼が私に對して振舞つたやうな残酷な下等な振舞ひを致しませう。そんな事は無いわ！ 此世の中の最とも下等なものだつて、もつと慈悲深く取り扱はれるぢやありませんか。多分彼は何か聞いたでせう、多分誰か私の事を何か彼に話したのでせう」と彼女は何か問ひた氣に私の方を向いて叫んだ

「何を考へていらつしやるの？」

「ね、ナステンカ、明日あなたの代りに彼のところへ参りませう。」

「そして？」

「私は彼にいろんな事を尋ねます、萬事打ち明けます。」

「そして？」

「あなた手紙を御書きなさい。いや、是非御書きなさい！ 彼があなたの行ひを尊敬するやうにさせます、彼に萬事話して聞かせます、そして若し——」

「いゝえ、いゝえ」と彼女は遮つた「もう澤山ですわ！ 私からはもう一言もいひません、もう一行も書いて遣りません——もう澤山です！ 私には彼が分らないわ、私はもう彼を愛して居ません。私……彼の事は忘れませぬ。」

彼女は話を続ける事が出来なかつた。

「落ち着か無くつちや駄目ですよ！ 此處へ御座りなさい」と私は彼女を腰掛に座らせ乍らいつた。「私落ち着いて居るのよ。心配しないで下さい。何でも無いのよ！ 涙が出たゞけの事、すぐに乾くでせう。まああなた私が死ぬ——河へ身投げをすと思つてゐるのぢや無いの。」

私は胸が一杯だつた。私は物をいはうと思つたがいへなかつた。

「聞いて下さい」と彼女は私の手を取つていつた。「ね、あなたゞつたらこんな振舞ひはたさらなかつたでせう。あなたゞつたら、進んであなたのところへやつて来た娘を見棄てもなさらず、娘の顔に、娘の弱々しい、馬鹿な心に對する恥知らずの毒罵も投げはなさらなかつたでせう。あなたゞつたら娘を大事になさつたでせう？ あなたゞつたら彼女が一人ぼつちで、われとわが身を取締る事が出来ず、あなたを愛しずには居られぬが、それは彼女の過ちでは無い、決して彼女の過ちでは無く——彼女は何もしたのでは無い……といふ事を知つて下さつたでせう。あゝ、あゝ！」

「ナステンカ」と私は感情を制する事が出来ず、遂に叫んだ。「ナステンカ、あなたは私を苦しめます！ あなたは私の心を傷つけ、私に死ぬやうな思ひを興へて居る！ 私は黙つては居られません！ 私は今は、私の心に波打つて居るものを明かにしなければなりません！」

私はかういひ乍ら、腰掛から立ち上つた。彼女は私の手を取り、驚いて私を見た。

「どうしたの？」と彼女は遂にいつた。

「御聞きなさい」と私はきつぱりいつた。「私のいふ事を聞いて下さい！ これからあなたに御話する事は皆な譯の分らぬ事で、途方も無い事で、馬鹿氣な事です！ 無論こんな事はある筈がありませんが、私は黙つては居られないのです。それより先にあなたが今苦んでいらしやることを御詫びし度い！」

「何あに？ 何あに？」と彼女は涙を拭ひ、私をじつと見乍らいつたが、不思議な好奇心が彼女の驚いた眼に輝いた。「どうしたの？」

「亂暴な話ですが、私はあなたを愛して居るのです！ それが問題です！ さあ萬事御話します」と私は手を振つていつた。「さああなたが今なさつたやうに話續けて下さる事が出来るか、私が御話しやうとする事を聞いて下さる事が出来るか、分るでせう……」

「それから？」とナステンカは私を遮つた。「それがどうしたのです？ 私あなたが私を愛して下さいる事はすつと前から知つて居ましたの、只私はいつも、あなたは只私が大變好きだといふだけだと思つて居ました……あゝ、あゝ！」

「最初は單に好きといふだけだつたのです、然し今は、今は！ 私は丁度あなたが包を持つて彼のところへ出掛けた時と同じ状態です。いや、あなたよりもつといけない状態です、といふのは彼もあなたと同じやうに外の人は誰も好きで無かつたからです。」

「あなたは何をいつていらつしやるの！ 私あなたのおつしやる事はちつとも分りませんわ。ですけれど、何の爲めでせうか、いや何の爲めといふのぢや無いの、だけど何故あなたは……こんなに唐突に

……あゝ、私は譚の分らぬ事をいつてますね！ だけどあなたは……」
そしてナステンカは混乱して止めた。彼女の頬は輝き、彼女は涙を流した。

「どうしたらいいでせう、僕はどうしたらいいでせう。私が悪いのです。僕は瞞したあなたの……。いや、然し、僕が悪くは無い、私はさう思ひ、それを知つて居ます、だつて心に尋ねて見ても、僕は間違つて無いのですもの、といふのは僕は決してあなたに苦痛を與へる筈も無ければ、あなたを傷ける筈も無いのですもの！ 私はあなたの友達だつたが、今もあなたの友達です、私は信頼に叛いた事はありません。御覧なさい、私は泣いて居ます。涙が流れるがいい、流れるがいい——それは誰も苦しめはしません。それは乾きます。」

「御座りなさい、御座りなさい」と彼女は私を腰掛に腰掛けさせやうとし乍らいつた「あゝ、あゝ！」

「いや、僕は座りません、僕はもうここに居る事は出来ません、もう御目に掛る事は無いでせう、僕は萬事御話したら、行つてしまひます。只私がいひ度いのは、あなたは私が愛して居る事を氣が付か無かつたらうといふ事です。私は秘密を守らなければならなかつたのです。僕はこんな時に、自分の自己勝手であなを苦しめたくは無かつたのです。本當です！ だけど、僕はもう我慢が出来無く成つたのです、あなたの方から話し出したのですもの、あなたが悪いのです、僕が悪いではありません。あなたは私を逐つ拂ふ事は出来ません……」

「いゝえ、私はあなたを逐つ拂ひはしません！」と彼女は可哀相に一心におのが混乱を隠し乍らいつた。

「あなたは僕を逐つ拂は無いのですつて？ 逐つ拂ひはしないでせう！ だけれど、僕の方から、あなたから逃げ出さうと思ひました。僕は行つてしまひますが、その前に僕はすっかり御話します、といふのは、あなたが此處で泣いて居た時、僕はじつと座つて居る事が出来なかつたのですよ、あなたが泣きあなたが——僕はいつてしまひます——見棄てられ、あなたの愛が斥けられたので苦んで居た時、僕は自分の心にあなたに対する非常な愛がある事を感じました！ そして、それは非常に悲し氣に見えたので、私の愛であなを救ふ事が出来さうに無く、私は心が挫け、私は——私は黙つて居る事が出来ず、しやべらずには居られ無かつたのです！」

「それから！ 話して下さい」とナステンカは名状し難い身振りをしていつた。「多分あなたは私があるにこんな事をいふのを變に御思ひでせうが。……話して下さい！ 私あとで御話しますわ！ すつかり御話しますわ！」

「あなたは僕を可哀相に思つて居るのでせう、本當に可哀相に思つて居るのでせう！ 一度した事は改める事が出来ません。一度いつた事は取り消す事は出来ません。さうぢやありませんか。それはあなたに分つて居る。それが出發點です。よろしい。それでいゝから、まあ聞いて下さい。あなたが泣き乍ら腰掛けて居た時、私は一人で（私が考へて居た事を話させて下さい！）考へたのですよ。（勿論そんな筈はありませんけれど）私はあなたが……私はあなたが何だか……私の事は全たく別として、彼を愛し無くなつたと思つたのですよ。それから——僕はかう思つたのです昨日と一昨日とで——僕は確かに——あ

あなたに僕を戀させてしまつたと、ね、あなた自身、私はまるであなたを愛して居るのも同じ事だといひましたからね。ところでそれから？　まあ私があなたにいひ度かつた事は大體それだけです、いひ残してある事は、若しもあなたが私を愛して下さるなら、どう成るだらうといふ事だけ、それだけで、外に何もありません！　聞いて下さい、わが友よだ——だつて何の道あなたは友達ですもの——私は勿論取るに足りない、憐れな、卑しい人間です、だがそれが僕のいひ度い事や無いのです、何だか僕は自分がいひ度い事がいへ無いのです、僕は非常に混亂して居ます！　只、僕はあなたを愛しますが、よしあなたも彼を愛しても、よし、私が知らないその男をあなたが依然として愛しても、私の愛があなたの重荷だと決してあなたが感じる事が無いやうに、あなたを愛します。あなたは只いつも、あなたの側に、あなたを感謝して、あなたの爲めには……しやうと思つて居る温かい心が鼓動して居る事を感じて下さい。あゝ、ナステンカ、ナステンカ！　私はあなたに何て御恩があるでせう。」

「泣いちや嫌ですよ、私あなたが泣いちや困りますわ」とナステンカは腰掛から速に立ち上つていつた。「いらつしやい、御立ちなさい、私と一緒にいらつしやい、泣いちや嫌ですよ、泣いちや嫌ですよ」と彼女はハンケチで涙を拭ひ乍らいつた。「参りませう、多分何か御話しませうから……若し彼が私を見棄てたら、若し彼が私を忘れたら、私は今も彼を愛して居ますけれど（私はあなたを嘯し度かありません）……かです、聞いて下さい、私のいふ事に答へて下さい。例へば、若し私があなたを愛する事に成つたら、といふのは、若し私が只……あ、あなた、あなた！　私あなたの愛を笑ひ、あなたが私に戀し

ない事を賞めて、あなたを傷けた事を思ふと、それを思ふと！　あゝ！　どうして私はこの事が判ら無かつたのでせう、この事が、私はどうしてあんなに馬鹿でしたか知ら？　ですけれど……私は心を定めました、御話しませう。」

「ね、ナステンカ、ねえ。私は行つてしまひます、さうします。私は只あなたを苦めて居るだけです。今あなたは私を笑つた事を後悔して居るのですもの、あなたの悲しみに携へ、加へて、僕はあなたに……させ度く無いのです……勿論私が悪いのですが、ぢやさいなら！」

「待つて頂戴、私のいふ事を聞いて下さい、待つて下さいませんか。」

「何に？　どうして？」

「私は彼を愛して居ます、ですけれども、私はそれに打ち克つてせう、それに打ち克たなければなりません、私は決してそれに負けはしません、私それに打ち克ちつゝあるのですもの、私かういふ氣がします……。事に依つたら、今日萬事終るでせう、だつて、私は彼が憎いのですもの、あなたが此處で私と一緒に泣いて居て下さつた間に、彼は私を笑つて居たのですもの、あなたは彼のやうに私を拒ま無かつたのですもの、彼は私をちつとも愛し無かつたのに、あなたは愛して下さるのですもの、實際私もあなたを愛して居るのですもの……本當に私もあなたを愛して居ます！　私あなたを、あなたが私を愛して居て下さるやうに愛して居ます、私その事を以前に御話ししましたわ、あなたも御聞きなされたでせう——私あなたを愛して居ます、だつてあなたは彼より善い方ですもの、あなたは彼より尊とい方ですもの、

だつて、だつて、彼は——」

憐れな娘の感情は非常に烈しかったので、彼女はそれ以上の事が出来なかつた、彼は頭を私の肩、それから胸に埋めて、烈しく泣いた。私は彼女を慰め、彼女を説いたが、彼女は泣き止む事が出来なかつた、彼女は私の手を握り締め、すゝり泣きの内からいつた「待つて頂戴、待つて、もう泣かなくなつてよ！ ね……ね、……この涙……は何でも無いのよ、悲しくつて泣いたのだけ、もう泣かなくなつてよ……」遂に彼女は泣き止み、眼を拭いて、私達は又歩き出した。私は話さうと思つたが、彼女は尙待つて呉れと頼んだ。二人は黙つて居た。……とうとう、彼女は勇氣を出して、話し出した。

「かうですわ」と彼女は弱々しい、震へる聲で語り始めたが、然しそれには私の心を快い痛みで貫ぬく調子があつた。「私がそんなに矛盾して居ると思つちや嫌ですよ、私がすぐに忘れ、氣が變ると思つちや嫌ですよ。私まる一年間彼を愛しました、神様に誓つて申しますが、私心の中でも、彼に不實だつた事は決して、決してありませんわ……彼は私を軽んじ、私を笑つて居ました——彼に冥加が盡きませぬやうに！ ですけど、彼は私を輕蔑し、私の心を傷けました。私……私は彼を愛しませんわ、だつて、私は心の廣いもの、私を分つて呉れるものだけを愛する事が出来るのですもの、だつて私自身はさういふ女ですもの、彼は私に相應しません——ですけど、彼の話はそれだけにしませう。あとで私の思惑を裏切つて、後で正體を現はすよりも好かつたわ……」だつて、その話はもうおしまひ！ ですけど事に依つたら」彼女は私の手に握り締め乍ら語り續けた「多分戀全體の體が間違つた感情、幻で——惡戯や、

たわいも無い事から始つたのですわ、だつて、私そりや嚴重に御婆さんに監督されたのですもの、多分私は私を憐れんで呉れる、彼で無く外の人、違つた人を愛するのが本當でしたわ、そして……そして……ですけど、その話もう止ませうね」ナステンカは感動して息が切れて止めた「私只これが話したかつたの……私この事が話したかつたの、私が彼を愛して居ても（いえ、彼を愛したのは昔の事です）それでもあなたは矢張り私を愛して下さるなら……若し、あなたの愛が非常に大きいので、私の心から遂には私の古い感情を逐つ拂つてしまふだらうと御思ひでしたら——若しもあなたが私を憐れんで下さるなら——若しあなたが私を希望も、慰めも無い儘に放つたらかして置かないといふ思召でしたら——今のやうにいつでも私を愛して下さる氣なら——私あなたに誓ひますわ、感謝が……、私の愛が遂にあなたの愛に相當するといふ事を……手を取つて呉れますか。」

「ナステンカ！」私はすゝり泣きで息切れして叫んだ。「ナステンカ、あゝ、ナステンカ！」

「分りました、分りました！ その話はもう止ませう」彼女は凡んど自分の心を制する事が出来ずにいつた。「ね、もうすつかり御話は済みましたわね。ねえ！ あなたは幸福ですわ——私も幸福よ。その話は一切しましまい、ですけど、ね……外の話をしてよ。」

「さうなさい！ 今の話を御しまひにしませう、私は幸福です。私は——さうだ、外の事を話しませう早く話しませう。さあ！」

而かも私達は何をいつていゝか分ら無かつた、私達は笑つたり泣いたりし、たわい無い、ちぐはぐの

事をいろ／＼いひ、或る時は舗石を歩き、それから突然後戻りして、道路を横切り、それから又立ち止つて又、堤防へ戻つたりした。私達は子供のやうだつた。

「僕は今一人で暮して居るの」と私は語り始めた「だけど明日は！ 勿論、あなたは知つてるだらうが、私は貧乏だ、僕は千二百留しきや取らないのだ、然しそんな事は何んでも無い事だ。」

「勿論何でもありませんわ、それに御婆さんには年金があるのですもの、重荷には成ら無くつてよ。私達は御婆さんは迎へ無くちやならないわ。」

「勿論私達は御婆さんを迎へなくちやならない。然しマトローナも居るのだ。」

「さう、それから、フォルカも居るのだよ。」

「マトローナは善い女だが、あいつには一つ缺點があるのだ、あいつには想像力が無いのだ、まるで無いのだ、だけれど、それだつて大した事ぢや無い。」

「そんな事は何でも無いわ——彼等は一緒に暮して行けますわ、只、あなた明日私達のところへ引越して来なくちやいけませんよ。」

「あなたのところへ？ どうして？ よろしい、行きます。」

「いらつしやい、私のところから部屋を御借りなさい。てつべんの部屋がありますが、あいて居るのよ。そこに年取つた女の人が住んで居ましたが、出てしまひました。きつと御婆さんは喜んで若い人を置くのよ。私御婆さんに「どうして若い人を入れるの？」といつたの。さうしたら御婆さんはね、「私も

年取つたから、まあ考へて御覽、若い人を入れて御前の亭主にし度いぢやないか」つて。ですから、私、これやその考へとびつたりすると思つたわ。」

「何だい！」

そして私達二人は笑つた。

「ね、それはそれとして。ですが、あなた何處にいらつしたの。忘れつちやつたのよ。」

「あの道の向ふの、x橋のそばの、バラニコフの建物だ。」

「あの大きな家？」

「さうだ、あの大きな家だ。」

「あゝ知つてるわ、奇麗な家だわ、けれど、あそこを止して、成り丈け早く私達のところへいらつした方がいゝわ。」

「明日行きますよ、明日、あそこに少し間代が借りてあるが、それは何でも無い。すぐに俸給が貰へるから。」

「それから私人に稽古をして上げやうかと思つて居るの、私何か自分が覺えてから、人に稽古して上げやうと思つて居るの。」

「そりや素敵だ！ それから僕はすぐに賞與も貰へるよ。」

「ちや明日の中には、あなた私はのところの寄宿人に成るのだわね。」

「それからセヴィルの床屋へ行きませう。すぐに又やる筈だから。」

「ええ、行きませう」とナステンカはいつた「だけど、セヴィルの床屋で無く、何か外のものを見た方がいゝわ。」

「よろしい、何か外のものに行きませう。勿論その方がいい、僕は気が付か無かつたのだ……。」

私達はこんな事を話し乍ら何をして居るのか知らないやうに、無我夢中に、酔つたやうに成つて歩いた。或る時は立ち止つて長い間一つところで話し、それから又歩き出した、そして、泣いたり、笑つたりした。突然ナステンカは家へ歸り度いといひ出した、それで、私も引き留めやうとはしなかつたが、家迄送つて行つてやらうと思つた、私達は出掛けたが、十五分で、気が付いて見ると、堤防の、私達の席のそばに来て居た。それから彼女は嘆息をついたり、又涙を眼に浮べたりし、私はうろたへて興奮が冷めた……然し彼女は私の手を握り締め、私を歩かせたり、話させたり、さつきのやうにおしやべりさせたりした。

「もう家へ歸らなくちや成らない時間ですわ、きつともう随分おそくつてよ」とナステンカは遂にいつた。「もう子供らしい事は打ち切りにしなくつちやあ。」

「本當に、だが僕は今夜は寝られないでせう、僕は家へは歸りません。」

「私も眠れさうに無いわ、ね、家迄送つて下さいな。」

「さうしませう！」

「もうすぐに家へ歸らなくつちや成らないの。」

「さうだ、歸らなくちや。」

「本當にさう思つて？ だつて何時か家へ歸らなくつちやならないのですもの。」

「本當にさうだ」と私は笑ひ乍ら答へた。

「それぢや参りませう！」

「行かう！ 空を御覧なさい。御覧なさい！ 明日は實に好い天気ですよ、何といふ青空だらう、何といふ月でせう、御覧なさい、あの黄ろな雲が今月をおよつて居ます、御覧なさい！ おつと、過ぎつちやつた。見て御覧！」

然しナステンカは空を見なかつた、彼女は石にでも成つたやうに黙つて居た、と間も無く彼女はおづ／＼私にびつたり詰寄つた。彼女の手は私の手の中で震へて居た、私は彼女を見た。彼女は一層びつたり私に押し寄せた。

その時或る若い男が私達の側を通つた。彼は突然立ち止り、私達をぢつと見、それから又二三歩歩き續けた。私は胸が跳り出した。

「あれは誰だい？」と私は低い聲でいつた。

「あれが彼です」と彼女は一層びつたり、一層震へて私の方へ詰め寄せ乍ら、小さい聲で答へた……私は凡んどちつと立つて居る事が出来なかつた。

「ナステンカ！ ナステンカ！ 御前だね。」といふ聲が私達の後に聞えた、そして同時にその若い男は私達の方へ五六歩進んだ。

「お、彼女は如何に叫んだ事ぞ！ 如何に跳び立つた事ぞ！ 如何に私の腕から引き取り、彼に會ひに駆け付けた事ぞ！ 私はすっかり心がくじけ、彼等を見て立つて居た。然し彼女は彼に手を與へ、彼の腕に身を投げ入れたかと思ふ間もなく、又私の方を向き、瞬く間に私の側へやつて来たかと思ふ間もなく首を熱き、情の籠つた接吻をした。それから、私に一言もいはずに彼のところへ走り戻り、彼を引き立つた。

私は彼等を見送つて長い間立つて居た。とう／＼二人は見えなく成つた。

朝

私の夜は朝で終つた。雨降りだつた。雨が降つて私の窓硝子を淋し氣にたゞいて居た、部屋は暗く、表は灰色だつた。私は頭が痛み、くらく／＼した、熱が私の手足に忍び入りつゝあつた。

「御手紙で御座います、配達が持つて来ました」とマトローナは私の上に身を屈め乍らいつた。

「手紙だつて？ 誰からだい？」と私は椅子から跳び上りたら叫んだ。

「分りません、御覽に成るといゝわーどなたからか大方そこに書いて御座いませう。」

封を切つた。彼女からだつた！

「あゝ許して下さい、許して！ 膝まづいて御許しを願ひます！ 私はあなたと私自身とを欺むきました。夢でした、屋氣様でした……。私は今日あなたの事を思つて心が痛みます、どうぞ御許しなさつて下さい！」

私を怒らないで下さい、私あなたに對する心はちつとも變つて居ませんから。私あなたを愛しますと申しましたが、私は今もあなたを愛して居ます、本當に愛して居ます。あゝ神様！ あなた方御二人を同時に愛する事が出来ましたならば！ あゝ若しあなたが彼でありましたならば！」

（「あゝ若し彼があなたでしたら」と私の心で反響した。ナステンカ、私はあなたの語を思ひ出した！）

「私あなたの爲めに何をして御上げたらいいか分りません！ きつとあなたは悲しく寂しい事です。私あなたを傷けましたが、愛して居れば、人の間違つた行ひもすぐに忘れるものでせう。そしてあなたを私を愛して下さい。」

「あの愛の御禮を申します、あり難う！ 何故ならそれは醒めての後も長くたゆたふ楽しい夢のやうに私の記憶に生きて居る事です。あなたに對して兄弟のやうに心を開いて私の亂れた心の捧物を大事にし、介抱し、治す爲めにあなたにも寛大に受け取つて下さつた彼の時を、私いつ迄も／＼思ひ出す事でせうから……。御許し下さい、あなたの記憶は私の靈から決して消えない。いつ迄も続く感謝の

念で尊といふものに成るでせう……私はその記憶を尊びます、それに忠實です、私はそれに好きません、自分の心に好きません、私の心はもうきつかり落ち着いて居ます。これ迄いつも屬して居た彼のところへ、昨日速かに歸りました。

「又御目に掛りませう、あなたは私達のところへ来て下さるでせう、あなたは私達を見棄てはなさらないでせう、あなたはいつ迄も私の友、私の兄弟に成つて下さるでせう。そして、御會ひした時は、手を差し出して下さるでせう……ええ？手を差し出して下さるでせう、あなたは私を御許し下さいましたでせう？私をこれ迄の通り愛して下さるでせう？」

「あゝ私を愛し、私を見棄てないで下さい、私は今こんなにあなたを愛して居ますから、私はあなたの愛に相應しますから、相應して御見せしますから……あなた！來週私は彼と一緒に成る事にきまりました。彼は愛に歸りました。彼は私の事を忘れた事が無かつたのです。私が彼の事を書いたからと怒りはなさらないでせう。ですが、私し彼と一緒にあなたに御目に掛りに参り度く存じて居ます、あなたは彼を好いて下さるでせう？」

「御許し下さい、そして私の事を忘れずに愛して下さい、あなたの」

「ナステンカ」

私は長い間その手紙を何度もく讀んだ、涙が眼に湧き出た。遂に手紙は私の手から落ち、私は顔を壓した。

「あなた！もしあなた——」とマトローナは語り始めた。

「何だい？」

「天井の蜘蛛の巣をすつかり取つて置きました、御婚禮でも、會でも出来ます。」

私はマトローナを見た。彼女は依然として親切な、若いところのある老婆だつたがどういふものか、光無き眼をし、皺くちやな顔をし、腰の曲つた、老いぼれた彼女を突然心に描いた。……どういふものか突然、マトローナのやうに古びた部屋を心に描いた。壁も床も色が變り、何もかもすくけて見えた、蜘蛛の巣はいつもより多かつた。何故か知らぬが、窓の外を見たら、向ふの家も古び、すくけ、圓柱の化粧漆喰はめくれてばらばらに成り、蛇腹は割れ、黒く成り、目が覺めるやうな濃黄の壁はつぎはぎだらけのやうに見えた。

突然一瞬間雲から覗いて居た日光が又雨の被に隠れて、眼の前の萬物が又薄黒く成つたのか、それとも或ひは、私の未來の全景が非常に悲しく、厭はしく眼の前に閃いたので、私は十五年後も今と同じ部屋に年を取り孤獨で、その十五 year 間に今より賢くも成らないマトローナと一緒に居る自分の姿を見たのだつた。

然しナステンカよ！私が御前に怨みを懐き、御前の朗かな、悩み無き幸福に暗雲を投げ、私のむづい非難で御前の心に苦しみを與へ、人知れぬ悔恨でそれを毒し、幸福の時にも苦悶で胸騒ぎをさせ、彼と一緒に祭壇へ行く時に御前の黒い捲髪に卷いたかの優しい花を一つでも私が壓し潰すことがあると思

ふと……夢にもさういふ事のあらざれ！ 汝が空は晴れてあれ、汝が愛らしき微笑は朗らかにして、屈
托なかれ、汝が他の寂しき、感謝の胸に與へたるかの幸深かりし瞬間の爲めに汝に幸あれ！
神よ、幸福の完全なる一瞬間！ それは人の一生全體に取つて、取つに足らぬものだらうか。

正直な盗人

市橋善之助譯

或る朝、私が恰度勤めに出掛けやうとしてゐる時に私の料理女であり、洗濯女であり、家政婦でもあつたアグラフィエナが私の所へ這入つて來た。そして驚いたことには私に話を始めたのである。

これまで此の女は毎日々々食事について二言三言云ふ外に、六年間といふもの唯の一言も口を利かなかつた程の無口な質朴な女であつた。少くともさういふ言葉の外に彼女から何も聞いた事はなかつた。

『御免なさいまし。旦那様』彼女は突然言ひ出した『貴方はあの小部屋をお貸しなすつた方が好うございますよ』

『何の部屋を？』

『あの臺所の近くのあれですよ。何れつて解つてゐるぢやありませんか』

『して何の爲めにだ？』

『何の爲めにですつて？ でも皆さんが間借人を置くでせう。何の爲めつて解つてゐるぢやありませんか？』

『さうして、誰が借りるんだね？』

『誰が借りる！ 間借人が借りるんですよ、誰つて解つてゐるぢやありませんか』

『でもあの部屋は、婆さん、寢臺も置けないぢやないか。狭つくるしくつて、誰があんな處に住めるものかね』

『住むんぢやありませんよ！ たゞ寢泊りするだけで結構なんです。其人は窓の上でも暮せるでせう』

『何處の窓の上だね？』

『何處の窓つて解つて居るぢやありませんか。旦那様はお呆けなすつて被居います！ あの玄關の窓のことですよ。其人はあすこに坐つて裁縫か何か手仕事をするでせう。多分椅子にだつて坐るでせう。あの人は椅子を持つてゐますし、テーブルもあるし、何でもありますよ』

『して一體誰なんだ、それは？』

『其人はお人善しの苦勞人なんです。私は其人に食事も拵へて上げやうし、そして間代と食事代と合はせてみんなで毎月銀三留宛頂戴するんです……』

私は随分骨を折つて、やうやくの事で知り得たのは、或る年の老けた男が勝手部屋に食事附きで住はせて貰へるやうにアグラフィエナを説いたか何うかして同意させたらしいといふことだつた。またこのアグラフィエナは一度思ひ込んだが最後何んでも成し遂げずには置かなかつたのだ。さうでないとならぬに彼女に碌々氣も落付かせないと言ふことを私は知り抜いて居た。何か彼女の思ふ通りにならない事でもあると、彼女は直ぐに思に沈んですつかりメランコリーになつて了ふのであつた。そして此んな状態が二三週間位は續くので、さうなると食物は廢らすし、洗濯物は足らなくなるし、床は掃除しないし、一言で

言へば色々な不快なことが湧くのであつた。この沈黙屋の女は自分自身の考でもつて物事を決断するやうなことは出来ないといふ事を知つてゐた。けれども若し何うかして彼女の繊弱い頭の中に何かしら理想とか計畫とか言つたやうなものが形作られたが最後、それを思ひ切らせるのは暫くの間精神的に彼女を殺すと同様であつた。それで何よりも私自身の安息が大事だと思つて、私は早速承諾したのであつた。

『だが其男はせめて認許證か、それとも旅券か何かを持つてゐるのか？』

『何うして？ 持つてゐますとも。それは人の好きよな苦勞人だね。三留呉れるつて約束したんですよ』

翌日になると狭い一人住ひの私の家に新しい住人が現はれた。が私は忌々しがるところか卻つて心の内では喜んでゐた。まあ私は孤獨で、まるで隠者のやうに暮したるので、知人と言つては殆んどなく外出することも滅多になかつた。十年の間まるで山鷄みたいな生活をして來たので、私は勿論孤獨には慣れ切つてゐた。だが十年、十五年、或はもつと長い孤獨をアグラフエナと、此の一人住ひの家に斯うした淋しい生活を續けなければならぬとすると、余り枯淡すぎる前途に違ひない！ で此ういふ處へもつて來て、も一人の溫和しい人が住み込んで呉れるのはまつたく勿怪の幸である！

アグラフエナの言つた通り此の間借人は成る程苦勞人であつた。旅券によると彼は兵士上りで、旅券

を見ない中から彼の顔を一眼見ただけで其れと見抜いて了つた。そんなことは容易に解るものだ。アスターファイ・イワヌイチと呼ばれる其の間借人はなか／＼人の好い男であつた。私達は結構折合ひ良く暮し始めた。だが何より良いことは、アスターファイ・イワヌイチが時折自分の生涯の中から色々な歴史や出來事を話すことが出來ることであつた。私のいつもの怠惰な生活に取つては此んな話し手は實のやうなものだ。或時彼はそのやうな歴史の一つを話して聽かせた。その話は私に或る感動を與へたのであつた。其の話は此ういふ機會から切り出されたのである。

或る日私は一人つ切りで家に残つてゐた。アスターファイもアグラフエナも用件が出來て外出してゐた。ふと、次ぎの部屋に人の這入る足音がして何だか他人のやうだつたので私は部屋を出て見た。すると果して玄關に、秋になつた此の頃の寒さにも拘らず上衣一枚しか着てゐない、脊の低い見覚えのない男が突立つてゐた。

『何の用だ？』

『アレキサンドロフといふお役人さんは此方にお住ひですか？』

『そんな人は此處には居ないよ兄弟。さやうなら』

『でも庭番が此の家だと教へたんですが』と言ひながら訪ねて來た男はあたりに氣を配りながら、だち／＼と戸口の方へ後退りした。

「さあ出な。出てゆきな。兄弟。出ろつて言つてるぢやねえか」

其の翌日の午饗後、アスターファイが私が頼んだ縫ひ直しの上衣の寸法を私の身體に合はせてゐる所へまた誰やら玄關へ這入つて来たらしいので、私は戸を開いた。

昨日の男が私の眼の前で馬鹿に落付いて、着物かけから私の冬上着を脱して、それを小腋に抱へると、遽しく外へ飛び出した。アグラフェナは面喰らつて口を開けたまゝ其れをズーと見てゐたので、其の冬上着を取られまいとして何うしやうと言ふのでも無かつた。アスターファイ・イワーヌイチは盗人の後を追跡したが、十分ばかり経つとハア／＼身體中で喘ぎながら空手で歸つて来た。野郎、跡白浪と逃げ失せたのだ！

「いや失敗つたね、アスターファイ・イワーヌイチ。でも外套が残つたのは不幸中の幸ひさ！ でないと全く淺瀬にでも乗り上げたやうな目に遇ふ處だつた。拘摸野郎！」

「だがアスターファイ・イワーヌイチは此の事件に餘つ程驚いたらしく、私は彼の顔を見てゐると盜難の事なんかすつかり忘れて了つた位であつた。彼は何うしても氣を取り直ほすことが出来ないで、一寸経つてはやりかけた仕事を止め、一寸経つては今の出来事の一部始終を繰返しては話すのであつた。何うして起つたかと言ふこと、彼が此うして突つ立つてゐると、つひ二足ばかり眼の前で冬上着を脱して行つたこと、また何うした譯でそれを捕まへ損つたかといふことなどを話し終へると又仕事に取りかゝ

つたが、また暫くすると何もかも放り出して了つた。見てゐると彼は到頭立上つて庭番の所へ出来事を話しに行つて、自分の受け持の屋敷内で此んなへまなことを仕出かす奴があるかと怒鳴つた。それから歸つて来てアグラフェナに當り散らした。そしてまた仕事に就いたが、長い間さつきの出来事についてぶつ／＼と獨り言を言つて居た。何うして此んな事が起つたのか、彼が彼處に立つて、彼が此處に立つてゐるとつひ、その二足ばかりの眼前で冬上着を引はづして逃けた。それから何うした此うしたと。つまり、アスターファイ・イワーヌイチは仕事も可なり上手ではあつたが非常に几帳面な世話好きな男であつた。

「お互ひに好い馬鹿を見たね、アスターファイ、イワーヌイチ」夕方になつて私は彼にお茶を勧めながら退屈まぎれにまだ盗まれた冬上衣の話でも聴きないと思つて此う言ひ出した。そのまた話が度々繰返へされるのと、話手の眞面目な態度がどうも滑稽に感じられたのである。

「まつたく好い馬鹿を見ましたよ。旦那！ 他人の事ながらも忌々しくて仕方がありませんや。私の着物を盗られたんぢやないにしろ、實もつて癪に障りまさあ、私は世の中に盗人ほど質の良くねえ奴はあゝるめゑと思ひますよ。外のものなら無料でも手を出さないのに、彼奴等と来た日にや人の汗水流して骨折つたものを、人の大事な時間を盗むんですからね……根性の汚ねえ！ チエツ！ 忌々しくて言ふのも嫌になつて了ふ。貴方は旦那どうです。自分の物が惜しかありませんかい？」

「それは惜しいは惜しいさ。アスターファイ・イワーヌイチ。例へ物が焼けて了はうとも盗人なんかにせしめられたかないさね。まったく嫌だね」

「誰だつて盗まれてえ事ありませんや！無論盗人にも色々ありますが……所が旦那私は一遍正直の盗人に出遭したことがありませんよ」

「へえ何うして正直な盗人に？ それに一體正直な盗人がゐるのかね、アスターファイ・イワーヌイチ？」

「いや旦那、まったくさあ。正直な盗人なんて有りつこねえんです。私の言はうとしたのは、その人間は見た處正直な男だつたが盗みをしたと言ふことなんです。いやどうも可憐さうな奴でねえ」

「それは何ういふ事なんだ。アスターファイ・イワーヌイチ。」

「左様、二年ばかり前のことです。旦那。其の時分私は小一年も仕事なしでぶら／＼して居ましたが、まだ、前の勤め口を止めかけやうとして居る時分から或る落ちぶれた男と知り合ひになりました。それは或る小料理屋でしたが、其奴つたらまあ酷い呑兵衛ののらくら者の懶け者なものでした。何處かに勤めて居た事はあるが、酒癖のおかげで疾うの昔に勤め口を追はれたんです。いやはやもう仕様のない奴でしてね！ 其奴が着てゐるものと言つては兎もお話しになりませんでしたよ。時には、一體彼奴外套しかないので下に裸衣を着てゐる、のかと思はれることさへある位で手廻りのものは何でもかでも飲んで了

思ふ調子でした。それでゐて亂暴するでもなく、温順しい質で、極めて愛想のいゝお人好しでした。また何を下れと請求むでもなくもぢ／＼して居るんですが、可愛さうに先生飲みたいのだなと思つては何か呉れてやるんでした。つまりまあ此ういふ男と私は落ち合つたので、といふ事は其奴が私に付き纏つて来たといふことなんで……尤も何れにしる私に取つては同じ事です。だが何といふ男でせう！ まるでさ。犬ころみたいに付き纏つて、私の行くところなら何處へでも後を跟けて来るんです。その癖たつた一度遇つただけですが、いやもうから意久地のない奴でねえ！ 初め何うしても泊めて下れと云ふので——ぢやと泊めてやつた譯でした。見た所別に旅券も差し支へなさうだし、人間も確かだと思ひましたからね！ それから翌る日になつてもまた泊めて下れろと言ふ譯で、それに三日目も亦やつて来て一日中窓の上に坐り込んだつきり、やはり泊り込んだのでした。やあ此奴絡みつき居つたなと思ひました飲ませたり食はせたり、其の上に泊めてやつて——この貧乏者の首つ玉へ居候になつて嘔りつかれちややり切れませんね。其の以前にも此奴は矢張り此うして或る勤人の所へ行き來して其の男に付き纏つて一緒に飲んでばかり居たさうです。その男はすつかり酒浸りになつて了つて、何かの悲しみから死んで了つたといふ事でした。扱て此の男の名前はエメーリヤ・エメーリヤン・イリイチと云ひました。で、此奴何うしたもんだらう？ と私は考へに考へました。逐ひ出すのも罪な事だし、何しろ不憫な惨めな男でしたから！ そして恐しく黙り込んで、何を呉れと言ふでもなく、坐つた切り、まるでその、犬こ

ろみたやうに人の眼の色ばかり伺つてゐるんです。つまり酒が人間をあんなに駄目にしてふんですね！ 私は心の中で、さアて、此奴に何う言つたものかしらと考へました。エメリヤーマシカ、お前出て行きな。俺んところに居たつて仕方がないぜ。見當違ひだぜ。俺は自分でさへ最う直きに臆が乾上がらうと言ふのに、お前なんかを食はせやうなんて何うして／＼兎ても事だ！ と言つたら彼奴何うするだらう？ と坐つて考へました。そして心の中で此んな事を想像して見ました——先づ私の此の言葉を聞いたら彼奴きつと長いこと私を見つめることだらう。そして暫くは私の言葉が一つも判らないと言つた風に坐つてゐることだらう。それからやつとのことで其れと察することが出来て、窓から立上つて其れにある赤い碁盤縞の穴だらけの、何を包んであるか判らない、何處へでも持つて歩くあの風呂敷包を取り上げ、着てゐる外套をキチンとして暖いやうに、それにまた穴の見えないやうにと丁寧に直すことだらう——實に細い所に氣の附く男でしたからね！ それから戸を開けて、涙を溢しながら階段を出て行くだらう。だが彼奴を全く見殺す譯にも行くまいぢやないか……私は彼奴が可愛さうになつて來ました。そこで又考へました。だが俺は何うしたといふんだ！ いや待てよ。と私は獨り點頭きました。エメリヤーマシカ、お前が俺の處で飲み食ひするのも長かないんだ。間もなく俺が引越したら其の時はお前には探し出せまいよ。所でね旦那。私は直きに其處を引拂ひましたよ。其の頃私の旦那のアレキサンドル・フィリモノヴィチといふ（今は早や亡くなられた方です、南無阿彌陀佛／＼）その旦那

が私に被仰るに、お前にはほんとにお世話になつたよ、アスターファイヤ、何れまた其の中に田舎から皆歸りでもしたら忘れずにお前を雇ふからなつて。ところで私は其處の庭番として住んでゐたので——善い旦那でしたのにまあ其年に亡くなつて了ひました。で私はお葬式がすむと直ぐに身の廻りの物や幾らかの有金を持つて少の氣安めでも爲やうと考へ、とある婆さんの所に引越して其處の室の一つを借りました。其の婆さんの所には明間といつたらそれ一つきりでした。婆さんといふのは何處かで乳母をしてゐた女で、今は手當を貰つて一人で暮してゐるのです。さあいよく左様ならだ。エメリヤーマシカお前には何うしたつて捜し出せつこねえぞ！ と思ひました。所が何うでせう旦那！ 夕方家へ歸つて見ると（知り合ひのところへ行つて來たんですが）先づ眼についたのはエメリヤで、私の櫃の上に腰を掛けてゐて其の傍には碁盤縞の包みが置いてありました。彼奴は外套に包まつたまゝ、私の歸りを待つてゐたのです……それに退屈だと思つて婆さんから教會の本を借いてそれを逆さまに持つて居ました。野郎やつぱり探し出したな！ さう思ふと私の兩手はだらりと下つて了ひました。もう仕方がない——何故初めつから追つ拂はなかつたんだ？ そこで私は突然訊ねました（旅券は持つて來たかエメリヤ？）

私は其處でもつて旦那、坐つて考へ込みました。一體此のぶらく、野郎が何だ、俺に大した邪魔でもするといふのか？ すると邪魔と言つた處で大したものではないことが判りました。で兎も角彼奴も食は

中にや居れまいと考へました。それで朝に麵包一片と、味付けとして葱を買はう。晝も矢張りパンに葱をやり、夕餐もやはり葱とクワス(サイダーに似た飲料水)位にして、もしパンが欲しい時にやパンも少し呉れてやらう。そして何かお粥のやうなものでも食べたなら私達二人は腹一杯です。私は小食だし、酒飲みといふものは御承知の通り何も食べないので、彼奴はたゞウオツトカさへあれや結構なんです。此奴飲み代でもつて俺を滅ぼして了ふだらうと私は考へましたが、同時にまた、旦那、別な考へが頭に浮かんで、妙な氣になつて了ふぢやありませんか。つまり若しエメーリヤが出て行つたならば私は面白く暮せる譯のものぢやありませんでしたから……。で其の時私はエメーリヤのために慈父になつてやうと決心しました。彼女を身の破滅から救ひ出してやらう、ぶつたり彼女に酒を思ひ切らしてやらう、待てよ、と私は思ひました。よしぢやエメーリヤ、俺の所に居な、其代り俺の言ふ事を聴くんだぜ!

そこでまた心の中で考へました——彼奴に今から何か一つ仕事を仕込んでやらう。それかと云つて直ぐにと言ふ譯ぢやない。初めの中は少し^{ヤカ}漸ばして置いて、私が其の中に何かエメーリヤ、お前の腕に向く仕事を見つけてやることにしやう。何故つてそれや旦那、仕事つて言ふものは先づ第一に人間の才能と之奴が大事で^ヤからなあ。そこで私は密つと彼奴の様子を見て居ました。見てゐると、何うも仕様のない奴だ。お前はエメーリヤヌシカよ? と思はずには居られませんでした。そこで旦那、最初は優しい言葉でもつて色々と言ひきかせました。エメーリヤ、お前は自分の事を考へて見るがえ。さうして

何とか締らなくちやいけねえ、遊ぶのはもう澤山だよ! それ見な、お前は襤褸を着て歩いてるぢやねえか。お前の外套と言つたらまるで飾みたいぢやねえか、見つともねえ! もうえゝ加減に氣の附く時分ぢやねえか、と言ふと、エメーリヤヌシカは坐つて俯向いて聽いてゐましたが、どうです旦那彼奴つたらもう自分の舌まで飲んぢまつたんで、碌すつほ辻褄の合つた話は言へない始末です。此方で胡瓜のことを言ひ出すと彼奴は豆のことを答へるといふ鹽梅です! 私の言ふことを長いこと聽いてゐる様子でしたが、やがて溜息を吐くので(何をお前溜息を洩すのだ、どうしたんだねエメーリヤン、イリイチ?)と言ふと、

(何あに別に大したこつちやねえんです。アスターファイ、イワーヌイチ。氣にかけんで下せえ。實はねアスターファイ、イワーヌイチ。今日^{さばり}街路で女が二人で喧嘩してゐやしたんで、片方の女が、も一人の女の持つてゐたクリエークワ(紅莓の一種)の入つた木箱を、つひ引くり返したんでさあ)

(でそれが何うしたと言ふんだ?)

(所がね、も一人の女がまた其の女のクリエークワの箱を^{わざ}放意と引つくり返した上に足で踏つぶし始めましたので)

(それが何うしたんだ? エメーリヤイ、リイチ……)

(いやなに別に、アスターファイ、イワーヌイチ。それだけの事でさあ)

いやなに別にだつて！ いやはやエメーリヤ、エメリヤヌシカ！ と私は心に思つた。お前はその頭まで飲んぢまつたな！

（それから又ね。去る旦那がグロホワヤか、でなければサドワヤだつたか、舗道の上に一枚の紙幣を取り落したんで、すると一人の百姓が其奴を見つけて、これは俺のおめぐみだと言ふと、も一人其處に居合はした奴がそれを見て、いやそ奴は俺の幸せだ、俺がお前よりも先きに見つけてゐたんだつて……）

（ふん、それで何うした、エメーリヤン、イリイツチ？）

（其處で百姓達は喧嘩を始めたんで、えゝアスターファイ、イワーヌイチ。ところへ巡査がやつて来てその紙幣を取り上げて落し主の旦那に渡し、其の二人の百姓に拘留するから来いと脅かしましたよ）

（それで何うしたと言ふのだ？ 何か身の爲になるやうなものがあるのかい、エメリヤヌシカ）

（いやさ別にね、だが居合はした見物人がみんな笑ひましたよ。アスターファイ、イワーヌイチ）

（まあはんとうに！ エメリヤヌシカ！ 見物人が何んだ！ お前はほんとに自分の魂を銅貨三コベツクで賣り飛ばしたんだな。いいかね、エメーリアン、イリイチ。俺はお前に言ひてえ事がある）

（何ですかい。アスターファイ、イワーヌイチ）

（何かな、仕事を始めろよ、ほんとに始めろよ。俺は何遍でも繰返すがね、始めろよ。自分の身をちつ

た可憐相だと思ひねえ！

（何んな事をすれや知いんです。アスターファイ、イワーヌイチ！ 私は何をやつて好いかさつぱり判らねえだ、そしてまた誰も私を使つらや下れまいしね、アスターファイ、イワーヌイチ）

（それやお前が酒飲みだからさ、エメーリヤ、それでお前は勤め口を追ひ出されたんぢやねえか！）

（それやそうとして、あの料理屋の番頭のウラースがね、今日帳場へ呼びつけられ、居やしたよ。アスターファイ、イワーヌイチ）

（何故呼びつけられたんだ？ エメリヤヌシカ）

（それが何故だか私にや解らねんで、だがアスターファイ、イワーヌイチ。つまり呼びつけられなきやならねえから呼びつけたんでけしをうよ……）

私は考へました——いやはや俺達二人はどうあつても駄目だぜ、エメリヤヌツカ！ 俺達は自分の罪業のために神様が罰したんだ！ 此んな奴は一體何うしたら好んですかい、旦那！

だが彼奴兎ても狡猾い男でしたよ。仲で何うして！ 私の言ふのを黙つて聽いてゐるんですが、暫くして聞き飽きると、少しでも私が怒つた様子を一寸見るが早いか外套を取つて出て行つて了ふので、それなり居なくなるのでした！ 一日中ぶら附いて、夕方になると酔つはらつて歸つて来るんですが、また誰が飲ませるのか、何處から彼奴金を手に入れるのか、どうも解らないのでした。かそいつは私の

爲ぢやないんです。

そこで私は奴に言ひました（おいエメーリヤン、イリイツチ。お前今にくたばつて了ふぞ！ 飲むのは大抵好い加減にしろよ。判るか。好い加減にしろよ！ この次ぎに酔つ拂つて歸つて見ろ、上り口で夜を明かさなけやならねえぞ。家には入れてやらないからな！）

私の叱るのを聞いてエメーリヤは一日二日はザツと落付いてゐましたが、三日目には密つと出て了つたのです。いくら待つても歸つて来ない！ で私は正直な所少し心配を始め、奴が可愛さうになつて来ました。私は考へました——俺は何といふことをして了つたらう。彼奴をうんと脅しつけて。今日は何處へ行つてゐるのかしら。氣の毒な！ 死んぢまふんぢやないかな！ あゝ！ 夜になつても歸つて来ない。朝起きて私が玄關へ出て見ると、どうです。奴さん玄關口に寝込んでゐるぢやありませんか。上り段を枕にして横になり、寒さで身體中を凍えさせてゐたのです。

（おい何うした！ エメーリヤ？ 仕様がないな。何處に行つてたんだ？）

（へえ、貴方かね、アスターファイ、イワーヌイチ。こないだ大變腹を立てゝ私を玄關に寝かせるぞつて約束しなすつたね。だから私は家へ這入れないで、それで此處へ寝たんでさあ……）

私は彼奴が憎らしくもなり可愛さうにもなりました。

（おいエメーリヤ。お前はね。せめて何か別な仕事でもすばれいゝに。何だつて上り段の掃除なんかす

るんだ！……）

（その別な仕事つて何んなことですか。アスターファイ、イワーヌイチ）

お前はもう仕方のねえ男だなと私は言ふ（私は其の時ほんとに癢に觸りましたからね）せめて仕立屋の仕事でも覺えたがえゝ。何といふさままだお前のその外套は！ 穴だらけなのが不足で下り段の掃除までしてゐるんだな！ 恥しいと思つたら針でも執つてさ、ちつたあ自分の綻びもで繕つたがよい。何んて飲んだくれだらう！）

所がどうでせう旦那！ 奴さんほんとに針を取りましたよ。私は笑談で言つたのに、奴さんびく／＼して針を取つたんです。外套を脱いで置いて針に糸を通し初めましたよ。私は其の様子を見て居ましたが、解り切つたことぢやありませんか。眼は爛れて赤くなつてゐるし、手はぶる／＼慄へてゐる何が出来るものか？ 針の目にいくら突通しても／＼糸は通らないので、奴さんすつかり眼をばちくりさせてベタ／＼なめて、よりをかけたが——駄目！ とう／＼放り出して私を眺めてゐるんでさあ……

（おいエメーリヤ！ お前さんはわしに煮湯を飲ましたんだ！ 人の大勢見てゐるところだつたら首ねつちよん切つてやつたんだ！ それにしてからが俺は馬鹿正直なお前に唯笑談に以後のみせしめに叱つたんぢやないか……これから下らねえ眞似は止めて下んなよ！ 唯此うして坐つてゐてもいいから恥しい眞似はしてくれなよ。上り段なんかへ寝込んだりして俺に恥をかゝせるなよ！……）

「だからつて私にや何も出来ねえんです！ アスターファイ、イワーメイチ。私は此うして年が年中酔つばらつて下らねえ野郎だと自分で？存じちやいませあ……だが、たゞ貴方に……恩……恩人のあんにや此の胸の中ちやいつも済まねえと思つてるんで……」

と言つて奴さん蒼ざめた唇をぴり／＼震はせると、蒼白い頬を傳つて涙が一粒ほろりと落ちました。その涙の粒が刺つてない髭の上でふるえたかと思ふと、すぐさま秋嵐を始めて大粒の涙が止度なく流れました。……いやもう私は心臓をナイフでぐざと刺されたかのやうな気がしましたぜ。

私は思ひました。いやお前は涙脆え男だな、俺はちつとも知らなかつたよ！ 此うだらうとは誰だつて知るものか。誰だつて考へつくものか！ いやエメーリヤ、俺あお前からはすつかり手を引くでな、檻褌みたいは何うにでもなるがえ……

だが旦那、もう何も長つたらしく話す程のものでもありませんよ！ 第一、事件そのものが下らねえ惨めなもので、取り立てゝ言ふ程の事ぢやねえんです。例へば旦那、貴方でも此んなことの爲にあ録一文だつて遺る氣は起りますめえ。ところが私はです。たゞもう此んな事が起きないやうに何んでも呉てやりますよ。其の時分私の所に、旦那、不用になつた乗馬ズボンが一着ありました。青い甚罎縞の素晴らしい良いズボンでしたが、よく此處へやつて来る地主れんが註文して置いて、後になつてから狭いと言つて引取らなかつたので、其のまゝ私の手に残つてゐたものでした。此奴あ價打のある代物だ！ と私

は思ひました。市場へ持つて行つても五留は呉れるだらう。いやそれよりも此れでベテルブルグの紳士方にズボンを二着位に拵へられやう。そして残つた片で俺の短衣位は出来やう。これは私達のやうな貧乏者にとつちや旨めえこととしてね。ところで其の時分はエメーリヤメジカがすつかり自棄になつて沈んで居た頃で、見てゐると一日飲まないで過ごす、次の日も飲まない、其の日も酒の氣がない、可哀さうに滅入り込んで坐つてゐるのです。はゝあさては先生いよく飲代がねえのかな、それとも發心したのか、うんと俺に言はれたんで悪いと悟つたのかなと思ひました。すると旦那、つまりは此ういふことになつて了つたんで。それは丁度大きなお祭日でしたが、私はお社お社のに行つて歸つて見ると——エメーリヤが窓口に腰をかけて、一ぱい機嫌でゆらく／＼身體をゆすぶつて居るんでせう。おや！ またか！と思ひました。そこで何氣なく私は櫃の傍へ行つて見ると、これはまた何うでせう！ 例のズボンが見えないのです。彼方此方捜しても無い。何もかも掻き廻して見て、いよく／＼無いといふことが判ると、私の心臓はまるで掻き撈られるやうに感じました！ そこで私はいきなり婆さんの所へ行つて先づ婆さんを責めました。後かち考へると罪なことさね、其の癖エメーリヤが酔つて坐つて居るその證據があつても一向怪しまなかつたのです！（いいえ）と婆さんは言ふ（滅相もない、あんた、ズボンなんか、何うして私に要るんですかね、私に穿けるものでもあるめえし、私こそ此のあひだ自分の袴を貴方のお兄弟にしてやられましたよ……いいえ、確かな事は分りませんがね）といふので（ちや誰が此處に居たんだ、

誰が来たんだ?)と言ふと(いや誰も見えませんでしたよ、私はしよつちゆう此處にゐましたが、エメリヤさんが家を出て行つて間もなく歸つて來ましたがね、あれ坐つてゐるでせう! あの人に訊いて御覽なさいよ)で私はエメリヤに向つて(エメリヤ、お前何か用があつて俺の、ほら覺えてゐるだらう、例の地主さんの註文で拵へた新しいズボンを取りやしなかつたかね?)と言ふとエメリヤは(いや、サスターファイ、イワーヌイチ。私や何もその、そんなものは取らねえですよ)といふんです。

はてお可笑しいことがあるものだな! と思つて探がしに探がしましたが——無い! エメリヤはと見れば窓に坐つて身體を揺ぶつてゐるんです。私はそこで旦那、彼奴の前の櫃の上に胡坐かいて坐りましたが、急に奴の顔をじろく横眼で睨みました……アはあ! と思ふと忽ち私の胸の中で心臓が焼つるやうに感じて赫つとなりました。不意にエメリヤも私を覗めた、

(いや、アスターファイ、イワーヌイチ。私は貴方のズボンなんかその……貴方はひよつとしたら何ぢやねえかと思はつしやるかも知れないが、私は決してそんなものは取らねえですよ)

(ぢや一體何處へ行つて了つたのだ? エメリヤン、イリイツチ)

(いや、ちつとも見かけませんでしたよ、アスターファイ、イワーヌイチ)

(ぢや何かい。エメリヤン、イリイツチ。ズボンがあすこに這入つたまゝ獨りでに消えて了つたとでも言ふのかい)

(ひよつとしたら獨りでに消えたのかも解らねえです。アスターファイ、イワーヌイチ)

私は彼がさういふのを聞いて了ふと、そのまゝつと立上つて、窓際へ行つてランプに火を點けて置いて仕事に取りかかりました。私達の階下に住んでゐるお役人さんからチョッキの縫い直しを頼まれてゐたので。でも私の胸の中はまるで焼けるやうで痛みました。私の持物を有りつたけ煖爐にくべて了つても此れほどまではなからうと思はれたのでした。そこでさすがにエメリヤも私が非常に腹を立てゝるといふ事を薄々感づいたらしいです。それや旦那、自分が悪いことをして居れや恰度夕立前の小鳥のやうに、禍が來る時は遠くから感ずるものでしてね。

(あのね、アスターファイ、イワーヌイチ)とエメリヤは言ひ出しました(私の聲は震へてたのです)

(今日、醫者のアンチープ、プロホルイチが此の間死んだ馬丁の噂と結婚しやしたよ……)

そこで私は彼奴の顔をじろと睨みましたが、余つほど忌々しさに睨みつけたらしく……それがエメリヤに解つたんでせう。見てゐると、奴、立上つて寢臺の方へ近づき、其の邊を何やら捜し初める様子です。待つてゐると——長いこと奴はこそくやつてゐましたが絶へず(何うしてもないな、畜生! なくなる筈はねえんだがなあ!)と獨り言を言ふんです。何うなるかと待つてゐると、エメリヤは跣んで寢臺の下へ匂ひ込んでゆきました。と、私は堪へ切れなくなつて、

(何だつて、おいエメリヤン、イリイツチ。寢臺の下なんかへはひ込むんだい?)と私が言ふと、

(いやね、ズボンが無えかと思つてね、アスターファイ、イワーヌイチ。何うかしたら此處らへでも落ち込みはしねえかと思つたんでね)

(何です旦那、(余り忌々しいんで私は丁寧に言ひ始めました)何も旦那、そんなに私みたいな貧乏な卑しい人間の代りになつて、匍ひつくばるなんざ無駄なことですぜ！)

(だが何うしてです、アスターファイ、イワーヌイチ。私や何でも無えですが……探して見たら、事によると何とかして見附かるかも知れねえですよ)

(ふむむ……)私は言ふ(まあ聴きなよエメリヤン、イリイチ)

(何だね)彼奴は言ふ(アスターファイ、イワーヌイチ?)

(いやさお前ぢやねえかといふのさ、俺の所からあり物を、まるで盗人か掴みたいに盗んで、養つてやつた恩を返したのは?)私は言ひました。私はつまり旦那、彼奴が私の眼の前で床の上に匍ひつくばつてゐるのを見ると癪に障つて來たんです。

(いや……アスターファイ、イワーヌイチ……)彼は此う言つて置いて寢臺の下に其のまゝへたばつて了つて、長い間横になつてゐました。やがてのそく、這ひ出して來ましたが、見るとまるで敷布のやうに蒼ざめてゐました。ふと立上つて、私の傍の窓に腰掛けたが其のまゝ十分ばかり坐つて居ました。

(いや、アスターファイ、イワーヌイチ)といふかと思ふと、彼奴突然立上つて私の前へ近寄つて來まし

たが、今でも眼に見るやうですがまるで罪そのものと言つたやうな怖い様子をして居ました。

(いや、アスターファイ、イワーヌイチ)といふ(私はあなたのズボンなんか、その、取りなんかしませんよ……)

彼女は自分の身體中をがた／＼震はせて、震えてゐる指で自分の胸を打つてゐました。してまた其の聲と言つたら變手古な震ひ聲で、旦那、私の方が却つて薄氣味悪くなつて窓にくついて了つた位です。

(おいおい、エメリヤン、イリイチ)と私は言ふ(俺は、馬鹿な俺はことによると根もない事を言つてお前を責めたかも知れねえが、たのむから勘辨してくれ。なあにズボン位失くしても大したことはねえ、ズボンが無くなつたて俺達が死んぢまう譯ぢやねえからな、おかけさまで両手はあるし……盗みなんか止さうよ……貧乏な他人の厄介にならねえで食ひ代を稼がうぢやねえか……)

私の言ふのを聴き終るとエメリヤは暫く私の前に立つてゐましたが、見てゐると——ベタリと坐り込んで了ひました。そしてそのまゝ夜になつても身動きしませんでした。私が寢臺へ立去つてもエメリヤは其處に坐つて居ました。朝になつて見ると、奴さん初めて何も敷いてない床の上に自分の外套に包まつたまゝ寝てゐました。痛く卑下してしまつて寢臺に來やうとさへしなかつたのです。此うなると旦那、其時から私は彼奴が嫌ひになりました。初めの數日は憎くさへ思つたのです。例へて見ると、血を分けた子供が私のものをつばらつた上に、私の血の出るやうな侮辱を與へたといつたやう

な鹽梅でした。あゝエメーリヤ、エメーリヤ！ と考へました。所がね、エメーリヤは、旦那、それから二週間ばかりといふものぶつ續けに飲んだのです。つまり癪に障つて飲み耽つたといふ譯です。朝から出かけて夜は遅く歸つて来る。二週間といふもの奴は一言も口を利きませんでした其の時、悲しみが彼奴の身を嚙んでゐたのか、それとも自分を亡ほさうとでもしてたらしいんです。がとう／＼すつかり飲んで了つたらしく、ぱつたり止めて窓口へ坐るやうになりました。そして三日三晩も何も言はず坐り通したのを覚えてゐますが、ふと氣附くと彼奴泣いてゐるぢやありませんか、坐つたまゝで泣いてゐるんです。旦那その泣き方つたら！まるで噴水のやうで、涙を流してゐるのに自分では氣が附かないといふ風でした。でも旦那、大人が、それもゞメリみたいな年寄りが身の悲しさに泣いてゐるのを見るのは辛れえものですよ。

(どうしたエメーリヤ?) と私は言ひました。

と彼はぶるつと身を震はせました。非常に吃驚したのです。それに私はあの時以來初めて言葉をかけた譯です。

(何でもねえんです……アスターファイ、ワーヌイチ)

(安心しなよエメーリヤ、そんなに氣にすることあねえぢやねえか。何をそんなに鼻みたいに坐つて居るんだ) 私は、彼奴が可愛さうになつて來ました。

(えゝさうでがす。アスターファイ、イワーヌイチ、私は別に其んな事ぢやねえんです。何か仕事を始めてえと思つてるんでさア、アスターファイ、イワーヌイチ。)

(一體また何んな仕事をだね、エメーリヤン、イリイツチ)

(へえ、何んな仕事でもいいんですがね。前のやうに務めてみてえな奴でも、いいんです。私はもうあのフォードル、イワーヌイチの所へ行つて頼んで來やしたよ……。貴方をあんまり辱しめちや良くないからね。私はアスターファイ、イワーヌイチ。ひよつとするとその務め口を見つけるかも知れないが、其の時はすつかり返しますよ。貴方ん所で食べただけは償ひますよ。)

(澤山だよ。エメーリヤ、もう好いよ。それや悪いことはあつたにはあつたが、過ぎて了つたこつちやねえか！ そんなことあ、埃にやつちまへだ……。昔のやうに暮して行かうぢやねえか……)

(いやアスターファイ、イワーヌイチ。貴方は多分あの事をまあ……。だつて私は貴方のズボンなんぞは取りやしませんよ……)

(まあ好いぢやねえか、心配しなさんな。エメーリヤンヌシカ)

(いや、アスターファイ、イワーヌイチ。私はもうどうあつても貴方ん所にや居ねえつもりです。御免なせえ。アスターファイ、イワーヌイチ)

(まめ何だつて、エメーリアン、イリイツチ、誰がお前を辱しめて戸口から追ひ出すつて云ふんだ。私

がさうすると言ふのかね、え？

(さうぢやござせんよ。貴方ん所に此うして住んで居るのは悪るいからね。アスターファイ、イワーメイチ。いつそ出て行つた方が好いでせうよ……)

つまり奴さんすつかり氣を悪くして其のことばかり繰返してゐました。見てゐると實際彼奴は立上つて外套を肩に引かけるぢやありませんか。

(だが何處へ行かうと言ふんだ、エメリヤン、イリイツチよく分別を立て、聞き分けなせえ、何うしたんだねお前は？ 何處へ行くんだ？)

(いや許して下さい、アスターファイ、イワーメイチ、私を止めねえで下せえ、またも奴さん鼻を鳴らしましたが) 私はもう罪から脱け出るんです。アスターファイ、イワーメイチ。それにあんたは今ぢやあのようになくなつたし)

(あのやうでないつて何のやうにだい？ 何のやうにさ！ お前は本當に聽分けのねえ赤坊みてえだが一人になると死んぢまふぞ、エメリヤン、イリイツチ)

(いやアスターファイ、イワーメイチ、貴方今度家を出る時にやよく櫃を閉めて行きなせえ、だが私はアスターファイ、イワーメイチ。見ると泣きたくなりますわい……いや貴方、私を放して下さいアスターファイ、イワーメイチをして貴方ん所に居る間に貴方を侮辱した事なんか、みんな勘辨してお呉んなせ

え)

何んでせう旦那、それつ切りで出て行つちまひましたよ、其日一日中待つてゐて今にも歸つて来るだらうと思つてゐましたが——歸つて來ません。翌日も來ないし其の翌日も——姿が見えない。私は驚きましたすつかり氣が減つて了つて、飲みもせず食ひもせず、眠りもしませんでした。私は彼奴のために氣抜けがしたのです！ 四日目には私は外へ出て居酒屋を覗き込んで訊ね廻りましたが——居ないエメリヤンシカはいよく居なくなつたな！ (さてはお前はお陀佛になつて了ふたのか？)と思ひました(事によると其處へらの塀の際にでも飲み潰れて、今時分は腐れ丸太みたいに轉つてゐるかも知れない？)

精も根もつき果て、私は家へ歸りました。翌日にはまた探しに出かけました。そして何だつてあの愚かな男が勝手に出て行くやうに仕向けたのかと我身を呪ふのでした。五日目になつて見ると夜明け方(其日は祭日でした)ぎいと戸の開く音がするので、見るとエメリヤンが這入つて來たのです。怖しく青ざめて、頭の毛はすつかり泥塗れになつて、見たところ道傍にでも寝てゐたらしく、顔は附木のやうに痩せ削けてゐました外套を脱いで、私の傍へ來て櫃の上に坐つて私の顔を見てゐるんです。私は非常に喜んだとはいへそれと同時に前よりも烈しく此の野郎といふ氣が心を捉へました。それはつまり旦那假りにです、私が此ういふ道德的の罪惡を犯したとすれば、其の時は本當の處犬のやうにのたれて死に

しやうとも歸つちや來ないだらうと思つたんで。所でエメリヤは歸つて來たんでさあ、でもね、他人が此ういふ境遇に居るのを見るなあ如何にも辛れえものです。で私は優しく愛想よく、彼を慰めました（おいエメリアメシカ、お前が戻つて來て何より嬉しい、お前が少し後れたらまた其處いらの居酒屋を廻つて訊ねに行く處だつたよ。お前食べたかい？）

（食べました。アスターファイ、イワーヌイチ）

（うんと食べたのか？ そうれ兄弟、昨日のスープが少し残つてゐる。これは牛肉の奴だぜ、空計ぢやねえぜ。それに又此處に葱も、パンもある。食べなよ身體に取つた無駄なものぢやねえよ）

で彼に出してやると、彼奴、まる三日間何も食はなかつたかのやうに如何にも餓えてゐるやうでした。多分鐘じさが奴を此處へつれて來たのでせう。惨めな奴を見てゐると私は氣が和いで來ました。一つ一本買ひに行かうかしらん。そして彼奴の氣を晴らしてやらう。そしてきつぱり片を附けて了はう、澤山だもう俺はお前に怨みなんか持つてやしないよ、エメリヤメシカ！ そこで私は酒を買つて來たのです。そうよ、エメリアンイリツチ。お祭りに一つ飲まうぢやねえか。お前飲むが身體の薬だよ。）すると、彼奴手を差し延べました。ムキになつて手を差し延べて取らうとしましたが、ふと止めて了ひました。しばらくそのまゝでした、見てゐると、盃を取り上げて口へ運びましたが、酒はたら／＼と袖に溢れました。で愈々口まで持つて行つたと思ふと直ぐさま机の上に盃を置くのでした。

（何うした、エメリヤメシカ？）

（いえ、何あに私は、その……アスターファイ、イワーヌイチ）

（干さねえつてのかい？）

（へえ、アスターファイ、イワーヌイチ、もう何です。これから飲まねえつもりです）

（何かい、お前はすっかり酒を止しまふといふのかい、エメリヤメシカ、それとも今日だけ飲まねえといふのか？）

彼奴は黙つてゐました。見てゐると彼奴は片手の上に頭をのせました（何うした、病氣にでもなつたのかい、エメリヤ？）と云ふと、

（へえさうなんで、氣分が悪いんでさあ、アスターファイ、イワーヌイチ）

私は彼奴を寢臺へつれて行つて寝かしてやりましたが、見ると實際不可なのです。頭には熱があるし、身體にも熱がある様子です。私は一日奴の傍に坐つてゐましたが夜になると一層悪くなりました。私は彼にクワースとバターと葱を混ぜて其の中にパン片を入れてやりました。さあ、チユーリヤ（飲料水の中にパンやビスケット類を浸せるもの）でも食べたらどうだ。治るかも知れないよと言ふと、彼奴頭を振つて（いや、今日はもう食べますまい。アスターファイ、イワーヌイチ）と言ふんです。でお茶を入れましたか、これはみんな婆さんの金を借りたのです。しかしどうも思はしくありませんでした。此奴

は不可ないぞ！と思ひました。三日目の朝私は醫者の所へ行きましたが、此の醫者は近所に住んでゐる知り合のコストロ、ブラーウオフといふ男で、私は未だボツミャーギン且那の所に勤めて居た時分に知り合ひになつたので、よく私を治療して下さいました。其の醫者がやつて来て診察しましたが（どうも此奴め駄目だよ。私を呼んでも仕様がないな。でも粉薬でも置いとかうかね）と言ふんです。けれども私は其の粉薬は服ませませんでした。屹度あの醫者が冗談言つて居るんだと思つたので。その内に五日目になりました。

彼は私の前に寝てゐて息を引取るらしいのです。私は窓際に坐つて仕事をしてゐたし、婆さんは煖爐をたいて居ました。皆黙り込んでゐました。私は此のノラクラ者の事を思つて心が裂けるやうでした。それやまるで血を分けた子供を葬るやうな気がしたのです。やがてエメーリヤが私をぢつと見てゐる様子に気がつきました。朝の中から彼奴は元氣附いて來たらしく何やら物を言ひたさうだけれど、言ひ出せないといふ様子でした。やがて奴さんの顔を眺めると、眼には如何にも切なささうな夢を浮べて私から眼を離しませんでしたが、私が彼を見ると直ぐに眼を伏せるのでした。

(アスターファイ、イワーヌイチ)

(何だい？ エメーリヤヌシカ)

(あのね、私のこの外套を市場へ持つて行つたなら餘つ程賣れるでせうかね？ アスターファイ、イワー

ヌイチ)

(さあウンと呉れるか何うかそ奴は解らねえよ、ひよつとしたら三留位は呉れるかも知れねえよ、エメーリヤン、イリイツチ)

だがあんな物は實際市場へ持つて行つた所で、此んながら、くたを賣るなんて馬鹿なと眼の前で嘲笑はれるのが落ちで、一文にも成りつこないんです。私は彼奴の馬鹿正直な性格を知つたのでさう言つて慰めたまでのことです。

(私も、アスターファイ、イワーヌイチ、あいつを持つて行けや銀貨三留にやらうと思ひましたよ。あいつは羅紗物ですからね、アスターファイ、イワーヌイチ、羅紗物なら何うしたつて三留にならねえかねえです)

(別らねえよ、エメーリヤ、イリイツチ。だが持つて行くとすれや無論初めつから三留は言ひ出さなければ不可ねえさ)

一寸黙つてゐてエメーリヤは又呼びました。

(アスターファイ、イワーヌイチ)

(何だね、エメーリヤヌシカ？)と訊くと、

(貴方ね、私が死んだら此の外套を賣つて下だせえ。私を包まんでもようごはす。私はこうして此儘寝

ますべえ。あの外套金目のものだから貴方のお役に立つかも知れねえ)

それを聞いて私は、旦那、言ふに言はれぬ程胸が押しつけられました。此際の悲しみが私の心によつて来たんだなと思つたのです。此うして一時間経ちましたが、私はまた彼を見つめると、彼奴はまだ私を見つづけて居ましたが、私と視線がばたり遭ふとまた伏せて了ふのでした、

(水は欲しかねえか、エメーリヤ、イワイツチ?)

(何うか一杯下せえ、アスターファイ、イワーヌイチ)

で、私は飲ましてやると、ぐつと飲み干して(有難う、アスターファイ、イワーヌイチ)

(何かもつと欲しくはねえか、エメーリヤヌシカ?)

(いや、アスターファイ、イワーヌイチ。何も欲しかありませんや。だが私はその……)

(何?)

(あのね、あの事ですが……)

(何の事だへ、エメーツヤヌシカ?)

(ズボンですが……あの……あれをあの時、貴方んとこから取りましたんで……アスターファイ、イワーヌイチ……)

(何う、神様がお前をお許しなさるよ、エメーリヤヌシカ、思へばお前は本當に不仕合な男だな!

安心して逝きなよ……)と言ひましたが、私は旦那、魂が掴まへられたやうな気がして、眼から涙が込み上げて來るのでした。私は暫く顔をそむけてゐました。

(アスターファイ、イワーヌイチ……)

見ると、エメーリヤは何やら私に言ひたさうで、身體を少し擦けて氣を焦り、唇を動かしてゐるので……急に顔が眞赤になつて私を見つめました。……やがてまただんく蒼ざめて來て、忽ち身體を落し、頭を後へだらりと投げて、ホツと息を吐くと、其のまゝ呼吸を引取つて了つたのです……)

永遠の夫

市橋善之助譯

第一章

ウエリチャーニノフ

夏に成つたが、ウエリチャーニノフは、豫期に反して、ベテルスブルグにとどまつた。彼が計畫した南部露西亞の旅行はおじやんに成り、彼の事件はどうすることやら分らなかつた。この事件——所有地に關する訴訟はひどく風向きが悪く成つて來た。三ヶ月前には、極めて明々白々で、凡んど争ふがものはない事件に思はれて居たに、突然、まるで風向きが變つて來た「本當に、すっかり間が悪く成つて了つた！」さう、ウエリチャーニノフは思ひ出したやうにむら／＼と成つて、獨語を繰り返すやうに成つた。彼は或る敏腕な、金の掛る、有名な辯護士を雇つて居て金は惜まなかつたが、せつちちなのと、任せ切れない氣持ちがするので、自分でも事件に干與する氣に成つた。彼は書類に眼を通し、辯護士が二も無くはねつけたやうな申告書を書き、あちらの法廷から此方の法廷へと走り廻り、證據を集めたりしたが、邪魔つけになつたことだらう。何しろ、辯護士もぶつ／＼いつて、彼を夏間の別荘へ追つ立てやうとした。だが、ウエリチャーニノフは立ち去る氣にも成れなかつた。絶えず神経を荒すベテルスブルグの塵、息も詰まるやうな暑さ、白夜に——彼は町で會つて居た。彼の借間は「大劇場」の近くに

あつた。彼はつい近くにそこへ入つたのだが、それも失敗だつた。万事やつち／＼ちりだ！と彼は思つた。彼の神経過敏は、毎に進んだが、彼はすつと前から神経過敏、憂鬱症の氣程があつた。

彼は經驗を廣く、深く積んだ男だつた。彼は決して若いといふ方ではなく、三十八か三十九にさへ成つて居た。彼自身もいつて居るやうに「老年は」彼を「だしぬけに」訪れたのだつた。然し、彼自身も、彼ははいゞ、自分の年齢の數よりも、笑で餘計年を取つた。若し彼が精力の衰へるのを感じるやうに成つたとするならば、その變化は外からといふよりも内から來て居るといふことを知つて居た。見たところでは、彼は未だ強壯で、達者らしかつた。彼は脊の高い、がつしりした體格の男で、髪の毛は灰色の交らない、濃い亞麻色で、長い、美しいあごひげは彼の胸の凡んど中ば迄垂れ下つて居た。一寸見ると、彼は少し不活潑で、無骨に思はれるが、よく注意して見れば、彼がたしなみのいゝ男で、貴族の教育を何時か受けた人間だといふことがすぐに分るだらう。ウエリチャーニノフの作法は、彼の後天の不機嫌、不活潑に累されず、自由で、大膽で、おまけにしとやかだつた。そして彼は今でもまるで狐疑しない、附上つたづら／＼しい自信をうんと蓄へて居た。彼は單に利口な男である許りで無く、中々分別のある男で、まあ教育もあり、才能も明かにあつたが。彼の快活で、色艶の好い顔は、昔は、女の注意を索いた、女見たいに優しい顔色が特色だつたもので、今でも、彼を見て「素晴らしい健康の標本だ！ 素敵な顔色だ！」といふものもあるのだつた。而かも、この健康の標本は無慘にも神経衰弱といふ持病があつた。彼の眼は大きくつて青くつて、十年前にはたしか魅力を持つて居た。彼に接するものすべての心を

とらへずには居なかつた程陽氣で快活で、氣樂さうだつた。今や四十になん／＼として、快活さと上機嫌とは凡んど姿を隠した。その眼は既に細かい皺に取り圍まれ、身持ちの如何はしい疲れ切つた男の冷笑、表裏反覆、すん／＼増し行く諷刺、新しい、他の感情——悲しみと苦痛——特別に何事かあつてさうといふのではないが、烈しいぼうつとした一種の悲しみを表はすやうに成つた。この悲しみは彼が一人で居た時に殊に著るしかつた。そして可笑しなことには、つい二年前迄は、氣輕に、陽氣に騒いで遊ぶことが好きで、滑稽な話をするのが素敵に巧かつたこの男が、今や何ものにもまさりて、只一人居ることを好くやうに成つた。ひつぱくして居る今だからとて、捨てるには及ばなかつた多くの知己を意識して捨てた。尤もこれには彼の虚榮心も手傳つた。虚榮心と、疑ひ深いのと爲めに、彼は昔からの知己との交際を我慢することが出来なかつた。だが、孤獨で居る内に、彼は虚榮心も段々性質が變るやうに成つた。それは衰へはしなかつた。全たくその反對だつたが、それは彼に取つては新しい一種特別の虚榮心に成育するやうに成つた。それは時々別種の原因——以前だつたらまるで考へる事も出来なかつたやうに思はれる思ひ掛けない原因、これ迄よりも「一段上の」原因で苦しむやうに成つた——「若しさういふ語を使つてもいゝとするならば、若し實際、高尚な原因とか、低級な原因とかいふものがあるとするならば……」かう彼は自分で附言していつた。

さうだ、彼はそんなに迄成つた。彼は若い時なら二度と考へなかつたと思はれるやうな、一種高尚な觀念で苦勞して居た。彼は心の中で、本心からそれ等のあらゆる「觀念」を「高尚」といつて居たが、

(彼が氣がついて驚いたことには)それ等の觀念を内心から馬鹿にすることが出来なかつた。これ迄にそんなことは絶えて無かつた——勿論、それは彼の心の中だけでの話で、人中ではまるで違つて居た！彼は——若し何か事があれば——すぐ翌る日にも、彼の良心のあらゆる神秘的な、崇敬な決心に背ひて、平氣の平左でこれ等のあらゆる「高尚な觀念」を非認し、勿論、何もかも承認せず、最先に立つてそれ等を嘲笑するだらうといふことはよく承知して居た。そして、彼は近頃、それ迄彼を支配して居た「低級な考へ」を犠牲にして、或る實際可成りな、思想の確固獨立を得たに拘らず、そのことは事實だつた。そして、朝起きて、眠れなかつた夜の間に経験した思想や感情が羞しく成つたことが如何に屢々あつたことで！彼はこの頃はしよつ中眠れない爲めに苦んで居るのだつた。彼は前から、自分が何事にも、重大なこと許りでなく下らないことにも神經質に成つたといふことに氣がついて居た。それで、彼は成り丈け自分の感情に動かされないことにした。だが、彼が見逃すことの出来ない事實があつた。かういふ事實のあることを厭でも應でも認めなければならなかつた。近頃の思想感情は夜に成るとまで變化することがよくあつた。そして過半は、朝、彼を訪れたものと似もつかぬものだつた。この事は氣に成つた——で彼は、有名な、尤も知り合ひだつた醫者に相談さへして見た。彼はそれを勿論戯談半分に話した。彼が受取つた返答はかうだつた。觀念及び感情の變化、猶一步進んで、二つの、はつきりした、思想、感情の傾向を有することは、「考へたり、感じたりする」人々の間の普遍的な事實である。一生の確信が憂鬱な不眠の夜の魔力で變ることもあれば、非常に重大な決定を無闇にすることもある。だ

が、これ等は勿論、或る程度迄の話で——實際、若し當人が、自分の感情の二重性を意識し過ぎて、それが彼の苦痛の原因になるやうなことに成つたら、早速處置をほどさねばならぬとのことだつた理想をいふと、生活の方法を根底から改革し、食物を變へ、或ひは思ひ切つて旅行するといふ。通じ薬も勿論有益だとのことだつた。

ウエリチャーニノフはそれ以上聞かうとは思はなかつた。だが、病氣だといふことがはつきり分つた。

「だからこれ等は單に病氣に過ぎないのだ。これ等の「高尚な觀念」も單に病氣に過ぎないのだ！」彼は時々、かつと成つて、一人叫ぶのだつた。彼はこれを承認するのが非常に厭だつた。

だが間もなく、専ら夜の間だけに限つたことだ、朝にも繰り返されるやうに成つた。只違ふのは夜よりも辛く、後悔の代りに怒り、感動の代りに嘲弄を含んで居るのだつた。實際かういふことが生じた。彼の過去、而かも遠い過去の或る事件が突然、どういふものか、段々度數を増して彼の心に歸つて来るやうに成つたが、その歸つた方が變だつた。例へばウエリチャーニノフはずつと前から記憶力のなくなつたことをこぼして居た。彼はよく知り合ひの顔を忘れる。で向ふでは彼が出會しても知らぬ顔をして行つたと思つて氣を悪くするのだつた。彼は時には、數ヶ月前に讀んだ本をすつかり忘れるやうなこともあつた。然るに、毎日さうだなどと思ふことがあり（彼の非常な心配の種に成つて居る）この記憶力の喪失に拘らず、遠い過去に關するあらゆること、十年も十五年もすつかり忘れて居たことが、突然、何

だか又それ等を經驗して居るやうに感じた程、驚ろく可き正確な委細と印象を伴つて彼の心に浮ぶことが度々あるのだつた。彼が思ひ出した或る事實の如きは、跡方もなく忘れて居たものだつたので、それを思ひ出すことが出來たのは、彼には奇蹟りやうに思へた。だが、これだけではなかつた。又實際、廣い經驗を有する人にして、誰か、何か奇妙な記憶を有せざるものがあらうか。だが、問題と成るのは、思ひ出されたものが皆、全たく新しい、驚ろく可き、そしてそれ迄想像も出來なかつたやうな見方も伴つて歸つて來て、誰か、故意とそれを持ち出して來るやうに思へたことだつた。彼が思ひ出した二三のことが、何なれば今絶對の惡事に思へたか。そしてそれは單に彼の心の判斷の問題には止まらなかつた。彼は自分の陰鬱な、孤獨な、病的な心に餘り信用を置いて居なかつた。だが、それは呪で、凡んど涙、心の中での涙を誘ひ出すまでに成つた。二年前には、若し御前は何時か涙を流すやうに成るだらうといはれても、それを信じなかつた。だが最初は、彼が思ひ出したことはセンチメンタルなことで、屈辱的なことだつた。彼は世間での失敗や屈辱を思ひ出した。例へば彼は或る陰謀家に讒言せられて、遂に或る家へ出入りすることを辭はられたこと、又例へば餘り久しからぬ前に、おつびらに、はつきり侮辱を受けたのに、その無禮者に果し状もつけなかつたこと。非常に愛らしい女のサークルで、すてきに面白い諷刺の題目にされ乍ら、巧い返答が考へつかなかつたことなどを思ひ出した。彼は——尤とも一寸した借金ではあるが——行き來することも止めて、その人のことはよくはいつて居ない連中に借りた——信用貸で——二つ未だ拂つてやつて居ない借金のことも思ひ出した。彼は又（餘

程どうかした時だけの話だが、二つの財産、兩方とも可成りな財産だったが、此上なく馬鹿金を使つて、それ等を使い果したことを思ふとくよく／＼した。だが間もなく彼は「一段上の」ことを思ひ出すやうに成つた。

例へば、突然、思ひ掛けなく、忘れて居た、すつかり忘れて居た、無邪氣な、白髪の、可笑しな、年取つた書記の姿を思ひ出すのだつたが、ウエリチャーニフは彼を、何時かずつと／＼前に、えら／＼な顔がしたい爲めと、巧く行つたが、面白い冗談の爲めに、人中で、平氣の平左で侮辱したことがあつたが、その冗談は繰り返しやつて、ウエリチャーニフはメートルを揚げたのだつた。その事件はまるで跡方も無く忘れて居たので、その老人の名字も思ひ出すことが出来ない程だつたが、その出来事の周圍は可笑しい程はつきりと彼の心に立ち現はれた。彼はその老人が、もう餘り若くないのに未婚で、町の世間話の話題に成つて居た自分の娘を辯護して居たのをはつきり思ひ出した。老人は段々氣色ばんで返答するやうに成つたが、皆なの前で俄かにわつと泣き出したので、或る感動を與へた。皆なは終ひに、面白半分は彼を三鞭に酔はせて、わつ／＼と笑つてしまつた。そして、今や、ウエリチャーニフは突然、その老人が子供のやうにべそを掻いて、顔を手で隠したのを思ひ出したら、何だか、それを忘れたことがなかつたやうな氣が俄かにして來た。そして妙なことに、その時にはそれ等、殊に二三の細事、彼が手で顔をおほつた有様の如きは非常に面白いことに思へて居たが、今はまるでその反對だつた。

後で又、彼がほんの冗談に、或る學校の教師の非常に可愛らしい細君の讒言をいつたのが、その讒言が夫の耳に届いたことを思ひ出した。ウエリチャーニフはその後間もなく町を去つたので、彼の讒言のもたらした最後の結果がどう成つたか知らないのだが、今や彼はかういふ風に成つて片がついたかも知れないといふ想像を始めた。——若しこの記憶に突然、勞働社會の若い娘に關するすつと新しい回顧の後継ぎが出来なかつたのだつたら、彼の想像がどこまで進まないものでなかつたかも知れない。扱て、その娘には、彼が牽きつけられもしなかつたのだが、その娘のことでは現に羞しく思つて居るといふことを承認しないわけには行かなかつた。だが、どうしてそんなことをしたのか自分乍ら分らかつたが、彼は彼女に浮き目を見せ、ベテルスブルグを立つた時には（尤とも暇が無かつたのだが）さいならともいはずに、彼女は自分の子供をひよいと見棄て、しまつた。彼はその後まる一年、その娘を見つげやうとしたが、行衛が分らなかつた。彼にはさういふ思ひ出が數限りなくあるやうな氣がした——そして一つ現はれると、外のものが澤山續いて顔を出すやうな氣がした。段々彼の虛榮心も傷つき出した。作者は既に彼の虛榮心が一種特別のものに變つたといつた。それは事實だつた。（餘りないことではあつたが）どうかすると彼はひどくほんやりすることさへあるやうに成つて、自家用の馬車がないことも羞しくなく成り、此方の法廷から彼方の法廷へとてくで歩きいくらか身なりもかまはないやうに成つた。だから若し誰か彼の知り合ひが町中で、諷刺的な眼つきでしげ／＼彼を見守つたり、又はひよいと知らぬ顔をするやうなことがあつても、實際彼は眉一つも動かさずに傲然として擦れ違つたかも知れない